Z32-B88

金の星

十一月号

第八巻
第十一號

国立国会
8. 3. 2
図書館

巖谷小波閲・鹿島鳴秋著
橋本邦勅・太田三郎
細木原靜岐・岡野榮
杉浦非水 畫

オハナシ

童話も
童謡も
昔のことも
今のこともある
面白くて
爲めになる
オハナシ

四六倍假製全五册
紙數各册八十餘頁
定價各壹圓
送料各八錢

巖谷小波著
岡野榮・小林鐵吉
杉浦非水 畫

日本一の畫噺

繪が一頁に
お噺が一頁
繪が踊れば
お噺も踊り出す
これこそ本統の
日本一の畫噺

袖珍假製全三十五册
紙數各册三十餘頁
定價各貳錢五錢
送料各金四錢

巖谷小波著
太田三郎・岡野榮
細木原靜岐 畫

オトギトウエ

歌と繪と
次々に續いてゆく
印象の濃い本
牛若丸は？
舌切雀は？
運動會の賞品は！

四六倍判假製全三册
紙數各册三十餘頁
定價各八錢
送料各六錢

東京日本橋通
丸善株式會社
東京一神田・三田・丸ビル
大阪 神戸 京都 名古屋 横濱 福岡 仙臺 札幌

酒は、食物最良、健胃にあり

金の星叢書(1)　佛國ジユウール・ヴエルヌ原著　霜田史光先生譯述・寺内萬治郎畫伯　裝幀・挿畫

十五少年漂流記

フランスの有名なお話で、日本でも隨分早くから知られて、その當時の少年達が夢中になつて讀んだ大評判の本です。

十五人の少年が暑中休暇を利用して汽船に乘つて海を航海することになつた處からお話が始つてゐます。いよ〳〵船に乘込んで出帆の用意をしてゐる内に、一人の少年の惡戯から大人がまだ一人も乘込まない内に船が港を出てしまつたのです。しかも、大暴風雨に出あつて、波の間に〳〵船は流されて、遂に大海に出てしまひます。そして、幾日かの後に大西洋の一孤島に漂流する事になります。

この島で十五人の少年が暮さなければならない事になつて、救ひの船の來るまでの長い月日を、樣々の困難と戰ひ、冒險を行つてゆくのを書いたものですから、その面白さは一度讀んだら到底忘れられないスバラシイ物語です。

この本こそ、是非一度讀んでごらんなさいと皆さんにおすゝめしたいものです。

四六判箱入顔美本
内容二七〇頁
挿畫澤山
定價壹圓廿錢
送料六錢

東京本郷勸坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

世界少年少女名著大系(29)　金の星社編・挿畫寺内萬治郎畫伯

ジャンバルヂャン

ユーゴーの大傑作『あゝ無情』を少年少女の讀物として書いたもので、前半は『金の星』誌上に掲げられて大評判を受けたものです。

主人公ジャンバルヂャンは、貧しいためにパン一切を盜みました。そのために、捕つて牢へ投げこまれました。

牢を破つて再び明るい世の中に出て來たものゝ、誰一人として相手にしてくれる者もありません。そこで、ジャンバルヂャンは再び泥棒となりましたが、エミエル僧正に救はれほんせんと悟つて、遂に眞人間となり、それから偉い働きをするやうになりました。

その間には、次ぎ〳〵と樣々の驚くべき事件が出て來ます。可愛いゝ娘のために髪の毛を切つて賣る母親もあらはれます。また、聞くもあはれな、少女コゼットの物語も出て來ます。全篇を通じて、ジャンバルヂャンの爲めに、涙なしには讀めない物語です。

本書こそ、不朽の名著でありますから、是非御一讀下さい。

四六判箱入顔美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷勸坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

童話讀本(3)　沖野岩三郎著

笛吹川

裝幀・挿畫・寺内萬治郎

目次

大統領様へ
びんぼふ大黒
メンコン蛙
冬枯れ
賢い裁判官
黒いちいさん
身代り
守り袋の神
頭と足とだけの從五位様
笛吹川の怪
鯨つて來た與志喜

沖野先生の童話讀本は、そこらの有りふれた編纂ものではありません。また、外國讀本の飜譯や燒直しでもありません各篇とも、そのまゝ日本の少年少女が讀んで慈味となるやうな、尊い教訓と崇高な藝術とを持つた著者の創作です。從つて、模範的課外讀本として、この童話讀本を用ひてゐる學校は數知れずあります。こゝに、第三編『笛吹川』を加へましたから、いよ〳〵大評判となりませう。御愛讀を待つ

四六判箱入美本
内容一八〇頁
挿畫三色版外十一
定價金壹圓
送料六錢

東京本郷勸坂町
金の星社
振替東京五九九六番

永橋卓介編　高坂元三裝幀

世界童話叢書第八編
エジプト童話集

四六判箱入美本
本文三〇六頁
原色版四枚
凸刷版挿畫二十枚
定價金一圓五十錢
送料十二錢

新刊

目次

寶藏を破つた大泥棒	天地のはじめ
木乃伊と寶法の本	呪の黑箱
スフインクスの秘密	拔け出た魂
三つの呪	二十日鼠の勝利
不思議の島	エジプトの滅亡
クウフウ王と魔法使	

ミイラ・スフインクス・ピラミッドと云ふ名を聞いたゞけでも如何にエジプトと云ふ國が謎の國であり又、不思議な國であつたかと云ふ事がお判りになりませう。かうした不思議な國、謎の國であるエジプトから生れ出た童話が自ら獨特な面白味を持つてゐるのは、今更申すまでもない事であつて、又、その上に、おそらく童話としては世界最古のものであらうと信じます。

從來の國のものとは全然その趣を殊にしたお話と、お馴染の高坂元三先生の裝幀と相俟て、此エジプト集は屹度本叢書中の呼物であると信じます

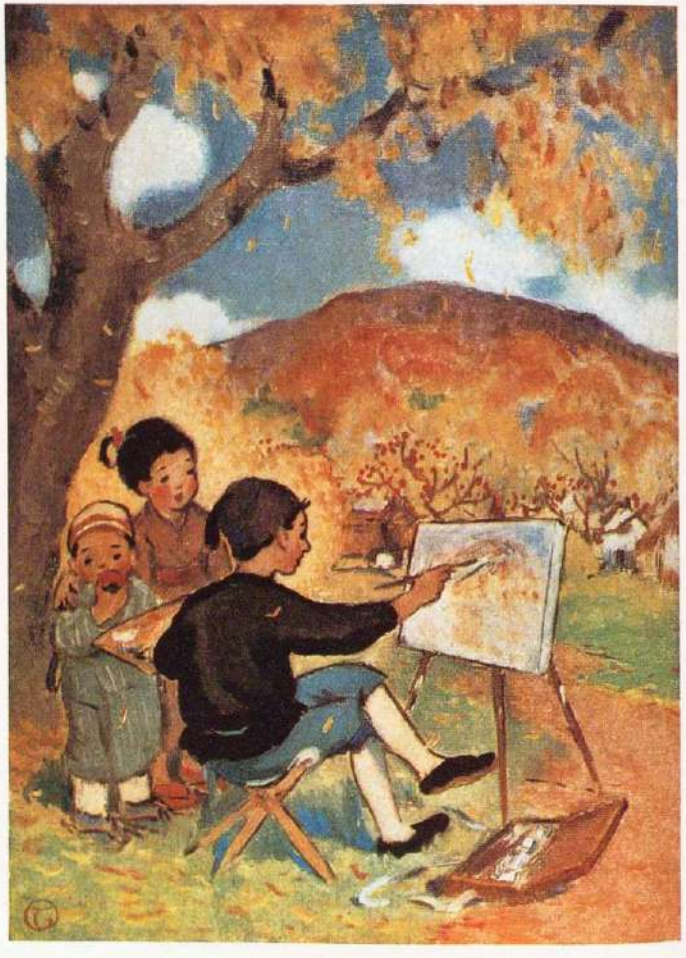
東京市外巣鴨上駒込二八
金蘭社
振替東京六一七〇一番

目次

たのしい秋（表紙・石版）……岡本歸一
柿の村（口繪・三色版）……寺内萬治郎
烏稻（童話）……（四）……野口雨情
同作曲……（二）……本居長世
猿曳の爺さん（童話）……（六）……澁澤壽三郎
涙の拍手（童話）……（一六）……水谷まさる
畫物語五郎正宗……（二七）……保積稻天
沈没したネープルス號（童話）……（三）……沖野岩三郎
しぐれ（童話）……（三六）……野口雨情
フランダースの少年（長篇）……（四三）……三宅房子
漫畫芝居コドモ座……（五五）……河盛久夫
愛犬物語（長篇）……（五三）……小島政二郎
蛸さん（童話）……（六〇）……杜仙之介
すみ子さん（童話）……（六三）……新納時秋
道灌山あらそひの杉（童話）……（六六）……西川喜平
花嫁の智慧（童話）……（七五）……松平道夫
源氏の白旗（歴史物語）……（八二）……三島霜川
ダリヤ（童話）……（八六）……野口雨情選
リンコルンの母（兒童劇）……（九）……久米舷一
魂の仇討（童話）……（一〇六）……田中實
怪彗星（長篇）……（一二二）……三井信衛
秋のわかれ（童話）……（一四四）……達崎龍

特別附錄 秋の夜長おはなし會

人間が看板になった話……（一五五）……三井信衛
人魚のお聟さんになった話……（一五五）……齋藤佐次郎
きつね汁……（一六九）……久米舷一
力持ち……（一八〇）……大木雄三
猫屋敷……（一八一）……大戸喜一郎
赤土山……（一八二）……杜仙之介



柿の村（金の星選賞）

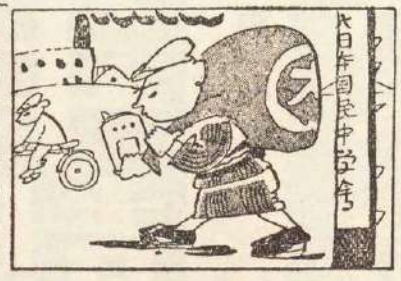
寺内萬治郎畫

漫畫

信吉ノ成功

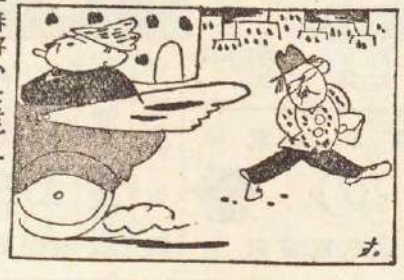
(一)小學校ヲソツゲフシタ、メクサンノコドモタチハ、イヨイヨノナカヘトビダシタ。ソノナカハ小學校ニキルトキオモツタホド、タノシクハナカツタ。

(二)シンキチハ、ウチガビンボウナタメ、デツチニダサレタガ、ヒトニマケナイキデ、ガイニホンコクミンチユウガクワイニニフクワイシテ、コーギロクデベンキヨウシタ。



(三)ヨサクモ、ウチノテツダイシナガラ、コーギロクデベンキヨウシタガ、トンキチトヨタロウハ、トウキヨウノ、チユウガクヘハイツテモ、ナマケテ、カツドウシヤシン、バカリミテアルイタ。

(四)二十ネンホドタツテ、シンキチハ、リツパナカイシヤノシヤチヨウニナリ、ヨサクハソンカイギインニナツタガ、トンキチトヨタロウハ、ナナサケテ、シンキチノカイシヤニツカツテモラツテイル。



小學校卒業後

いろ〳〵な事情で上の學校へ行くことの出來ない諸君は今スグ本會へ入會して日本一の中學講義錄で勉强なさい。

僅か一ケ年半で中學卒業の學力と資格が得られる。

◎入會するのには今が一番好いときです

講義錄見本（き）**規則書**（申込み次第）**無代**（で進呈します）

東京 駿河臺

大日本國民中學會

電話神田壹壹壹壹・壹壹壹貳・壹壹壹參振替東京四二〇〇番

世界少年少女名著大系(28) 金の星社編・挿畫松政德治郎畫伯

少年鼓手

目次
少年鼓手
霧の城の曲
一年を突いて
古城の燈臺
消えぬ誓ひ
青い信號燈
紅丹
小さなピヤニスト
四頭の馬車
晴夜の密使

ナポレオンが伊太利征服のために雪のアルプスを越えた時、雪なだれに遇ひました。その時、なだれの下から勇敢にも軍鼓を打つた『少年鼓手』の話は世界に有名です。

かういふ勇敢な少年少女のお話で世界に有名なもの十篇を集めたのがこの本です。血をどり、涙ながるゝ此の十篇の物語りは幾度讀んでもつきぬ興味を持つたものばかりで、かやうな名話をこゝに集めることの出來たのは、金の星社の一大誇であります。

目次によつてほゝお話の内容が想像されませう。是非御一讀下さい。

四六判箱入美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

世界少年少女名著大系(27) 金の星社編・挿畫平賀輝彦畫伯

ポムペイ最後の日

英國のリットン卿の世界に名高い作『ポムペイ最後の日』が皆さんの讀みやすい一冊の本となつて現れたことを喜んでいたゞきたいと思ひます。

この本は伊太利のベスピヤス山の大噴火と共に地の下に埋つてしまつたポムペイの街のお話です。丁度この時ポムペイの街は、一番盛んな時で、人々はおごりに耽り、酒場は繁昌し、坊さんはお堂で惡い行をし、妖婆は山の洞穴で不思議な呪を唱へてゐるといふ有樣、今にも神樣の罰がなければならない時でありました。

このお話の中には、いろ〳〵の人物が現れます。妖術使や魔女のやうな惡い人間が出て來ると共に、可憐な盲目の花賣娘や、空の星のやうな美女や、義俠に富む勇士などが現れて、歴史に永く傳へられる『ポムペイ最後の日』のあはれにして、悲しい物語を殘してゐます。御愛讀を待つ。

四六判箱入頗美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

世界少年少女名著大系(26)　金の星社編・挿畫柳田謙吉畫伯

新ロビンソン漂流記

四六判箱入頗美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

この本は必ず少年少女諸君から、熱狂的歡迎を受けるでせう。

『ロビンソン漂流記』が全世界の少年少女に愛讀されたやうに、この『新ロビンソン漂流記』は今や全世界あらゆる國々の少年少女から愛讀されつゝあります。

スキスを船出した一艘の汽船がありました。汽船は不幸にして、大暴風雨に出遇ひ、南洋の一無人島で難破してしまひました。全部の乘組員は溺死した筈でしたが、一家族六人の者だけが助かつたのです。その内四人は少年でした。

この一家族六人が救ひの船に出遇ふまでの二年間の話を書いたのが此の物語です。野生の植物を食物にしたり、猿や鵞鳥をお友達にしたり、猛獸と戰つたり、どの頁をめくつても、スバラシイお話で一ぱいです。是非お愛讀下さい。

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

金の星社編　世界少年少女名著大系
四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第一編　ロビンソン漂流記
第二編　ナポレオン物語
第三編　ドン・キホーテ
第四編　コロンブス物語
第五編　大人國小人國めぐり　ガリバァー旅行記

船乘りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて來るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程深山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですからこの本を讀まない者は一生の不幸だとさへいはれてゐます。

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セントヘレナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語をわかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

イスパニヤのある村にクイザノといふ男がありましたが、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、痩馬に乘つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語です。

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心慘憺して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

ガリバーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇拔な面白い物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすゝめいたします。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第六編 ロビン・フッド物語

『ロビン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャーウッドの森に住んで正義のために戰つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで興をあどらせます。惡い知事や僧正や、王をやつゝけて、最後に尼のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

第七編 アラビヤン・ナイト

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として尊れてゐる物語りです。昔アラビヤに惡い王があつて、毎日一人づゝお妃を迎へては翌日は殺して了ふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤン・ナイト』だといはれてゐます。

第八編 ギリシヤ神話 オデッセー物語

ギリシヤ詩聖ホーマの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤード物語』と共に有名な物語りです。トロイの戰爭に遙々海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語りです。

第九編 シエークスピヤ物語

有名なシエークスピヤの芝居の中で、童話として面白いものばかり特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御寢のまゝ』『ベニスの商人』『がみ〳〵女嗣し』『眞夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第十編 グリム童話

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一册にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第十一編 繪入 イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで盡分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていたゞきたいと思ひます。

第十二編 日本神話 古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありますまい。實際驚く程立派な面白い物語りです。日本の國がはじめて出來た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからずつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

第十三編 子供キリスト傳 新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に從つて最も正確に書いた本です。この尊い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したいと思ひます。

第十四編 西遊記

支那から印度へ、はる〳〵お經を取りに行つた玄莊三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で樣々の魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作です。この本を讀まない者も不幸です。

第十五編 ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロミュラスとレマスの不思議な生立物語りからはじまつて、ハンニバルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現れて來て、息もつけぬ程面白い物語です。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第十六編 聖書物語

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものは無いと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム・イサクの嫁えらび。鹽の柱になつたロトの妻。鹿の肉の好きなイサク。ヨセフの夢判斷。實に面白い物語です。

第十七編 奴隷トム物語

奴隷トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

第十八編 ギリシヤ英雄物語

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇にこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛兒のために著した名著を、土臺にして書いたものだけに、最も理想的なものとして誇ることの出きるものです。

第十九編 アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならいほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

第二十編 小公子

『小公子』の名は古くから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推讃されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き母の手に育てられながら、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず突劍の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第二十一編 母を尋ねて三千里

本書は伊太利文豪アミチスの世界的名作『クオレ』の中から、最も面白い部分を選んで一冊としたものであります。三千里の道をはるゝと母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乘り込んで自分の身を棄てゝ少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生涯忘れられぬ物語りばかりです。少年少女必讀の書。

第二十二編 不思議國めぐり

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がありました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原に行つて草をつんでゐるうちにつひウト〳〵と眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの不思議な〳〵夢を見たのです。覺めてからのち、アリスはお姉樣にその話をしました。一體それは、どんな夢だつたでせうか？

第二十三編 青い鳥

メーテルリンクの傑作『青い鳥』の名を知らぬ者はありますまい。原作は劇になつてゐますが、本書はそれをお話風に書改めました。青い鳥の影を追つて夜の宮、未來の國と移り歩るくチルチル、ミチル二人の姿は、ちようど活動寫眞でも見るかのように、皆樣の眼の前に浮ぶでせう。何人も一讀すべき名著であります。

第二十四編 爲朝一代記

鎭西八郎爲朝！この名を聞いて胸を躍らさぬ少年はありますまい。また、英雄崇拜の雄々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスバラシイ魅力をもつ事でせう。本書の表紙畫の、海に向つて弓を射てゐる爲朝の勇姿は、讀ますして本書の內容を語つてゐます。金の星社自慢の本として、お薦めします。

第二十五編 ハムレット

ハムレットは、世界第一の芝居の作者シェークスピヤの傑作です。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる悲しき運命を描いたもので、ハムレットが如何に自分の父母を熱愛したか、又、可憐な花の如きオフェリヤ姫のはかない最後など、一讀、再讀、いよ〳〵熱涙を覺える名篇であります。

金の星社發行名著目録

偉人傳大系 第一編

ジヤンヌ・ダルク

大木雄三先生著。有名なオルレアンの少女ジヤンヌ、ダルクが奮ひ立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたたり、涙ながるゝ悲劇的物語である。

送料 金九十錢

偉人傳大系 第二編

ローマ英雄 シーザー

羅田史光先生著。シーザーは古代の大英雄である。世界歴史を通じてシーザー程の英雄は幾人と數へる程しかない。そのシーザーの變化極りない運命を書いたのが本書である。

送料 金九十錢

偉人傳大系 第三編

ネルソン

三井信衛先生著。トラファルガアの海戰に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。

送料 金九十錢

偉人傳大系 第四編

リンコルン

久米鉉一先生著。最も優れた立志傳として、この『リンコン傳』をおすゝめする。紙一枚、ペン先一ツ買へぬ貧しいリンコルンが、如何にして大統領の榮位をかち得たか。本書を讀まゞ者は一生の不幸である。

送料 金九十錢

偉人傳大系 第五編

太閤秀吉

三島霜川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。

送料 金九十錢

金の星社發行名著目録

偉人傳大系 第六編

ナイチンゲール

入交縣一郎先生著。女神樣のやうに氣高い心を持つたナイチンゲール嬢の一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になります。少年少女の爲に書れたはじめての本です。

送料 金九十錢

偉人傳大系 第七編

ワシントン

三井信衛先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。

送料 金九十錢

偉人傳大系 第八編

大楠公

三島霜川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感じるでせう。面白くてそして本當の正成のお話が解る本です。

送料 金九十錢

偉人傳大系 第九編

ロシア英雄 ピーター大帝

大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシヤを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化極りないピーター大帝の物語です

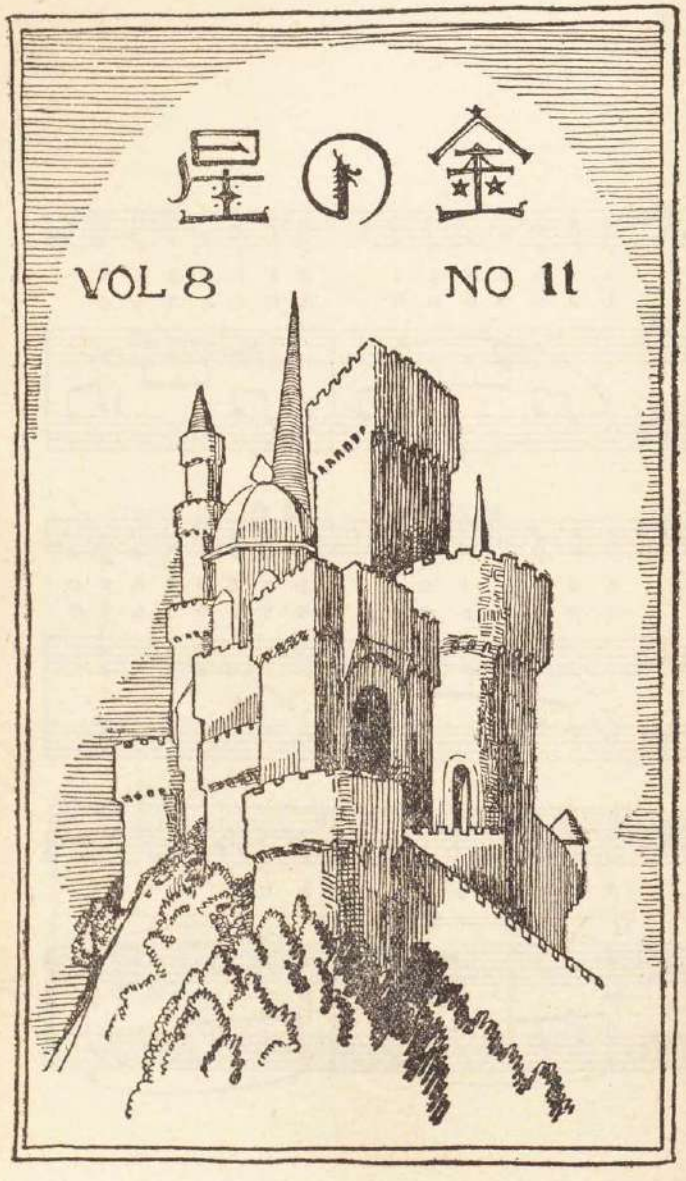
送料 金九十錢

偉人傳大系 第十編

お釋迦樣

齋藤佐次郎先生著。お釋迦樣ほど立派な方は恐らくこの世の中に生れなかつたでせう。そのお釋迦樣の一生をわかりやすく、面白く、そして正しく傳へたのが此の本です。得がたい本です。

送料 金九十錢



（通卷第八拾四號）

日本童謠作曲界を代表する大好評の

金の星童謠曲譜集

一輯二輯各金六拾錢●三輯以下金八拾錢●送料金六錢

第一輯　本居長世作曲・野口雨情作謠
人買船（目曲）
人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、蝙蝠、十五夜お月さん

第二輯　本居長世作曲・野口雨情作謠
一つお星さん（目曲）
一つお星さん、七つの子、鵲と雀、鶴さん、象の鼻、四丁目の犬

第三輯　本居長世作曲・野口雨情作謠
青い空（目曲）
青い空、燕、雨夜の傘、でん〳〵蟲、雀の酒盛り、呼子鳥

第四輯　本居長世作曲・野口雨情作謠
赤い靴（目曲）
赤い靴、山彦、三ケ月さん、姥捨山、朝鮮飴屋、眠り鳥の子

第五輯　小松耕輔作曲・野口雨情作謠
夢とり（目曲）
夢とり、おしやれ櫛、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り

第六輯　本居長世作曲・野口雨情作謠
子守唄（目曲）
子守唄、鶯と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、惹坊主、藪の下道

第七輯　本居長世作曲・野口雨情作謠
お人形さんの夢（目曲）
お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱

第八輯　小松耕輔作曲・鹽崎龍作謠
ぺんぺん鳥（目曲）
ぺん〳〵鳥、盛のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殼蜻蛉、さみだれ

第九輯　中山晋平作曲・野口雨情作謠
あの町この町（目曲）
あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、證誠寺の狸囃

第十輯　本居長世作曲・野口雨情作謠
名所めぐり（目曲）
長柄の橋、柱くゞり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳飴、石山寺の秋の月

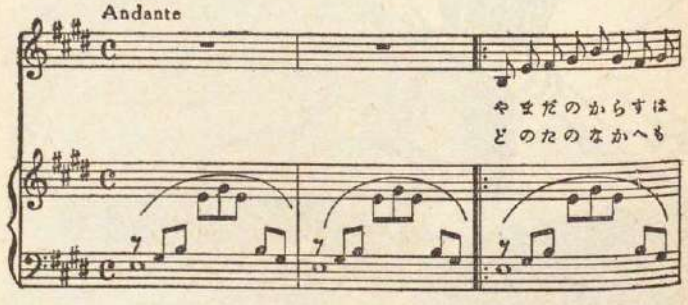
第十一輯　藤井清水作曲・野口雨情作謠
夢のお國（目曲）
夢のお國、兎が來い、赤い櫻んぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の歌

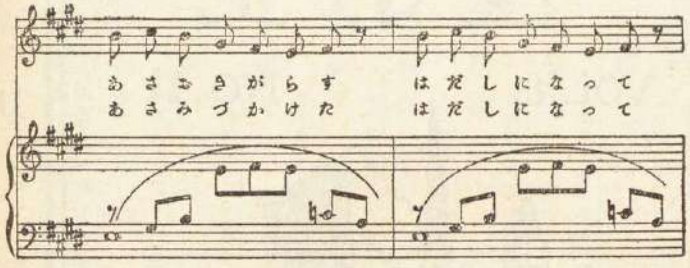
東京本郷町坂動　金の星社　電話小石川五八三七番　振替東京五九五九六番

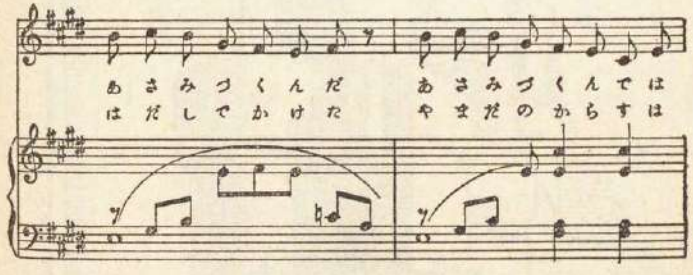
烏　稲

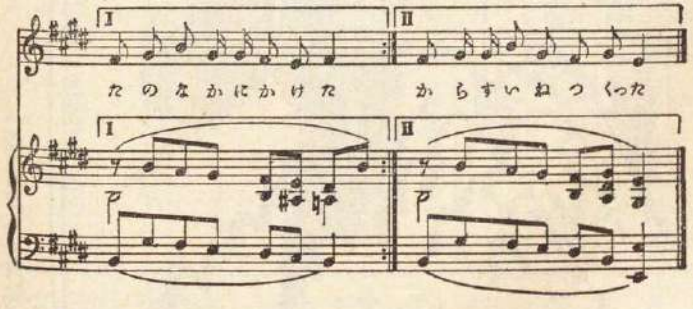
作曲　本居長世

作詞　野口雨情







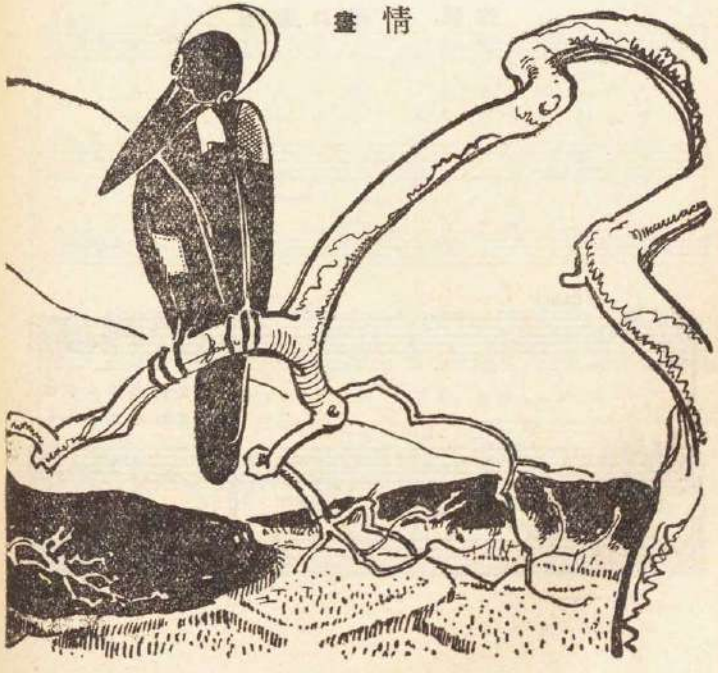


烏稲

野口雨情

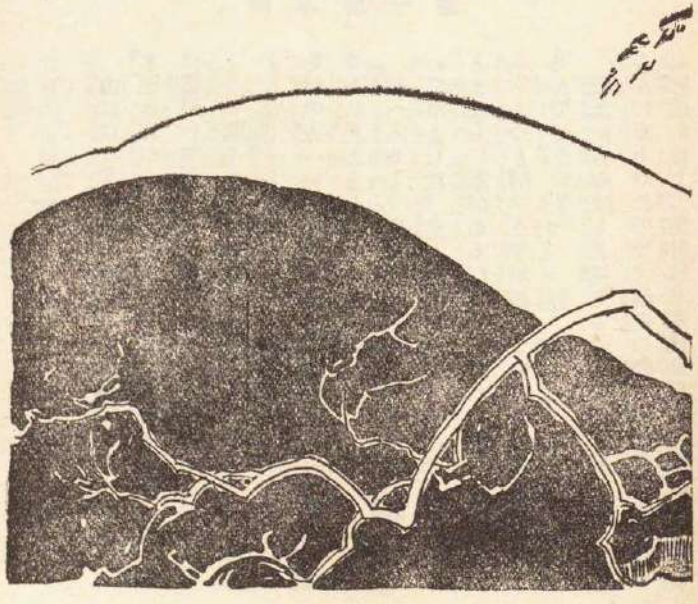
岡本歸一畫

山田の烏は
朝起き烏
はだしになつて
朝水くんだ



朝水くんでは
田の中にかけた
どの田の中へも
朝水かけた
はだしになつて
はだしでかけた
山田の烏は
烏稲つくつた

（註。烏稲とは、稲の中に交つて出來るわくら稲のことです）



猿曳の爺さん

澁澤壽三郎

岡本歸一畫

一

山にはうすら寒い風が吹いてゐました。木といふ木をわたつて、野分がすぎ去つたあとには、梢の木の葉がいぢけたやうに震へてゐました。そして日はとうに落ちて、小蔭の道は薄ぐらくなりかゝつてゐました。一人の猿曳が、肩をすぼめながら、その道を村の方へいそいでゐました。背中にのつた猿も寒さうに見えました。

村へ入ると、家々には、もうちらほらと灯りがついてゐました。尤も村といつたところで、二軒三軒とまばらに家があるだけの、寂しい村です。

『ちよつと伺ひますがね、この邊に安宿はございませんでせうか？』

野良からの歸りと見えて、鍬を肩にかついだお爺さんに出あつたので、猿曳の爺さんは尋ねました。

『宿屋かね？　安宿にも木賃宿にも、宿屋といふものはこゝにありませんよ。なにしろ小さな村ですからね。』

『この先きにもありませんかしら？』

『この先きといつても、五里ほど行かなけりやねえ……』

五里ときいて、猿曳の爺さんは、當惑したやうな顔つきで、立ちどまつてゐました。

『このおそいのに、どうせこれから其處まで行かれやしませんからね。かうなさいまし、このちよつと先きにね、眞山寺といふお寺がありますから、そこへ行つて泊めておもらひなさい。好い和尚さんですから、喜んで泊めて下さいますよ。』

百姓のお爺さんにかう云はれて、猿曳の爺さんは、ほつとして蘇つたやうな氣がしました。

『ありがたうございます。そのお寺といふのは、どの邊でございませうか？』

『それはね、この道を半丁ほど行きましてね、左の路ばたに馬頭觀音が立つて居りますから、そこの道を入らずに、もう少し行つた次の道を……』

と云ひかけましたが、

『いや〳〵、それより私が案内して、お願ひ申してあげませう。その方が好いから。』

親切なお爺さんで、賴むともいはないのに、自分から先きにたつて、とつとと歩きだしました。

『どうも恐れ入ります。お蔭さまで助かりますで。』

猿曳の爺さんも、足を早めて、あとからついて行きました。

馬頭觀音の立つてゐるわかれ道をすぎて、もう一つ次の小道を左へ入つたところに、なるほど一軒のお寺が、山を後ろに背負つてたつてゐました。お寺といつても、立派な植ゑごみがあるではなし、敷石がしきつめてあるではなし、ちよつと見たのでは、普通の百姓家と大して變りがないやうな、ごく粗末な建物で、入口の門すらも、いゝ加減こはれかゝつ

て居ります。
百姓のお爺さんは、まつすぐ庫裡へ入つて行つて、
『へえ、今日は！』
と、呼ばはりました。
『ヤー、茂作さんかい、えらう寒い風が吹くのう。』
暗いなかから返事が聞えたと思つたら、ぼーッと燃えあがる火のあかりで、釜の下をたきつけてゐる和尚さんの顔が見えました。

『ほんとになあ、秋になると、心細くていけませんわい。』
『こんた、いま野良から歸るところかい？』
『はい、さうです。』
『こんなに遲く迄、えらう精が出るこつちやなあ。』
『いや、そんなことはないが、實は和尚さん、いま歸りがけにな、猿曳さんが宿を求めておいでぢやつたによつて、連れて來ましたが、今夜一晩泊めてあげては下さらんかな。』
『おゝ、さうか、それは難儀なこつちやらう。好いとも〳〵遠慮なく泊んなされ。その代り、ほんとの山寺で、なんにもありませんぞ。』
和尚さんは、釜の前をはなれて、出て來ました。
『御無理をお願ひ申しまして、誠に相すみません。』
猿曳の爺さんは、百姓のお爺さんの後ろから、頭を下げて云ひました。
『ではどうぞ、お願ひ申しますよ。』

百姓のお爺さんは、かう云つて歸つて行きました。

二

その晩猿曳の爺さんは、御馳走のお酒に酔つて、すつかり好い氣持になつてゐました。その顔は、猿とどつちが赤いかといふやうでありました。

『こんなに御馳走になつては、誠に相すみませんな。一つお禮に、今夜は猿まはしの藝づくしを御覽にいれませうか。さあ〳〵太夫さん、お前にもたんと御馳走をあげるから、今夜は一つ、うんと上手なところを見せておくれ。』
猿曳の爺さんは、かう云つて自分のお膳の上から芋の煮ころがしやら、人蔘をとつて猿にやり、
『さあ〳〵、太夫身支度相とゝのひますれば、これより藝當はじまり左樣。』
こんなことを云つて、上機嫌で猿に角兵衛獅子を踊らせたり、芝居の眞似をさせたりして、自分はしわがれた聲を張りあげて、節をかしく歌つたり、囃したりしました。
『いや、御苦勞〳〵。さあ太夫さん、こつちへ來て又御馳走をおあがり。』
一きり猿の藝がすむと、爺さんは自分の子でも抱くやうに、猿を膝のうへにのせて、また膳のうへの御馳走を摘んでやりました。
『さうやつて毎日一緒にくらしてゐると、猿でも自

分の子のやうに可愛くなるだらうね。』

和尚さんが尋ねますと、

『えゝ〳〵、そりやあもう可愛くなりますとも、自分の子供と、ちつとも變りはございません。わたしやあ、この猿に死なれたら、一緒に死にますですよ。』

猿曳の爺さんは、かう云つて、猿に頬ずりしました。

『お前さん、その商賣をはじめてから、もう何年になりますかい？』

『左樣でございますな、足かけもう十二年でございませう。』

『で、お神さんや息子さんは、どうしたのかい？ ないのかね？』

『はい、婆さんも死にましたし、たつた一人の息子も、十四年ほど以前に亡くなりました。それでたつた獨りの寂しさから、猿を飼つてみて、退屈しのぎに藝を敎へましたのが、いつか藝が身を助けて、こんな猿まはしになつてしまつたのでございます。ですからこれは、私にとつては、本當の子供も同樣でございます。これがゐなければ、何が樂しみでこんな旅をして、生きてゐられませう。』

思はず身の上話におちて、爺さんはほろりとなりました。

『いや、話が陰氣になつていけましねえ、さあさ、もう一杯頂いて、陽氣にもう一つ踊つてもらひませうか。』

爺さんは氣をとりなほして、もう一つ盃の酒を飲みほすと、又陽氣になつて猿を舞はせました。

三

その翌くる日の明け方のことであります。いつも早起きの和尚さんが今朝もくらい内に起きて、顔を洗ひ、それから釜の下を燃しつけてゐますと、猿曳の爺さんが寢てゐる本堂の方にあたつて、

『大變だ〳〵！ 太夫さーん！ 太夫さーん！』

と叫ぶ、けたゝましい聲が聞えました。和尚さんが飛んで行つて見ると、襤褸一つの爺さんが、猿の綱を片手にもつたまゝ、ウロウロ〳〵しながら泣いてゐます。

『あんた、どうしたんぢや！』

和尚さんは、眼をそばだてて尋ねました。

『和尚さん〳〵 太夫さんがゐない！ 太夫さん 太夫さん、和尚さんがゐない！』

『アッハッハッハッ！ 和尚はちやんとこゝにゐるではないか。』

和尚さんは、爺さんのあわて方を可笑しがつて笑ひましたが、見るとなるほど、猿の姿はどこにも見えません。

『和尚さん〳〵！ 太夫がどこかへゐなくなつたのです。わたしやどうしませう。』

爺さんにとつては、笑ひごとではありません。かう云つて又泣いてゐます。

そこで和尚さんが、だん〳〵に問ひたゞしてみるとかうです。昨夜猿曳の爺さんは、あれから好い氣持に醉つて、さんざ浮かれたあげく、本堂へ床をしいてもらひ、猿を抱いてぐつすりと寢こみました。そして明け方ふと寒さを覺えて目をあけてみると、抱いて寢たはずの猿が居りません。「オヤッ！」と思つて飛び起きてみると、寢る時にもつけておいた

綱だけが、噛みきられたまゝ、柱にゆはへつけられてあります。窓があいてゐるところを見れば、猿はそこから逃げたのに間違ひはありません。さてこそ爺さんは悲鳴をあげて、「大變〳〵！」を叫んだのでありました。

和尚さんは話を聽いて、窓のところへ行つてあちこち見てゐましたが、

『ハ、ア、これは猿ひとりで逃げたのではないな。』

と、新事實を發見したやうに云ひました。

『へえ！　猿ひとりで逃げたのでないとすれば、誰か外から來て、つれて行つたのですか？』

『さうぢゃ、外から來てつれて行つたのぢや。』

『そりや怪しからん！　人の大事な大事な猿をぬすんで行くとは！　だが和尚さん、こんなへんぴな山の中でも、泥棒が入りませうか？』

『そりや、入らんとも限らんな。だがお前さん、これは人間の泥棒ではないよ。』

『へえ！　人間の泥棒でなくつて、何が泥棒しますか？』

爺さんは、和尚さんの云ふことが分らなくなつて不審におもひました。

『これはな、猿ぢや！』

『えゝ、取られたのは猿でございます。』

『いや、取つたのは猿ぢや！』

『へえ！　取つたのも猿……』

『さうぢやよ、これ、こゝを見なさい。おもてから猿の引つかいた痕が、ちやんと窓にのこつて居る。それに、庭にたくさんの足跡がついてゐるところを見ると、山の猿どもがやつて來て、さそひだしたにちがひない。』

爺さんが窓ぎはへ行つて調べてみると、全く和尚さんの云ふとほりにちがひありません。

『それぢやあ和尚さん、山の奥へつれてゆかれてしまつたのでせうか？　あゝ、太夫に別れて、わたしやこれから、どうして生きてゆきませう。一層死んでしまひたうございますわい！』

かう云つて爺さんは又、おい〳〵と泣きました。

『まあ〳〵、さう泣きなさんな。いづれ友だちでも來た氣になつてついて行つたのだらうが、ながく人間のなかにゐたものぢや、又お前さんのことを思ひ

出して、そのうち歸つて來まいものでもない。まあ待つて見なさい。』

和尚さんも氣の毒になつて、慰めてやりました。

で、爺さんも仕方がなしに、和尚さんの言葉をたのみに、猿の歸つて來るのを待つことにしました。

しかし待つてゐる間も爺さんは氣が氣ではなく、外へ出ては森のなか、丘のうへなどをさがしてみましたが、猿の姿は一向見えませんでした。そのうちに夜が來ました。ゆつくり滯在してゐなさいといふ和尚さんの親切な言葉にほだされて、また一晩とまりました。夜は明けましたが、まだ猿は歸つて來ませんでした。

『山にゐたものは、やつぱりもとの山が好いのか。あんなに可愛がつてやつたのに、とう〳〵わしを見はなしてしまつたんだ。』

猿曳の爺さんは山の方を見て、しく〳〵泣いてゐました。

四

ところがその日の夕方のことであります。和尚さんと猿曳の爺さんが、夕飯の膳にむかつてゐるところへ庭の方から猿が飛びこんで來ました。

『アッ！　太夫ぢや！』

爺さんは茶碗と箸をほうり出して、猿を抱きあげました。

『おゝ、太夫！　おゝ、太夫……』

爺さんは胸が一杯で言葉がつゞきませんでした。

和尚さんは呆氣にとられて眺めてゐましたが、

『やれ〳〵、猿がかへつて目出度い、目出度い！』

と、のんきさうに云ひました。

『これ、太夫、お前は今迄どこへ行つてゐたのだ。』

やつと顔をあげて、爺さんが猿を見た時、猿は着物をボロ〳〵に裂かれ、顔のあたりにもたくさんの掻き疵をこしらへて、さんざんの樣子をしてゐました。

『おゝ〳〵、これはひどい樣子をしてゐるな。どうしたのぢや、一體。』

猿は眼に手をあてゝ泣いてゐました。

『大勢の仲間がさそひに來たので、山へ行つてみたら、みんなして私をいぢめたのです。』

猿はかういつて、訴へてゐるやうでした。

『うん〳〵、みんなにいぢめられたのか。さうだらうとも。むかふは山猿、こつちは立派な太夫ぢや、こんなきれいな着物を着てゐるのが生意氣だといつて羨しがつて引裂いたのであらう。もう〳〵そんな

ところへ行きなさるな。行くのが間違つてゐるのぢや。いゝか？　わかつたか？』

爺さんが噛んでくゝめるやうに云つてきかすと、猿は分つたのか分らないのか、しかしうなづくやうに見えました。

『よし〳〵、それで好い、それで好い、わたしも、お前が歸つて來たので、どんなに安心したか知れぬ。さあ、今日からはまた、わたしのだいじな怜ぢや！』

その晩爺さんは、今度こそ逃げられぬやうにと、しつかり猿を抱いて眠りました。

翌る朝爺さんは、日の昇ると共に、お寺を立ちました。

昨日の悲しみは忘れたやうに、その顔ははればれしてゐました。

しかし猿は、爺さんの背中の上から、名殘り惜しさうに山の方を眺めてゐました。一たび知つた故郷を、悲しみなしに振りすてることは出來ないのかも知れません。

（をはり）

涙の拍手

水谷まさる
岩岡とも枝畫

（上）

その頃、正夫は夕方の御飯を濟すと、先生の家へ勉強しに行くといつて、家を出て行つた。そして、歸りはきまつて十一時頃になつた。そんな日がもう四日もつゞいた。

まづ心配したのは、お母さんであつた。お母さんは、心配さうに眉をひそめて、なにか不幸なことでも起りはしないかと、おそれるやうな目つきで訊いた。

『正夫、勉強もいゝが、どうしてそんなに遲くなるのかい？　もつと早く歸るわけには、ゆかないのかい？　身體をこはしたら、それこそ困つてしまふぢやないかね。』

そして、お母さんは、つぶやくやうにつけ加へた。

『だけど、先生も先生だよ。氣のきかないつたら、ありやしない。子供を遲くまで引きとめてさ。』

だが、正夫は頼むやうに、哀れみを乞ふやうに云つた。

『ね、お母さん、お願ひですから、先生のことは、わるく云はないで下さい。先生はそりや熱心に敎へて下さるんですから。それに、遲くなつたつて、家へ歸るには、そんなに淋しいところは通らないし、ぼくだつて氣をつけてますから、大丈夫なんです。ね、お母さん、もうあと五日ほど行つたら、勉強のきりがつくんですから、どうかなんにも云はないで下さい。』

云はれてみると、お母さんも仕方がなく、それでも眉はひそめながら云つた。

『そんなに云ふんなら、しやうがないけど、ほんとに氣をつけておくれよ。あたしや、先生のところへ行つて、なんとか云つて來ようかしらと思つてたところなんだつたがね……もう後五日ぐらゐのことなら、このままにしておきませう。でも、せいぜい十時までには、歸るやうにしておくれよ。』

『はい。』

正夫は、返事はしたものの、さう云はれてみると今さらのやうに、いろいろ心配して下さるお母さんが有難かつた。同時に、お母さんを心配させることが濟まなくて、つい心弱くも涙ぐんでしまつた。いいことにしろ、わるいことにしろ、嘘をつくことの辛さが、しみじみと胸をうつのであつた。然し、さうした涙を、お母さんに見つけられるのをおそれて、正夫はさもなに氣なささうに、

『ほんとに、お母さん、そんなに心配なさると、頭が禿げますよ。』

と、わざと快活に笑つて見せた。

『だつて、お前、今までにないことだし、いくら勉

強だつて、あんまりだからね……』

『そりやさうですけど……』

正夫はしんみりとさう云つた。

ところで、正夫が毎晩、先生のところへ勉強に行くといふのは、てんで嘘なのであつた。實は××通りへ行つて、小間物の夜店を出してゐたのであつた。

ことの起りはかうだつた。

正夫には、學校でいちばん仲のよいお友達として、三太があつた。三太の父親は、その町の芝居小屋で、下足番をしてゐた。母親は××通りへ、小間物の夜店を出してゐた。ところが、近頃になつて、母親の持病のリユウマチスが、すこしわるくなつて來たので、三太は母親を休ませて、自分が代つて夜店を出してゐた。なにしろ、三太には小さい妹が、三人もあつたから、總勢五人の家内では、やはり夜店のあがりだつて、ほんとうに必要なのであつた。だから三太はたいへんだつた。朝の食事ごしらへ、妹の世話、もつとも母親だつてなんにもできないといふほど、リユウマチスはわるくなかつたが、三太がしなければならぬことは、なかなか多かつた。おまけに晝間は學校へ通ふのだし、まつたく朝から晩まで、二十日鼠のやうに、すこしもぢつとする暇もなく、動いてゐなくてはならなかつた。

ところが、今度、自由畫の展覽會が、この市で開かれることになつた。この展覽會は教育會の主催で各小學校の生徒の作品を募集して、審査をしたうへで入選した作品ばかりを並べて、第一等から第五等までをきめるといふのであつた。そして、第一等は賞狀と銀製の花瓶と、フランス製の油繪の道具を一そろひ與へるといふのだし、第二等以下もそれぞれ立派な賞品だし、もうとてもたいした評判であつた。三太は、繪が上手であつた。生れつきといふのか、三太の繪はをりをり先生の舌を卷かすほど上手であつた。もちろん、この展覽會のことを、先生から聞いた時、三太はせひとも心血をそそいで、なにか出したいと思つた。

然し、氣の毒にも、今の三太には、繪を書く時間は、けつしてない！　母親さへ、以前のやうに夜店をやつてくれれば、夜だけは暇があるのである。然し、それも駄目。さうかと云つて、きつと第一等にでもなれるといふのなら、夜店の方を十日間ぐらゐ休んでもいいけれど、それほどの自信も三太にはない。

なにしろ、この縣にある多くの小學校から、われもわれもと出品するのは、きまりきつたことである。平常から、あまりたつぷりと時間もなくて、さう繪ばかりを描いてゐられぬ三太としては、自分よりも恵まれた境遇にゐて、平常から繪を習つてゐる人たちに、立ち優つてゐようとは考へられぬ。だが、出したい。力のあらん限り、一生懸命に描いて出したい。

思ひあまつた三太は、ある日、學校の歸りに、仲

よしの正夫に向つてそのことを話した。
黙つて聞いた正夫の顔には、強い決心の色があつた。
『三ちやん！ 描きたまへ。しつかりと描きたまへ、ぼくは、君のかはりに、十日ぐらゐわけはない、夜店へ行つてあげるよ！』

三太は、びつくりして云つた。
『そんなこと！ そりや駄目だよ。君の家で許すものか！ それに、わるいや。そんなに心配かけちや濟まないよ。』
正夫は、然し、心に決めたことを、飜がへさうとはしなかつた。
『なにがわるいものか、ぼくにはぼくの考があるから、君は心配しないで描き給へ。そしてね、第一等になつておくれよ。大丈夫だよ。君ならなれるよ。』
『だつて……だつて…そんなことできやしないよ。濟まないよ。』
三太は、あくまでも應じなかつた。
『ぢや、君、ぼくのいふこと、聞いてくれないのかい？ そんなら、ぼくもう知らないよ。』
正夫は、わざと不機嫌な顔をした。
とつせん、三太は、正夫の手を握つた。
『ありがたう！ もうなんにも云はない。ぼく、きつと描くよ、一生懸命に描いて、第一等になるよ。』
さう云つた三太の目には、友情を感謝する熱い涙がたまつてゐた。
『ありがたう！ よくぼくの云ふことを聞いてくれたね。せひ第一等になつてくれ給へ、君の名譽と學校の名譽だ。せひ頼むよ。』

正夫の握り返した手にも、力が籠つてゐた。そして、やはり目には熱い涙がたまつてゐた。

（下）

正夫としても、夜店に出るといふことは、とても家で許されないと思つてゐた。それで、先生の家へ勉強に行くといふのを口實にして、毎晩のやうに出かけたのであつた。はじめての夜は、三太といつしよであつた。そして、いろいろと商賣のことを敎へてもらつた。二日目からは、慣れぬ手に車を曳いて行き、十一時までは、夜店を出した。安い小間物を買ふ人たちに、ていねいに頭をさげて、一つでも多く賣れるやうに希ひながら、商賣を勵んだ。
一方、三太は、正夫の親切を有難く思つて、夜の四五時間を、死物狂ひで描いた。三太は一人の妹が母親の膝に抱かれてゐるところを描いた。母親も正夫の親切を知つて、せひとも三太の繪が、第一等に

なるやうにと心に思ひつづけながら、その不自由な身體を我慢して娘を膝に抱いてモデルとなつた。

ああそこには二つの美しい犧牲が、重なり合つてゐたのであつた。三太は、まるで涙で繪具を溶くやうにして、力いつぱいに描きつづけた。友達の暖かい心靈しと、母親の暖かい心靈しとは、三太にとつて、なによりの刺激であつた。描いては消し、消しては描きするうちに、それでも五日目あたりには、立派な製作ができた。

『いいぞ、いいぞ！』

正夫は、夜店の車を曳いて歸つて、三太の繪を見た時、手をたたいてうれしがつた。

『大丈夫だ！　もう後五六日だ！　一生懸命に描きあげ給へよ。』

ああ、その夕方のことである。正夫のお母さんが、正夫が毎晩遅く歸ることを心配して、先生のことを非難したのは！

だが、正夫としては、母親を心配させ、母親に嘘をついたことも、やがては報られるであらうと信じ

た。それほど、三太の繪はよくできてゐた。

『ありがたう！　ほんとに君のおかげだよ。とにかく、ぼく一生懸命で描きあげるよ。』

三太は、こんな時に、すぐに涙を溜めた。

三太の母親も、正夫の言葉には、いつもいつも泣いた。然し、これらの涙は、弱いくだらない涙ではなかつた。友情の有難さに泣く、清い美しい涙であつた。

かくて、十日が過ぎた。

展覽會の〆切日が來た。

三太は、いそいそと繪を運んだ。三太の繪は、かなり大きな繪であつた。

さて、世のなかは不思議である。ちやうど三太が繪を運んだ日に、先生は正夫の宅を訪れた。そして、正夫の母親に向つて云つた。

『お宅の正夫さんに、いつたいなぜ、夜店なぞ出させるのですか？』

母親は驚いた。銀行の相當な地位にゐる家の子供が、毎晩、夜店を出してゐるといふことは、なんといふ恥かしいことであらう！

『まあ！　正夫が！』

母親はさう云つて、顔を赤くした。そして、詳しい先生の話を聞いて、非常に驚いた。すぐに正夫は呼びつけられて、いろいろと先生から問ひただされることになつた。

正夫は、默つてゐた。ただ、嘘をついたことを詫

びるだけであつた。もう今夜から行きませんから、許して下さいと云つた。

先生が歸つてから、正夫は母親からひどく叱られた。まるで、不良少年になつてしまつたやうに叱られた。

だが、展覽會がいよいよ開かれて、三太の繪が、どの繪よりも評判がよくて、新聞にも盛んに書きたてられると、いちばん喜んだのは正夫であつた。正夫は三太に向つてしばしば話した。

『もう大丈夫だよ。ほかの繪と比べると、てんで問題にならないよ。』

正夫は、そんなふうに、大人びたことを云つた。

展覽會の會期が、終りに近くなつて、等級が定つた。そして、もちろん、三太の繪は、第一等に選ばれた。三太と、三太の母親と、正夫の喜びは、どんなであつたらう！　三人は、抱き合つて泣いた。そして、心から心へ暖かい喜びが流れた。肉親同志でさへもが、感じ合ふことのできない深い感じであつた。なんとなく、明るい薔薇色の光が、きらきらと三人のまはりに、輝いてゐるやうな感じであつた。

賞品授與式は、盛大であつた。縣知事までが、その式場へ來た。

第一等であるところの三太は、見すぼらしい着物ではあつたが、それでも母親の心盡しで、きちんとしたものを着て出席した。お祝ひの言葉やら、いろんな訓辭やらが二三人の人たちによつて話された。そして、いよいよ賞品授與の時に、三太はまづ一番に呼び出された。

盛んな拍手の音が、鳴りひびいた。式場が割れるかと思はれた。多くの小學生たちの、小さい手がやけにたたかれた。然し、なかでも、まるで死物狂ひになつて手をたたいてゐたのは、ほかならぬ正夫であつた。手が破れるほどたたいた。そして、目にいつぱい涙を溜めてゐた。

三太は、小さな腕に持ちきれないほど、賞品を抱へて、席に歸るために歩いて來たが、いつぱい涙の溜つたその目が、やはり涙の溜つた正夫の目とかち合つた時、ふいに走り出して正夫のそばに行き、そのまま、わあつと泣き伏してしまつた。ただごとではない、なにか心に思ひ餘つたらしい容子であつた。

式場にゐた人たちは驚いた。どうしたのかと思つた。さつそく先生が來た。一時、賞品授與式は中止されるくらゐであつた。

『先生、ぼくが一等賞をもらへたのは、みんな正夫君のおかげです。正夫君は、ぼくの代りに夜店へ行つて、ぼくに繪を描かしてくれたのです。ぼくの家、貧乏だからしやうがなかつたんです。』

先生は、それを聞いて、すべてを察することができた。先生は、さつそく教育會の、主だつた人のところへ行つて、三太と正夫とのことを話した。その人は感動した。忽ち、その話は、知事に話された。知事もいたく感動して、すべての賞品授與を行つた後で、正夫を表彰することに定めた。

なんといふ、感激に充ちた表彰式であつたらう！

知事はうれしさうに云つた。『皆さん、今度の展覽會は、立派な繪がたくさん集まりましたが、この展

寛會に繪を出さない人で、やはり第一等賞をあげてもよいくらゐの人があるのです。」

それから、知事は、正夫と三太の暖かい友情のことを話した。知事の話は、上手であつた。いや、話が上手であつたのではない。知事は、強く心をうたれたので、そのほんとの感動でもつて話したから、聞く人の心をうつたのであつた。二人のことを聞いて、あちこちにすすり泣きの聲さへ起つた。

やがて、話が濟むと、呼び出された正夫に向つて、知事はなにやら一封の紙包を渡した。そして、正夫の手をぎゆつと握つた。

またも拍手が起つた。式場のガラス窓は、拍手の音で、びりびりと響いた。そして、その時、やはり死物狂ひになつて、小さな手も破れよとばかりに、たたきつづけた一人の子供があつたが、それが三太であることは云ふまでもあるまい。三太の頰は、洗つたやうに涙で濡れてゐた。

光は三太と正夫のうへにあつた。これは美しい友情の勝利であつた。二人のことは、翌日の新聞にも出た。この美しい話は、讀む者の心をうつた。

かくて、これが緣になつて、正夫の父親は、三太の學資を出して、中學校から美術學校へ行かせることを約束した。正夫は、父親の道を繼いで、中學校から大學校へ行き、經濟學を學んで銀行家となるであらう。そして、二人の友情は、いよいよ固く、いよいよ暖かく、共に幸福のなかに手をつないで行くであらう。なほ、正夫が知事からもらつた紙包のなかは、目錄であつて銀製花瓶一個と書いてあつた。やがて、數日後に、三太のとおなじ銀製の花瓶が送り屆けられた。

三太と正夫にとつて、このおなじお揃ひの花瓶ほど、なつかしくも嬉しい品はない。花瓶は、いつも二人の友情を、明るく輝やかしてゐたからである。そして、花瓶から、あの思ひ出の深い拍手の音が、かすかに聞えて來るやうな氣さへした。（をはり）

五、父の藤六はお秋が五郎を虐待することはうす〳〵知つてゐますが妻の見脉がおそろしいのでかばふこともしませんでした。

七、丁度こゝへ通りかゝつたのがお秋の父の郷士でした。そりゃ身投げじゃと直様救ひ出して見ると五郎でしたからびつくり仰天しました。

六、勇れて自由の利かない身體をやう〳〵相模橋へ運びました。そして南無阿彌陀佛の屍もろともに川へ飛込みました。しかし天はこの正直な孝行な五郎を殺しません。

八、郷士はお秋の父でも性質のまろで遊つた律義一途の人です。どうして五郎が死ぬ決心をしたかこれには譯があるにちがひないとなだめすかして尋ねましたが五郎は口をつぐんでものをいひません。

九、五郎思ひの職人は五郎が見えなくなつたので萬一のことがあつてはならぬと探しに出ますと丁度今郷士が五郎を救ひ出したところでした。職人はこれまでのことを郷士にすつかり訴へました。

十、律義でかたまつた郷士は『ムーそうであつたか五郎てまなかつた、お秋め何といふ不埒な奴ちや、藤六殿も藤六殿つまらぬ氣象をしてくれたものだ、ヨーシお秋奴勘辨ならぬ、これから一刀のもとに斬捨てゝくれる。』

十一、と郷士はブン〳〵怒つて直垂の袖をまくつて刀をおつとり直して出かける見脉に職人はコリヤ大變なことになつてしまつたワイとドキマギしてどう〳〵めぐりをしてかります。

十二、五郎は郷士の只ならぬ氣色を見てお繼母様に怪我があつてはならぬと脱つてる身體も忘れてお親父さまの郷士をぬけがけして飛び出しました。自分は死ぬ決心しながらも尚お繼母様を慢まずかばはふとする心掛が美しくいぢらしいではありませんか。

（つゞく）

沈没したネープルス號

沖野岩三郎

寺内萬治郎畫

六月十六日午後三時三十分、横須賀鎮守府の加藤司令長官から、驅逐艦「浦風」に對して、

『萬難を排して救助に努力せよ。遭難者は好遇せよ。』

といふ命令を無線電信で送りました。ところが同じ時刻に浦風から鎮守府あてに、

『風浪荒し、救助見込立たず。』といふ無線電信が屆きました。

そこで加藤司令長官は、この憐れな遭難者を見殺しにするわけに行かないと云つて、すぐ軍艦「春日」を派遣することにいたしました。

春日艦の艦長は太田賀平といふ海軍大佐でした。太田大佐は丁度其日の執務を終つて、上陸して横須賀の本署に來てゐますと、鎮守府長官から直ちに出張するやうにと命令が下りました。それは十六日の午後五時でした。

命令を受けた太田大佐は考へました。

『ネープルス號の遭難してゐる伊豆沖には暗礁が澤山ある。その暗礁の多い所へ大きな軍艦を進めるといふことは最も危險である。だから明日の朝五時頃から八時頃までの朝凪の間を待つて救助に着手しなければならない。』

そこで太田艦長は部下に電話をかけて、倉庫の中にある水筒を出來るだけ、數多く出して、それに清水とスープとを詰めるやうに命令しました。

總ての準備が出來ましたので、太田艦長は加藤司令長官にお目にかゝつて、救助に行くことを申上げました。長官は、

『ネープルス號の船長は、責任を重んじて自殺するかも知れないから、よく氣をつけて生命を保護してあげるやうに。』と申しました。

鎮守府の方で、こんな手筈が進んでゐるといふことを知らないネープルス號では、七十三人の乘組員

は、逆立になつた船尾に集つて風前の燈火にも似た自分たちの生命を悲みながら、互ひに勵まし合つてゐました。けれども浪が高くて救助船は近づきません。やつと間近まで來たチーフー丸から導索をかけてくれたかと思ふと、ぷツつり切れてしまひました。浦風からは食糧品を箱に入れて流してくれるらしいが、荒浪に呑まれてしまつて、自分たちの所へは屆きません。

そのうちにチーフー丸も、驅逐艦石廊も見えなくなり、浦風だけが遠くの方に殘つて、救助の機會を狙つてくれてはゐますが、高い浪は双方の間を意地惡く山のやうに荒廻つてゐます。

たうとう二度目の夜が廻つて來ました。船長始め乘組員はライフローブに縋りながら、神樣に祈りました。片破月が又た一同の上を照してゐます。岩に碎けて飛び散る激浪は、月光を浴びて海一面を雪のやうに眞白くしてゐます。ナイヤガラの瀧のやうにも恐ろしく見えます。

七十三人は、一刻一刻と死地に近づく思ひで、互ひに勵まし合つてゐました。

月はもう西に沒してしまひました。暫くして東の方がほの白くなつたと思ふと、遙か向ふに一道の光が見えました。

『あ、あの光は？』

船長が叫んだ時、乘組員はみんな、光の方を見ました。

續いて乘組員全體は、自分達の姿が其の光に照されてゐるのを知りました。

『軍艦だ！』

機關長のハチソンは叫びました。

『さうだ、軍艦のサーチライトだ！』と運轉手のマニャンは踊り上りながら云ひました。

やがて眼の前に堂々たる軍艦春日の英姿が現はれ

ました。

太田艦長は探照燈に照されたネーブルス號を見ました。逆立になつてゐる船の後半に、數十名の人影のあることを知つて安心しました。けれども浪が荒くて容易に近づくことは出來ません。其時腕の時計を見ますと、午前四時三十五分で、ネーブルス號との距離は一千五百メートルでした。

五時頃から朝風になりました。十八メートルの風が十メートルになりました。

五時四十五分に、太田艦長は命令を下してカッタア四艘をおろさせました。けれども波が一丈ばかりあつて、どうしても一間先は見えません。

『朝風は二時間しかない。作業は今のうちだぞ。氣をつけてやれ！』

艦長の言葉はカッタアに聞えませんでした。けれども決死の勇士たちは、山のやうに押よせて來る逆

浪を物ともせず漕ぎ抜けて行きます。

第一のカッタアに乘つてゐた指揮者は海軍少佐の阪部省三といふ人でした。この人は水府流の水泳の達人です。

木の葉の如くに飜弄されてゐるカッタアの中に立つてゐた阪部少佐は、五十メートルばかり前に大きな岩の露出してゐるのを見ました。

『うん、あの岩に！』

云ふや否や阪部少佐は救助繩を身に縛りつけたまゞザンブと激浪の中に跳り込みました。少佐に劣らぬ水泳の達人一等水兵金井菊雄は、無言のまゝ少佐に續いて水中に飛び込みました。間もなく五人の水兵が先を爭つて荒浪の中に跳りこみました。

旭日の光を浴びた軍艦春日の勇ましい姿を見たネーブルス號の乘組員は、もう大丈夫だと云つて喜んでゐるうちに、四隻のカッタアが浪間に見えつ隠れつします。

『ボートだ、ボートだ！』

氣ちがひのやうに手を拍きながら喜んだのは、無線電信係の少年マックレナーでした。非常な危險を冒して送信した自分の働きが、眼前に飜ゑられる時が來たからです。

カッタアは近づきました。一同が片唾をのんで眺めてゐますと、眞先のカッタアから、巨人のやうな勇者が裸體になつて山のやうな激浪の中に飛び込みました。續いて一人、又た五人！

船長のコンナアは、四十年間世界中の海といふ海を航海し盡した人です。幾度か死地を冒した冒險家でした。けれどもこんな激しい荒浪の中に跳り込む程の冒險家を、まだ一度も見たことがありませんでしたから、其時思はず、『Dare Devil!』と叫びました。デアデヴイルといふのは、日本の言葉で『向ふ見ず以上の勇敢。』とか、『生死を考へない勇氣。』とかいふ意味で『えらいことをやつた！』といふ最上の感嘆詞なんです。

間もなく勇士の姿は海中に突出してゐる大きな岩の上に現はれました。そして繩の一端を岩に堅く縛りつけて、直ぐ、も一度海中に跳り込みました。

コンナア船長は船員一同と共に船尾のとゞばなに立つて、垂れ下げた五丈餘りの繩梯子の端を見つめてゐますと、勇ましくそこに泳ぎついた一人の勇士が、繩梯子に片手をかけた時、

『あ、これでもうみんなの生命は救はれたぞ！』と云つて眼に一杯涙を泛べてゐました。

勇士はずん〳〵と推進機の下に近寄つて、やがて繩梯子を攀ぢ上つて來ました。そして甲板に立つた時、

『I am Commander Sakabe……』と、とぎれとぎれに言ひました。阪部少佐も嬉しさに胸が一杯になつたのでした。

『サンク・ユー。』とたつた一言だけ言つた船長は、いきなり阪部少佐に抱きついて泣きました。乘組員一同は聲をあげて泣きながら、吾も〳〵と少佐に握手を求めました。

暫く雲間に隠れてゐた朝日が、きら〳〵と海上に輝き出したので、救助艇に乘組んでゐた一同は、一度にオールを立てゝ『萬歳！』と叫びました。

ネーブルス號と、岩とカッタアとの間には連絡の繩が張られました。

阪部少佐はカッタアから水筒を引揚げて、一同にスウプを飲ませました。それから岩に張つた繩に籠を吊して、五丈あまりの高さになつてゐるネーブルス號の船尾から、一人一人カッタアへ救ひ下しました。

コンナア船長は乘組員をみんなカッタアに下しましたが、自分だけは最後まで船に殘つてゐました。

『どうぞ、お降り下さい。』と阪部少佐は丁寧に言ひましたが、コンナア船長は承知しませんでした。

阪部少佐は太田艦長から、『船長は責任を感じて自殺するかも知れない。よく氣をつけて助けてあげよ。』と云はれてゐたので、どうしても船長を先にカッタアへ下さなければなりません。

『私はあなた方をお助けに參つたのです。是非お降り下さい。』

阪部少佐の言葉の意味を察した船長は、涙を流しながら、

『御親切ありがたうございます。決して御心配をかけるやうな事はいたしません。』と云つて、マストに登つて船旗を取おろして來ました。

船旗の 飜 つてゐる間は、船長が其の船と共に運命を共にする決心ですが、船旗を取卸した以上、もはや船長は其船を見捨てたことになります。

船長は自殺しませんでした。

やがて船長は籠に乘りました。そして名殘惜しさうに見返り〳〵カッタアに下りて行きました。

阪部少佐の任務も終りましたので、四隻のカッタアに分乘した七十三名の英國人は本艦へつれられました。

七十三人は、かうして無事に救はれましたが、一同が春日艦に入ると同時に、再び大變な暴風雨が襲つて來ました。

太田艦長はコンナア船長が四日間といふ長い時間を破船の中に、一人の死傷者も出さないやうに統率してゐた手腕をほめました。ことに半身を水に浸しながら、必死になつて危急を送信した無線電信技手少年マックレナアを膝元近く呼んで、其の手柄を賞めました。

大日本帝國の軍艦春日は、人の生命を救ふために非常な危險を冒しました。そして大正十五年六月十七日午後五時三十分、夕陽の輝く横濱港へ再生の喜びに充たされた七十三名の異邦人を乘せて歸りました。そして港内第二區に錨をおろした時、海上生活者のために、いつも善い事をしてゐるシーメンスクラブからの歡迎のランチが春日に近づいて來ました。

出迎人のうちには新聞記者も、港務部の役人も雜つてゐました。

コンナア船長以下七十三名は甲板に整列しました。

『皆さん、よく無事でした。』とシーメンスクラブの代表者は申しました。けれどもコンナア船長は唯一口、『サンク・ユー。』と云つただけでした。船長は泣いてゐたのです。

間もなく英國の總領事ホルムスは、副領事や書記を從へて、軍艦春日を訪問して太田艦長に感謝の意を陳べました。

七十三名は、いよ〳〵小命の親である軍艦春日に別れる時がました。

太田艦長は船長の手を握つて、

『さやうなら、御機嫌よろしく。』と云つたが、船長は感謝の念があまりに強かつたので、何にも言へないで俯向きました。遭難者はみんな俯向いて涙ぐんでゐました。

コンナア船長は熱い涙を雨の頬に傳はせながら、手をあげて船員一同を指揮して、

『He is the joly good felow…』の歌を歌はせました。一同は涙の中に其の合唱を終ると、太田艦長は軍樂隊に命じて送別の曲を吹奏させました。

さうして七十三名は、ホルムス領事の乘つて來た海神丸に乘移りました。

『萬歳！』といふ叫びが海神丸から起つた時、君日艦上からも、同じく『萬歳！』の聲が湧き起りました。

助けられた者の喜びと、助けた者の嬉しさが、一つになつたのです。

岸壁には海員協會、海員組合の人たちが三百余名、日の丸の旗を打ふつて歡迎しました。

軍艦春日の行動に對して感謝の意を表したいといふので、日英兩國の有志者が、帝國ホテルに太田艦長以下を招待したのは、其後間もなくでした。

太田大佐は其時、コンナア船長の沈着と、其の統率のよかつたことを頻りに賞めて、臨席の英國總領事に對つて、

『あの船長は實に立派な人だから、英國へ歸つても、船長の職を免せられる事の無いやうに、證明してあげて下さい。』と頼みますと、ホルムス總領事は、

『御心配下さるな、その事は私の方でよろしく取計らひましたから。』と云つて、この情深い太田艦長の親切に、ひどく感心したといふことです。

（をはり）

童謡

野口雨情選

（大人篇）

しぐれ（賞）　西岡さかる（長崎）

雨が降る
しぐれさんさん
さんさらり
雨降りや雀は
ぬれ雀
雀のお宿も
ぬれてゐる

機織り姉さん（賞）　石原　孝（東京）

機織り姉きん
カッチャンコ
カチャンコ〳〵
日が暮れた
日ぐれにや　山から
父さんが
お馬と一緒に
歸ります
機織り姉さん
カッチャンコ
夕餉のお支度
日が暮れた

土用中ば　本多　鐵麿（東京）

田のくろ
小豆の
花のかげ
ちよつこり顔だす
いなごの仔
土用中ばの
秋のかぜ
汽車もポッポと
ゆきました

おひるのはたけ　川口　洋（東京）

おひるの
畑は
静かだな
蝶々が
舞ひ舞ひ
遊んでる
大きな
花びら
ゆりのはな
蝶々が
見い見い
遊んでる

みぞれ雨　阪野　潤（大阪）

ショボ〳〵

朝からみぞれ雨
お背戸のお籔に
降りました
お籔の蟲
蟲作り
まだ〳〵蟲笠
出來ませぬ
ショボ〳〵
いちにちみぞれ雨
やまずにお籔に
降りました

お猿さんに

原　勝利（東　京）

お猿さんに
西瓜を
喰べさせりや
お猿さんナ
『おーうまい』ち
言ふだろな
『うまいうまい
おーうまい』ち
首振って
お猿さんナ
たべたべ
踊るだろな

かげゑ

松井　雅夫（福　岡）

あかるいお部屋で
をどるは
だれよ
かげゑが障子を
ひとりで
をどる
をどるかげゑを
よくよくみれば
あらまあ
みいちやん
みいちやんだ

つんばくろ

郷間儀一郎（栃　木）

つんばくろ
つんばくろ
末つ子のつんばくろ
秋が來たぞよ
早く飛べ
がんが來るぞよ
早く飛べ
つんばくろ

つんばくろ
末つ子のつんばくろ
鶏頭の葉つばが
笑つてるぞ

おはぐろとんぼ

鈴木伊三緒（千　葉）

おはぐろとんぼの
親子づれ
お池の蘭草に止まつてる
そよ風吹くたび
ゆうらゆら
お池の蘭草はゆれまする
蘭草がゆれれば
ひいらひら
黒いお翅もちとなびく
おはぐろとんぼの
親子づれ
蘭草に止まつて夢みてる

さら〳〵木の葉

武田　幸一（福　岡）

さら〳〵木の葉は
かけくらべ
かけ〳〵日暮に
なりました
木の葉は
迷つて戻られず
風の吹く夜を
さら〳〵と
かけ〳〵夜明けに
なりました

菊の花

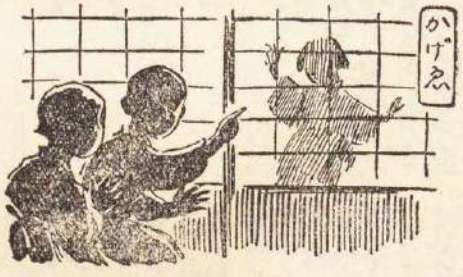
名方　和郎（大　阪）

菊が
ぽつかり
咲いてるナ
蕾も
まじつて
綺麗だヨ
頸を
振り振り
雀がナ
お花の
數を
かぞへてるヨ

蝗ごこいた

平井しげを（大　阪）

稲は刈られて
霜枯れ
田甫
蝗住めなかろ
田甫は



霜枯れ
田甫
稲は刈られて
田甫は
寒い

蕗のはつば

伊藤　仲子（岐　阜）

蕗のはつばに
雨蛙とんだ
はつばが青けりや
蛙もあをい
蕗のはつばに
雨蛙とんだ
はつばが搖れてりや
蛙もゆれる
寒い
蝗どこへいた

世界名作物語

フランダースの少年

英國　ウイダ原作

三宅房子

岩岡とも枝畫

第三回　みなし兒

一、別れ

ネルロは、男らしく靜かで、感じやすい少年です。ですから、アロアのお父さんの心持ちを見拔くと、もうそれからはあきらめて、自分も、パトラッシュも、たとへ暇があつても、丘の上の赤い風車の方へは行かなくなりました。

何故あんなにアロアのお父さんが怒るのかネルロには分りませんでした。多分牧場でアロアを寫生したのが氣にさはつたのだらうと思つてゐました。で、時々アロアが飛んで來て、ネルロの手を握ることがあると、ネルロは悲しさうにほゝえんで、そして、アロアのためを思つて、やさしく心配しながらいろいろといふのでした。

『れ、アロアちやん、お父さんの御氣嫌を惡くしないでれ。お父さんは僕があなたを怠け者にでもするやうに思つてゐらつしやるのだから。それで僕と一しよに遊ぶのがお氣に入らないのですよ。でも、お父樣はあなたを可愛がつてゐて下さるのだから、無嫌を惡くしないやうにしませうれ。』

ネルロは、悲しさと淋さをせい一ぱい我慢してかういふのでした。そして、いひ終ると、パトラッシュを連れてポプラの樹の下を家の方へと歸つて行きました。

その後のネルロにとつては毎朝町へ行くために通る明け方の空色も樂しくなくなりました。アロアの家、赤い風車は、目印になつてゐて、そこまで來ると一と休みすることになつてゐました。風車屋の人達も出て來て元氣のいゝあいさつをします。アロアもきつと出て來ます。そして、パトラッシュに御馳走をくれるのでした。

ところが、此の頃はすつかり樣子が變つてゐるので、老犬パトラッシュにも心配になつてきました。いつもと違つて、風車屋の木戸は閉つてゐるし、ネルロもさつさと行き過ぎてしまふのです。

パトラッシュでさへさうです。まして、ネルロはどんなに辛い思ひがしてゐたでせう。アロアは家の内で爐邊にあたりながら、編物をしてゐますが、戸外で、車のきしる音を聞くと、思はずホロリと涙を落すのでした。

二、ネルロの決心

ジェハン爺さんは、ネルロに向つて、いつもかういひました。

『わしら等は貧乏人だから、何でも神樣のくだされたものはそのまゝいたゞかなくてはならぬ。よい事もあらうし、惡い事もあらうが、貧乏人は選りこのみをしてはならない。』

ネルロは默つてよく耳をすましてお爺さんの言葉を聞きました。お爺さんを尊敬してゐますから、一々成程と思ひましたが、しかしそれにしても、何んだかぼんやりと心の底で持つて生れた天才をまゝ〳〵磨けと勵ますものがあるやうな氣がしました。

あの日、運河のほとりの麥畑で、ネルロがたつた一人で佇んでゐると、ふとそれを可愛らしいアロアが見つけて、駈けて來ました。そして、ネルロの側へよつて、悲しさうにしく〳〵泣き出しました。と云ふわけは、明日はアロアの誕生日なので、もしいつものやうだつたらネルロも招んで、おいしい夕飯の御馳走を食べたり、大きな納屋のなかを駈け廻つたりして、一緒に樂しく遊べる筈だのに、今年に限つてお父さんもお母さんも、ネルロを呼んではならぬと仰つたといふのです。ネルロはわけが聞いて、決心したことがあるやうにいひました。

『アロアちやん、僕もいつかは偉くなつて見せますよ。やがて時が來れば、お父さんが持つてゐらつしやる私の描いたあの松の板片だつて、あの大きさの銀貨を出しても買へないやうな値になりますよ。さうなつたら、お父さんだつて戸を閉めて僕を入れないやうなことはなさらないでせう。だから僕を忘れないでれ。アロアちやん忘れないでれ。僕はきつと偉くなるから……。』

『あたし、忘れるつていふの。それならいゝわ。』と、いぢらしいアロアは、涙に濡れた頬をふくらませて、すれたやうに云ひました。それはネルロを忘れないと云ふ眞心のあらはれでした。

ネルロはそれを見ると、もうたまらない氣がしました。アロアの顏から目を外向けて遠くの方を見ると、遙か彼方には、赤く黃金色

に暮れて行くフランダースの夕暗に、ぽつと白くあの大きな教會の塔が聳え立つてゐるのでした。

その時ネルロの顔には、悲しさうな微笑が浮び上りました。アロアはそれを見て恐くなりました。

『僕はきつと停くなる。』とネルロは深い息をしながらいひました。『アロアちゃん。僕くなれなかつたら、僕は死ぬ。』

『死ぬんですつて。ぢやあ、わたしを忘れてしまふのね。』

ネルロは、それ以上何にも云はせんでした。背丈ほどもある高い麥の黄色になつた畦を歩きながら、ネルロは家の方へ歸つて行つてしまひました。

その時のネルロの目にはある幻が見えてゐたのでした。今にきつと幸福になれる時が來る。名高くなつて、再び故郷へ歸る時には改めてアロアのお父さんに挨拶しよう。その時となつたら決して僕を蹶りはしないばかりか、きつと歡迎してくれるに違ひない。

また村の大ぜいの人たちが自分を見ようとしてあらそつて集まつてくる。そしてお互にさゝやきあふのだ。

『あれを御覽なさい。あれが人間の王になつた人ですよ。世界中で評判になつた偉い畫家ですつて。でもあれは、昔はネルロと云ふ乞食見たいな貧乏な子供で、やつと犬に助けられてその日を暮してゐたんですよ。』

ネルロの空想はまだ〜つゞきました。その時が來たら、あの聖ジャツケ寺のなかに描いてある坊さんの姿のやうに、ジェハンお爺さんには毛皮や紫の着物を着せてあげて自分はお爺さんの肖像を描く。それから忠犬のパトラッシュの頸には、金の頸輪をかけてやつて、そして自分の側において、集まつて來た人たちに、

『この犬が前には私のたつた一人のお友達だつたのです。』と云つてやらう。

こんな考へが、ほんとに美しく、無邪氣に、それからそれへと浮ぶのでした。その時のネルロは大そう幸福でした。

三、誕生日の夜

この日――アロアの誕生日の夜は、ネルロはパトラッシュと淋しく薄暗い小屋で、黒パンのまづい夕飯を食べてゐました。丁度その頃は、水車小屋のなかでは、村の子供たちがすつかり集つて、歌つたり笑つたり、大きな丸いお菓子を食べたり、扁桃のはいつた薑餅を食べたりして、星のやうにキラキラ輝く灯の下で踊つて、笛や胡弓を鳴らしてゐました。ネルロにとつてはよい心持のしない日でしたが、それでもネルロは何とも思はないで、

『パトラッシュ、くよ〜するな。』と云つて自分の腕を犬の頸に捲きつけて、一緒に小屋の戸口のところに腰をかけてゐました。粉挽場の方からは樂しげな聲が聞えて來ます。

『くよ〜するなよ。そのうちだん〜變つてくるから、まあ見てお出で。』

ネルロは先のことを確く信じてゐますが、パトラッシュは犬ですから、今うまい肉の鉢

馳走にありつけなくて、どうなるか分らない將來に、たんと乳や蜜の御馳走をして貰ふのでは、あまり有難くはないのでした。ですから、その後は、アロアのお父さんが通るのを見つけると、パトラッシュはきまつていまいましさうに吠えました。

『今夜はアロアさんの誕生祝ひだらう。』

その時、小屋の隅つこの荒布の寢床の上に寢ゝゐたジェハン爺さんが、ふいに思ひ出したやうにネルロに尋ねました。

ネルロはたゞ頷いて見せました。ネルロはそのとき、今夜のことをお爺さんが忘れてゐてくれたらと切なく思ひました。

『お前はなぜ行かないのだ。』

わけを知らないお爺さんは、また訊ねました。

『ネルロや。お前はいつだつて行くことになつてゐたのぢやないか。』

『だつて、僕、お爺さんの病氣をほつてまでは行けません。』

『いや、わしのことはビュレットの伯母さんが來て見てくれるからいゝ。伯母さんに來て貰ふやうによく頼めばよいぢやないか。……

ネルロ、お前はこのごろどうしたんだ。お前はあそこのお嬢さんの惡口なぞ云ひはしなかつたらうな。』お爺さんは不審でならないのでした。

『いゝえ、お爺さん。惡口なんか……。』とネルロは早く答へましたが、うな垂れてゐる顔は赤くほてつてゐました。

『何でもないんですよ、お爺さん。コゼツの旦那が今年は僕を招ばなかつただけなんです。あの人は僕を一寸思ひ違ひしてゐるんです。』

『だけどお前はなんにもわるいことはしなかつたらうね。』

『それが良いのか惡いのか、僕にはわからないけれど、僕はアロアちゃんの顔を松の板つ片れに寫生しただけなんです。』

『あゝ、さうか。』

お爺さんはだまつてしまひました。ネルロの無邪氣な返事をきいて、お爺さんにはほんとのことが分つたのです。お爺さんは掘立小屋の枯草の寢床に寢てはゐても、まだ世間がどうなつてゐるか、わからなくなつたのではありません。

お爺さんはやさしく、ネルロの可愛い、顔を自分の胸のへんへ抱きよせて、

『お前は貧乏な子だからのう、ネルロ。』と嘆れた聲で、そして身體をふるはせながら、『ほんとに貧乏なんだからなあ、お前も辛い目を見るなあ。』

『いゝえお爺さん。僕は金持と同じことです。』とネルロは慰めるやうに云ひました。

――全くネルロはさう信じてゐたのです。自分は強い大きな力を持つてゐる、王様の力でもまだどうすることも出來ないほどの力を、持つてゐるやうに思へました。

ネルロはお爺さんの傍を離れて、また小屋の戸口のところへ出て佇みました。秋の夜は靜かで、高いポプラの枝が微風にふるへてゐます。空には星がむらがつてゐます。ネルロはぢつとそれを眺めました。

粉挽屋の家のどの窓からも、灯がもれて、時どき笛を吹くのが聞えて來ます。ネルロの頬を傳つて涙が落ちました。そして、

『なにッ、辭來に。』とひとりごとのやうにつぶやきました。

ネルロは立つたまゝ、夜が更けるまで動かずにゐましたが、やがて犬と一しょに家にはいつて、寢床に入りました。

四、秘密

ネルロにはパトラッシュのほか誰にも知らさないたつた一つの秘密がありました。小屋には小さな別室があつて、そこへはネルロだけがはひるところになつてゐました。ひどく荒れた部室ですが、北側から光線がはいります。この部室でネルロは、木片で無細工な畫架をこしらへて、それに大きな紙を張りつけて、すばらしい繪をぜひとも一枚描かうと一生懸命になつてゐるのでした。

――秘密と云ふのは、その繪を描くことです。

ネルロは誰にも繪の描き方を教はつたことはありません。むろん、繪具など買ふ餘裕もありません。それで食べなければならないパンをいく度も食べずに儉約して蓄めたお金で少しばかり畫の具をとかす液を買ひました。そして白と黑との使ひ分けで、目にうつるものを描いたのです。いま、ネルロが木炭筆で描いたばかりの大きな繪は、一人の老人が倒れた樹に倚に坐つてゐるところでした。たつたそれだけです。ネルロは前に、年とつた樵夫のミッセルが晩になるとそんな具合に坐つてゐるのを何度も見たのです。

輪廓の具合や影の描き方を、ネルロに教へたものはありません。でもネルロは自分の老へで、さも年とつた疲れたお爺さんを描きました。

もとよりその畫には、素人らしいところもあるし、缺點もたくさんありますが、しかし自然のまゝを素直に描いた正直な繪です。

パトラッシュは何時間でもちやんと動かずに坐つたまゝ、ネルロの畫が出來るのを見つめてゐました。そして、ネルロの心に希望が燃えてゐるのをさとりました。その希望と云ふのも、おそらくむだな向う見ずのことかも知れませんが、ネルロはこの畫を出品して、年額二百フランの賞品を得るために競走して見ようとしてゐるのです。その頃アントワープの町では、十八歳以下の天分ある少年は、學生でも百姓でもかまはず、鉛筆畫か木炭畫の自作の作品を出して、この賞金を貰ふことになつてゐました。ルーベンスに縁の深いこの町では、三人の畫の大家が審査員になつて、その作品の出來榮えによつて、よい惡いをきめることになつてゐました。

ネルロはこの考へを誰にも云ひませんでした。お爺さんに云つたからと云つても、とてもゆるしてくれるものではなし、それにアロアはもう失くなつたも同じことですから、これもだめです。自分の心持をうちあけるのは犬のパトラッシュだけです。ネルロはいつも、

『あゝ、ルーベンス。ルーベンスの聲が知つてゐたら、きつと僕の繪を入選させてくれるのだがなあ。』とつぶやくのでありました。

出品する繪は十二月の一日に運ばれて、その月の二十四日に選ばれるのが決まるのだから、もしうまく入選すると、クリスマスの時には悦ぶことが出來るのです。

身を切られるやうな寒い冬のある日の朝でした。ネルロは胸をドキ〳〵させながら、いよ〳〵出來上つた苦心の繪を、小さな牛乳車に乘せて、パトラッシュと一緒に町に運んで行つたのでした。そしてきめられた通りに、展覽會の入口のところにおきました。

『大抵駄目だらう。……僕にはわからないけれど。』とその時のネルロは、胸が苦くなる程、臆病になつてゐました。

さて畫はおいて來はしたものゝ、老へて見ると隨分向う見ずのことです。そして馬鹿げてゐるやうにも思はれました。靴足袋もはかないこの貧乏な子供が、ひとりで自分の名もかけないほどでありながら、恥しくもなく本當の美術の大家の先生たちに、自分の畫を見てもらふなどとは、夢のやうな話ではありませんか。

寒い〳〵冬です。その夜、ネルロが小屋へ歸つた後で、雪が降り出しました。そしていく日も降りつゞきました。畑や田の畦道はすつかり雪に埋まつてしまひ、それに添ふて流れる小川は凍りつき、ことに野原は寒さがきびしくありました。こんな塞さになると、

牛乳を配達するのが辛くなりました。朝暗いうちに、死んだやうに靜まつてゐる町へ運びに行くのは、何と云つても辛いことでした。

ことに犬のパトラッシュは、ネルロが年をとるに從つて、力が强くなるのと反對に、自分はますゝ〳〵おいぼれて來るのでした。よく骨の節々が硬ばつて病むことがありますが、でもパトラッシュは決して自分の仕事をやめようとはしませんでした。パトラッシュを樂にさせるためなら、ネルロはよろこんで自分だけで車を曳いたことでせうが、パトラッシュの方でそれを承知しません。たゞ前よりもネルロに面倒をかけることは、車の輪が凍つた轍の跡にはまつて動けなくなつた時、後の方から棒をさし込んでもらふことだけです。パトラッシュはかう云ふ勞働をすることを自慢にしてゐますから、時々、霜がつよく降り道が惡くて、手足が疼き出して大へん苦しがることがあつても、元氣を出して、その自慢の狐に力を入れて牛乳車を曳いて、一心に駈け出すのでした。

『パトラッシュ、お前はもう家で寢てお出で。——お前も隱居していゝ時分だられ。——僕ひとりで十分車がひけるよ。』

ネルロが無理にも止めさせようとしたのは一度や二度ではありませんでしたが、それを承知するやうなパトラッシュではありません。ネルロの心持はよく分つてゐながらも、決して從ひませんでした。パトラッシュを家におくのは、丁度戰爭へ何度も行つた軍人に、大砲の音を聞かしておいてぢつとしてゐれと命令するやうなもので、とても出來ないことです。毎朝起きると、パトラッシュはちやんと、梶棒のところへ行つてゐて、長い間歩きなれた野道を、雪を踏んで駈け出すのでした。

『死ぬるまでは休息してはならない。』

パトラッシュはいつもかう考へてゐました。けれども、時々その最後の休息が何だか近づいて來るやうな氣がしました。そして目が前ほどはつきり見えなくなつたし、寢起きが苦しくなりました。それでも歌會堂の鐘が五つ打つて、パトラッシュに起きて働く時が來たと知らせると、もうぐや〳〵してゐないで藁の寢床を飛び出しますが、苦しいことは苦しいのでした。

『可哀さうなパトラッシュ。お前もわしと一緒に安樂往生をするのかい。』

ジェハン爺さんは、やせこけた鐵だらけの手を動かして、犬の頭を撫でることがありました。このお爺さんと老犬とは、いつもパンの皮を分けて食べました。そしていつも同じ心持で年が寄るのを嘆いて、行末のことを心配してゐました。お互に死んでしまつたら、後に殘るあの可愛いゝネルロはどうなるでせう……。

五、火事

ある日の午後のこと、少年と犬とがアントワープから歸つて來る途中、雪は凍つて、まるで大理石のやうに、ひろい野原を埋めてゐました。ふと足もとを見ると、可愛らしい人形が落ちてゐました。五六寸ばかりの大きさの、それは〳〵美しい太鼓叩きの人形で、少しも傷のついてないほんとに立派な玩具でした。ネルロはそれを拾つて、誰が落したらうと探して見ましたが、落した主がわからないので、それをアロアにやつたらさぞよろこぶだらうと思ひました。

ネルロが粉挽屋の側を通つたのはもう靜かな晩になつてゐました。アロアの部屋の小さな窓はよく分つてゐました。で、ネルロの考へでは、落し主がわからないのだからその人形を仲のよかつた友達にやつたとしても別に惡いことではあるまいと思つたのです。

アロアの部室のすぐ下から斜に下つてゐる屋根があります。ネルロはその屋根にのぼつて、靜かに窓を叩くと、中で小さな灯がつきました。

アロアは窓をあけて見て、一寸びつくりしました。

ネルロは太鼓叩きの人形を、アロアの手に握らせて、小さな聲で云ひました。

『アロアちやん、お人形だよ。雪の上で拾つたの。とつておきなさいれ。神樣が下さつたのだから。』

ネルロはするゝ〳〵と屋根をおりて、アロアが有難うも云へないうちに、闇の中へ消えてゐつてしまひました。

その夜、粉挽場が火事になつて、水車場と母屋だけはたすかりましたが、納屋とたくさんの麥が燒けました。村中は大變な騷ぎでアントワープからは雪をけつて蒸氣ポンプが飛んで來るやら、それは大へんな騷動でした。

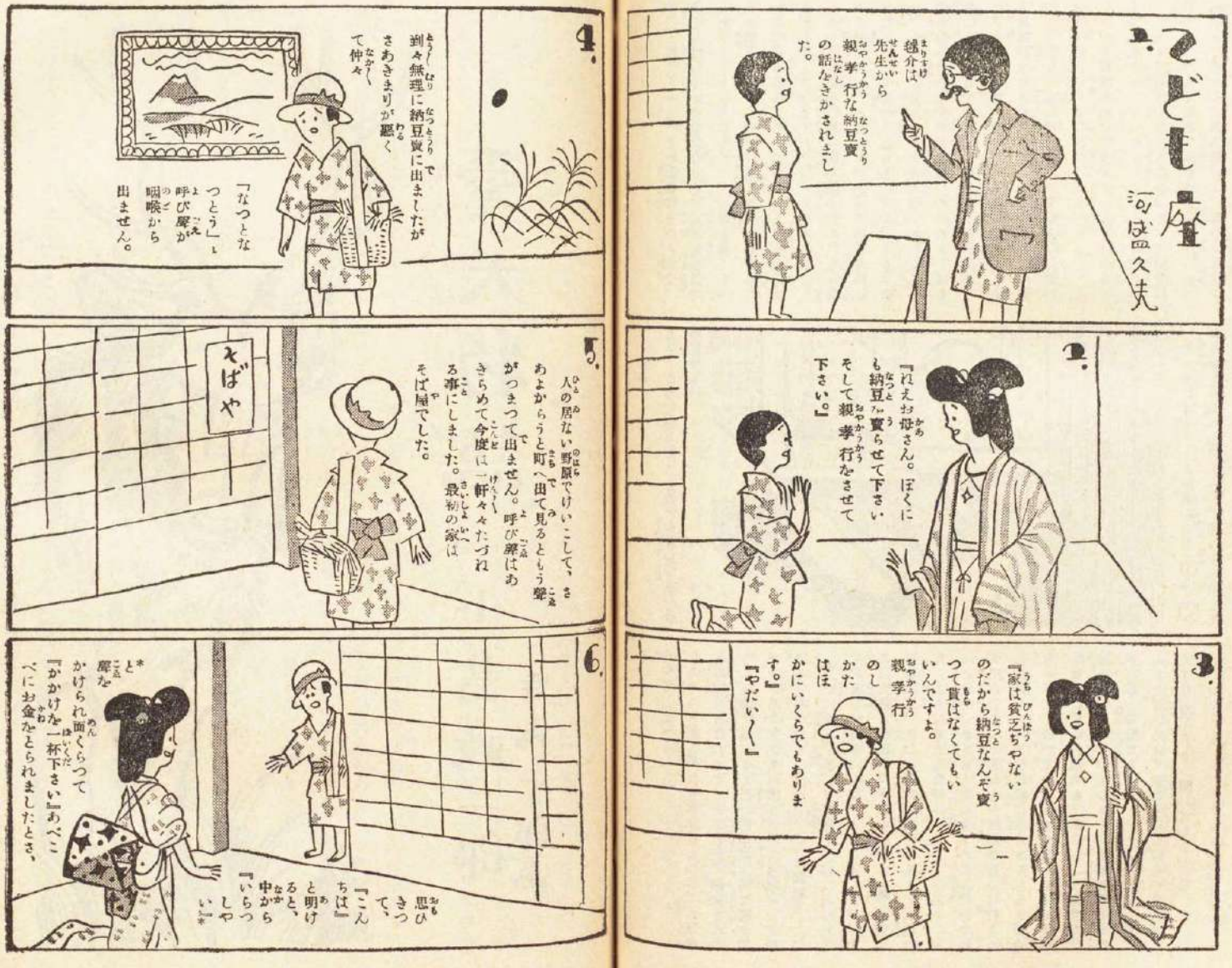
幸ひに粉挽場には保險がつけてあつたので、大した損害にもなりませんでしたが、主人は大怒りに怒つて、この火事は過ちからではなく、きつと誰かゝ附け火をしたに違ひないとどなりました。

この時、ネルロも鐘の鳴るのに驚かされて飛び起きて、皆なと一緒に手傳ひに行きましたが、アロアの父親はネルロを見ると、つきのけて、腹が立つてたまらないやうに、

『貴樣は皆に此處らをうろ〳〵してゐたな。俺はちやんと知つてゐるぞ。貴樣こそこの火事には一番覺がある筈だ。』とどなりました。

ネルロはあまりのことに、ぼんやりしてしまつた。默つたまゝ、聞いてゐました。

（つゞく）


こども屋
河盛久夫
1.
繼介は先生から親孝行な納豆賣の話をきかされました。
2.
『れえお母さん。ぼくにも納豆賣らせて下さい。そして親孝行をさせて下さい。』
3.
『家は貧乏ちゃないのだから納豆なんぞ賣つて貰はなくてもいいんですよ。親孝行のしかたはほかにいくらでもあります。』
『やだい〜』
4.
到々無理に納豆賣に出ましたがさあきまりが悪くて仲々
「なつとなつとう」と呼び聲が咽喉から出ません。
5.
人の居ない野原でけいこして、さあよからうと町へ出て見るともう聲がつまつて出ません。呼び聲はあきらめて今度は一軒々々たづねる事にしました。最初の家はそば屋でした。
そばや
6.
思ひきつて、『こんちは』と明けると、中から『いらつしやい』
と聲をかけられ面くらつて『かかけを一杯下さい』あべこべにお金をとられましたとさ、

愛犬物語

小島政二郎

寺内七郎画

二十一

森へはひるが否や、バックはもう悠々とは歩きませんでした。忽ち野の獣と化して、狼のやうな足どりで、静かにそつと忍び歩くのでした。と、まるで一匹の生き物が歩いてゐると云ふよりも、多くの物蔭に隠見する一つの幽かな影としか見えませんでした。全く、彼はあらゆる物の蔭を利用して、蛇のやうに地上に腹這ひ、蛇のやうに飛び附いて獲物を捕へることを知つてゐました。巣の中の小鳥を捕へ、眠つてゐる兎を殺し、栗鼠が木の枝に飛び附きそこねたのを、巧みに空中で引ッ銜へることも出來ました。バックにとつては、淵に泳いでゐる魚を捕ることさへ、さしてむづかしいことではありませんでした。

秋になると、幾らかでも寒さの弱い土地で冬を越さうとして、大鹿の群が山から降りて來ます。バックは或日、川の傍でさうした一群に出逢ひました。それは二十匹ばかりの一隊で、大將は特に大きな、高さが六尺もあらうと云ふ牡鹿でした。見ると、雖かに射られたのでせう。脇腹に矢が一本突きささつてゐました。

牡鹿は、バックを見るが早いか、手のひらのやうに尖の開いた大きな角を前うしろに搖り動かしながら、物凄い唸り聲を揚げました。小さな目は、毒々しい光に燃えて、見るからバックの強敵であることを語つてゐました。

バックは、まづこの牡鹿だけを群から引き離さうと掛りました。しかし、それは容易な業ではありませんでした。若しあの大きな角と、平たい蹄のいづれかで打たれたなら、唯の一打ちでバックの命は無くなつてしまふでせう。ですから、彼はそれの届かないところに離れてゐて、しかも敵の前へまはつて吠えたり、跳ねたりしなければなりませんでした。

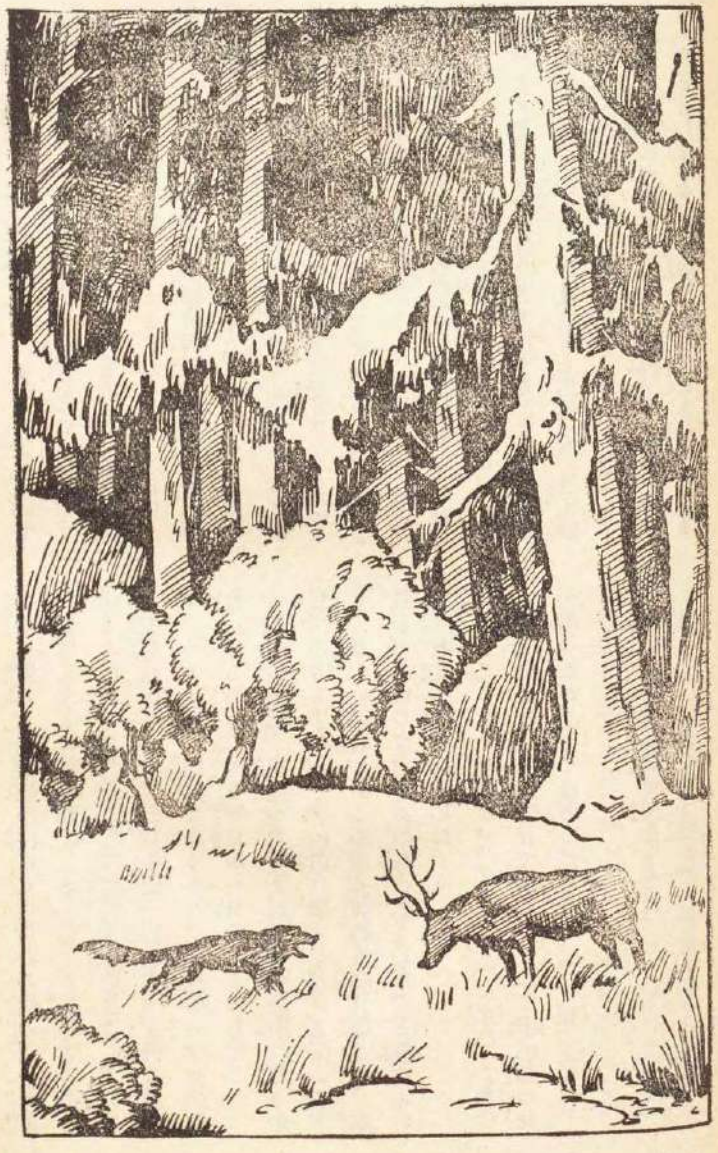
牡鹿の方は、敵にうしろを見せる譯に行きません。で、苛立つて頭をさげて、突ッかゝつて來ました。と、バックは、それを旨くはづしながら、後しざりをして、少しづつ敵を誘き寄せるのでした。しかし、やつと五六歩群から引き離したかと思ふと、若い牡鹿が二三匹引ッ返して來て、バックに攻撃を加へ、その暇に手負ひの大將を群の中へ返らせるのでした。

一たい動物には、強い忍耐力があるものです。疲れず撓まず、一つことをし續ける力は大したものです。例へば、蜘蛛が鋼に坐り、蛇がとぐろを卷き、豹が待ち伏せしていつまでもぢつと身動もしずにゐるのを見ても、お分りでせう。バックが丁度それでした。

大鹿の群を向うへやらぬやう、しかも若い牡鹿を苛立たせ、子鹿を連れた牡鹿を惱ませ、さうして大將の牡鹿を一人荒れ狂はせ荒れ狂はせ、飽きずに一つことを繰り返しました。

さうしてゐるうちに、日が暮れかゝつて太陽の光が薄れて來た時、若い牡鹿達は、敵に目ざされた大將の救ひに引き返すことにだん〳〵厭氣がさして來ました。彼等は、先が急がれた上に、考へて見れば、狙はれてゐるのは群全體ではなく、自分達の可愛い子鹿でもなく、唯群の中の一匹に過ぎないことを知つたのでした。

夕闇が次第にあたりを籠めて來ました。鹿達は一刻も早く安全な塒に身を横たへたくなりました。彼等は老いた牡鹿を一人殘したまゝ、夕闇に尻毛を白く振りながら遠去つて行きました。大將は低く頭を垂れて、自分を見捨ててそゝくさと小走りに走る仲間を――曾つては親しんだ牡鹿や、可愛がつてやつた子鹿や、これまで自分が支配してゐた牡鹿達のうしろ姿を悲しげな目付で見送りました。ああ、彼はどんなに友達のあとを追ひたく思つたでせう。しか



し、彼の鼻先には半大半狼のバックが、牙を剝いて一歩も動かせまいと唸り續けてゐました。

それから後、バックは、晝も夜も敵にコビリ附いたまま、休むことも眠ることも許しませんでした。大鹿がお腹が減つて來て、柳の若芽を食ひ取らうとする隙も與へませんでした。

やがて、大鹿がチョロ〳〵流れの小川を渡つて逃げながら、燃えるやうな喉の渴きを覺えて水を飲まうとすると、バックは忽ち吠えかゝつて一口も飲ませませんでした。

大鹿は苦しまぎれに、矢のやうに馳け出しました。と、バックも續いてあとを追ひました。大鹿は、とてもバックをうしろへ置きざりにすることの出來ないのを知つて、つと立ちどまつたと思ふと、暫く靜かに息を入れてゐました。すると、バックも立ちどまつて、矢庭にゴロッとそこへ寢轉ぶと、赤い舌をダラリと出してハア〳〵肩を波打たせました。その

樣子に安心して、鹿が傍に立つてゐる槲の樹の若葉を食べようと、首を伸ばしました。と見ると、跳ね起きるが早いか、バックは猛烈な攻擊を始めました。

大鹿はかうして、三日の間、何も食べず何も飲まず、ヘト〳〵に疲れて來ました。大鹿がバックの餌食になるのも、もう半日か一日のことでした。

その時突然、或變つたことがこの森の中に起りかけてゐることがバックの鼻に來ました。と云ふよりも、新しい何者かがこの地に訪れて來た感じが、空氣をつたはつてバックの鼻に來ました。と彼はふいに或不安に襲はれました。

『どうしよう』咄嗟に、バックは考へに迷ひました。『目の前の仕事を片附けてから、どんな事が起つたか調べにかゝつては遲いだらうか。』

と、

『遲い。』と云ふ聲が聞えました。

見ると、大鹿はもう疲れ果てたのでせう。力なく目をつむつて、鼻を地に附けんばかりに低く首を垂してゐました。それを一目見るが早いか、バックは大鹿が氣の毒になりました。

一方、彼の心の中では、ます〳〵不安が募つて來ました。――もう大鹿なんかに構つてはゐられませんでした。

あれ程附け狙つてゐた獲物を、思ひ切りよくサラリと捨てると、バックは、愛するソーントンの待つてゐるキャンプの方へ向つて、スタ〳〵スタ〳〵悠々と大股に歩き出しました。獲物を追つてメチャメチャに駈け廻つてゐたにも拘はらず、彼は少しも迷はず何時間も何時間も歩み續けて行きました。方角を見定めることにかけては、どんな羅針盤よりも正しい位でした。

だん〳〵進んで行くにつれて、バックは、何か知らぬがそこら中に『生きもの』の匂の漂つてゐることをハッキリ知りました。それは、ソーントンやピートやハンスとは違つた別の『生きもの』の匂でした。バックは幾度も立ちどまつては、爽かな朝の風を胸一杯に吸ひ込みながら、それが何の匂であるかを嗅ぎ分けようとしました。さうして一層の急ぎ足で駈け出しました。

『危險！』

『危險！』

その匂は、さう云ふ知らせをバックの鼻に送つて來ました。ですから、最後の高い山を越えて平野に下つた時、云ひ直せば、キャンプに近附いた時、彼は非常な用心深さで足を運んで行きました。

二十二

なほ三哩ばかり進んだ時、バックはキャンプとソーントンの方に通じてゐる例の路に出ました。と、我れ知らず首の毛が逆立つて、ブル〳〵と波打ちました。油斷なくあたりに注意を拂ひながら行くうち

に、或る『生きもの』が確にここを通つたことを知りました。今自分は、偶然そのあとを追つて走つてゐるのだと云ふことも分つて來ました。

森は、意味ありげにシーンと默り返つてゐました。鳥は皆どこへか飛び去つてしまひました。栗鼠も一匹として姿を見せませんでした、

バックは、いよ〳〵影のやうに體を辷らせながら忍足で進んで行くうちに、ふいに強い匂が彼の鼻をツンと突きました。

『危險！』

匂を追つて藪の中に分け入つて見るとそこに橇犬の一匹ニッグが横に倒れてゐました。ここまで這ひ込んで死んだものらしく、體の兩脇に矢が二本突ささつてゐました。

百間ばかり行くと、路の眞中に、仲間のジャックが、のたうち廻つて死にかゝつてゐました。

折柄キャンプから、とぎれ〳〵に歌のやうな聲が微かに聞えて來ました。開墾地の近くまで忍び寄つた時、そこには主人の一人であるハンスが、矢を幾本も射込まれて倒れてゐるのを發見しました。

『危險！』

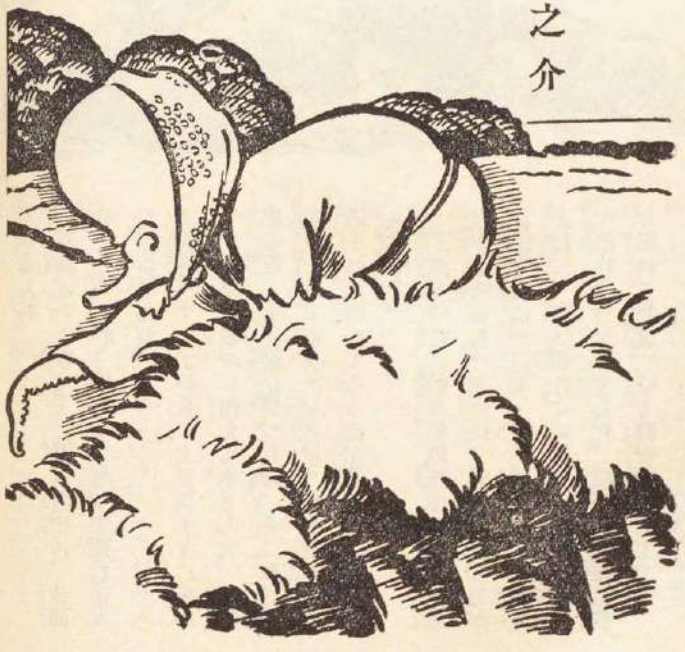
丁度その時、例の松の枝で拵へた假屋の方を眺めたバックは、忽ち自分の毛が首から肩にかけて一齊に逆立つのを覺えました。抑へ切れない怒りの情が、全身に流れ渡つたのでした。同時に、彼は我を忘れて物凄い唸り聲を立てました。

（次號完結）

蛸さん

杜　仙之介

蛸さん　里芋
ほつたかな
足で　ぼくりと
ほつたかな
夜明けの　汀は
波ごんど



この畑　芋畑
お芋畑
誰だか　里芋
つんで行つた
蛸さん　里芋
つんだかな
お一つ　ほつては
つんだかな

寺内萬治郎畫

みすゞ子さん

（薦推）

秋時納新

『乞食の子やーい！』

『しらみたかりやーい！』

いつもきまつてこんな罵り聲が、すみ子が家に歸る途中で待ち構へて居りました。然し唯それぱかりぢや無かつたのです。すみ子の學校歸りを待ち構へて居た男生徒達は寄つてたかつて石を投げつけたり、木切れを放つたり、終ひには馬糞まで打ちつける樣な事もありました。すみ子は人並はづれて惡戯盛い子でありましたけれども、もう殆んど泣かんばかりにして、町はづれの河原にある小屋へ歸るのでした。

同級の女生徒達は皆が仲よく遊ぶ時でも、決して喊いすみ子だけは仲間に入れて呉れませんでした。體操の時間に、皆が手を繋いでだんすをする時等、餘り兩側の者が嫌がるので、氣をきかしていつもその時間だけは缺席しました。思ひ遣りのある先生は、決してそれを止めませんでした。それは、若し無理に强いて、素直に肯ちつゝある彼の女の心を歪めさせ、意地悪い子供にするのを恐れたからでした。

そればかりでなく、すみ子の境遇に同情して居た先生は、主の無い落し物等あると、いつもそつとすみ子に下さつたりしました。兎に角學校では情深い先生のおかげで無事に勉强する事が出來ました。

然し、すみ子は淋しい子供でありました。皆の者にいじめられながら家に歸つて來ても、何とも慰めて呉れる人が居なかつたのでした。すみ子には一人のお母さんがありました。然しすみ子が歸る時分には、家に居た事は殆んどありませんでした。すみ子はよつく一人で、すり切れて、狹い疊の上に突伏して思ふ存分泣きました。

『私はどうしてこんな貧乏な家になんか生れたのだらう。若し家が金持ちさへあつたならば、こうまで皆にいじめられなくてもよかつたらうに……。』

『それに、それにお母さんは又何故紙屑拾ひなんかを始められたんだらう。何か別に他のよい仕事がありさうな物だのに。』

かう思ふと、紙屑拾ひなんかをして居るお母さんが憎らしく思はれた位でした。

然しすみ子も十三でした。尋常科も今年の春ッ業してしまふのです。それに幼い時より色々苦勞をして、人並よりませて居た彼の女に、どうしていつまでもお母さんの御心を汲み分けずに、置く事が出來たでせう。ほん當にお母さんの御心を考へて見ると、こんな我儘を云つて居る自分が恐ろしく思はれるのでした。

『そうだわ、お母さんだつてどんなに此の商賣が否な事だか。こんな私が居る爲に樂な仕事にもつけないで、そして紙屑拾ひになんかになつてしまつたのですもの。それに、それに、若し私が別のお母樣を持つたとしたならば、どうしてこう毎日學校へ行く事が出來たであらうか、そうだ、私が惡かつた。そして御恩返しには、たゞお母樣を喜ばせたり、お樂にさせる事なんだわ。』

すみ子はさう考へると、急に心が晴々として來ました。そしてお母さんの御歸りになるまでに學科のおさらへや豫習を了へてしまつて、家の中の拭き掃除をしたり、外のごみを掃き清めたりするのでした。そしてお湯を沸して、お母さんが御歸りになると直ぐ洗つて上れる樣に、タラヒと冷水とを入口に用意して置きました。それにお米は半分麥を交ぜて五合程しかけて置きました。それは翌朝お母さんが焚く事になつて居りました。

『おゝすいぶん綺麗に片付けやはつたなあ。』

お母さんは ニコ〳〵笑ひながら、娘のとつて呉れた湯で足を洗ひ、身體を拭いて中に這入りました。

淋しいながら、母娘二人の食事は樂しくありました。ほんの粗末な食べ物でした。たとへ人が塵箱の中に投げ入れる樣な物であつても、非常にお腹の空いた二人には、おいしく食べる事が出來ました。

それに毎日ではなかつたけれども、お母さんの拾ひ物の非常に澤山な時等、夜おそくまですみ子はお母さんのお手傳をして、紙屑やぼろ屑等を選り分けました。

『あら！ちよつとお母さん。これみよちやんの今日貰つたお清書だわ。これきつと家の人達に見せない前にお落しになつたのよ。』

すみ子は或る晩の事、學校で一番出來る、一番金持のみよちやんのお清書を見つけました。

『まあお上手ですね。』

お母さんはしよぼ〳〵した目をこらしながら

ら、五燭の電燈にかざしました。
『お母さん、これ何處で拾つたの？』
『さ、どこやつたかよう解らんがな。』
『ではあたし、明日學校で、みよちやんにお渡しするわ。私に下さいね、母さん。』
そして明日お清書はみよちやんの手に渡されました。みよちやんは大變喜んで、お禮に半紙一ぱい呉れました。然しすみ子は決してそれを受け取りませんでした。そして云ひました。
『いゝえ、私達は、世樣の御厄介で生きて居られるのですもの。これくらゐの事は。』
親切な先生は、この美しい有樣を側らからそつと見て居りました。そして次の修身の時間に、二人を、殊にすみ子の事を非常に褒めて聞かせました。然し意地の惡い他の生徒達は、すみ子がほめられるのが、うらやましくてなりませんでした。
『ねえ、よつちやん。すみちやんの家なんか皆の捨てた物ばかりで生きて居る人ですもの。ほんとにするいわ。』
『え、そうよ、私の家のなんか捨てない物まで持つて行つてしまつたのよ。』
『そうお、それよか私の家なんか裏にほしてあつた浴衣がなくなつたのよ。きつとあの人達なんだわ。』
すみ子はそんな話し聲が耳に這入つて來るのが、非常に心苦しくありました。それでたゞ一人、皆から離れて淋しい運動場の隅で、むづかしい算術の問題を解いて居りました。
『おや、すみ子さんなの？ おや、算術を解いてなさるの？ 感心だわねえ。私今日から貴方のお友達になつて上げてよ。ね、一緒に遊びませうよ。』
優しく聲をかけて呉れたのは、みよちやんでした。すみ子は感謝の爲に涙ぐみました。
『あら、みよちやん。何でそんな所に居るの？そんな乞食と一緒に居ると、しらみがうつるわ。』
『早くいらつしやい！みよちやん！ そんな盗つとの子と遊ぶのは否！』
あくまで意地の惡い他の生徒達は、無理矢理みよちやんをひつぱつて行きました。
すみ子は全く考へ出すと情なくなりました。去年でしたか、一度襟元にしらみがはひ廻つて居るのを見付けられてから、毎日毎日『しらみたかり〳〵。』と云はれるのでした。いつだつたかすみ子のお母さんが犬を飼つて居た時分、その犬が他の家の足袋を一足くわへて來たのを、そのまゝ自分がはいたのを見られてから、いつも〳〵盗つとだなんて云はれて居たのでした。

『母さん！私もう學校へなんか行きたくはないわ。ね、母さん。私も明日から何か仕事を見付けて働きますから。』
すみ子は今迄母にかくして居た學校の事を、すつかりお母さんに話してしまひました。お母さんも默つた儘お泣きになりました。
翌朝からすみ子の姿は再び學校に見られませんでした。
二日經ち三日經ち、四日も過ぎた頃は、他の子供等はすつかりすみ子の事を忘れて居りました。然しそれと反對に、日數が經てばたつ程、段々心配なして居た人がありました。それはやさしい受持の先生と、みよ子でした。
みよ子は誰も居ない時、先生に尋ねました。
『先生。すみ子さんはどうして學校にお出でにならなくなつたのでせう？』
『そうね、私も今考へて居た所なんですよ。私今日學校の歸りに廻つて見ますわ。』
翌朝、みよ子は、先生からすつかりすみ子の家の事情を聞きました。そして非常に同情しました。
その日家へ歸つた時、みよ子はすつかり今までの事を、お父さんやお母さんに御話しました。
一週間程經つて、すみ子の晴れ晴れした顏は、再び學校に現れました。その上彼の女は、今は以前と打つて變つた、みよ子さんの樣に美しい着物か着て居りました。皆の者はおどろいて目を見合せました。
それは、すみ子の感心な心掛に感じたみよ子の兩親が、すみ子を子守りにやとふと云ふ名目で引き取る事になつたのです。然しすみ子は、學校から歸つてから二時間程、みよ子と一緒にみよ子の弟の世話をすればよかつたのでした。それで今までよりずつとよい勉强する事が出來ました。然しすみ子は、先生にお願ひして、決してみよ子より上になる事なお斷りしました。先生は默つておうなづきになりました。
皆さん。それは一體どうしたわけなんでせうか。
然し今はそんな事はどうでもよいのです。

その年の卒業式は、みよ子が一番で、すみ子が二番で小學校を出る事が出來ました。
（たはり）
（作者住所　札幌市南七條西十町目、堤工場内）

道灌山

あらそひの杉

西川喜平

道灌山は、南は上野、北は王子への丘つゞきで、今の日暮里から、西ケ原へかけての、一帶の小高い丘を指して云ふのでありました。此所は江戸時代の名所で西に富士、北に筑波の山を眺め、月、雪、花の景色もよいので、四季共に遊ぶ人の絶えない所でした。昔江戸城を築いた、太田道灌の砦の跡だと云ふ說もありますが、これはハッキリわかりません。この話にある爭の杉は、今の田端の西臺（田端驛の上）から、西ケ原の方へ行く道路の、右に當る崖の上にあつたのでしたが、いつか枯木となつて、今では名殘りの幹ばかり某家の邸內にあります。話の中にある（新堀）は今では日暮里、（こまごみ）は駒込、（金杉木）は金杉となつてゐるのです。

新堀から、こまごみへ拔ける、道灌山の山道、目の下に一面の廣野を見晴らす崖端に、一軒の葭簀張りの茶店がありました。

この茶店の床几に腰を掛けて、酒を飲みながらはなし合つてゐる、二人の浪人風の武士がゐました。

一人は年の頃五十ばかりで、色の褪めた黑木綿の紋つきに、縞目もわからぬほど汚れた袴を着けて無反りの朱鞘の大小を差してゐました。

また一人は、十ばかりも年下に見える小男で、洗ひざらした茶縞の布子に、繩のやうによれ〳〵になつた帶をしめて、ろ色の鞘の、はげた脇差を、一本さしてゐました。

二人は大分醉が廻つたらしく見えました。

年上の武士『別れてからもう三年になるが、その風體では、まだいゝ稼ぎにも、ありつけないと見えるな。』

年下の武士『オイ〳〵、お手前の姿だつて、あんまり威張れた柄でもなからう。こう見えても身共は今王子の稻荷の家來になつてゐるのだ。』

『ナニ、稻荷の家來だ、妙なものになつたな、それでは稻荷の神主か。』

『ウンニャ、』

『神主でなければなんだ。まさか狐の婿になつたのでもあるまい。』

『馬鹿にするな狐の穴の番人よ。』

『ブッ、ウフ、、、、コン〳〵さまの穴番とは情ないな。』

『コレ勿體なくも、王子稻荷大明神の御券屬、お白狐さまの番人だ。そんなことを云ふと罰があたるぞ。』

『ばちでも棒でも持つてこいだが、一體、穴の番とは何をするのだ。』

『狐の穴へくる參詣人の世話をするのだ。それで油揚や、强飯は毎日食ひ飽き、たまにはお御酒も飲めるし、賽錢も、くすねられるのだ。』

『それあ羨しいな。己も仲間へ入れさせないか。』

『どうして〳〵、稻荷に信心をする者でなければ勤まらぬのだ。』

『ウッフ信心が聞いて呆れらあ。どうしてお前が信心をはじめたのだ。』

『ナニサ毎日ひもじいので、强飯を盜みに穴の中へもぐり込んだのを、神主が見つけたので、急ごしらえの信者になり、とう〳〵番人になつたのだ。』

『アハ、、、、泥棒の番人とは面白いな。』

『ところが毎日油揚に强飯ばかりで、うまい酒も飲めないから、時時こゝらあたりへ、ぶら〳〵出かけて來るのだ。』

『フーム、この近所にまだ狐の穴でもあるのか。』

『ナニ、かわつた金儲を考へて稼ぎにくるのだ。』
『稼ぎと云つて、マサカ昼日中追ひはぎでもあるまい。』
『人聞きのわるい事を云ふな。こういう日和にはいゝ鳥がかゝるのだ。』
『いゝ鳥とは耳よりの話だ。舊友のよしみに聞せろ〳〵。』
『イヤ仕方がない話してやらう。ソラあれに見ゆる爭の杉、あれが金儲の道具になるのだ。』
『ナニ爭の杉とは。』
『お手前は、あの杉を知らないのか。』
『知るも知らないも、こつちへ來てからまだ一ト月、二三日あとにやうやく金曾木に、落ちついたのだ。シテ其杉は何所にあるのだ。』
『ソラ向ふの崖端に、ヌット立つてゐる大木だ。』
『ムゝあれか、杉と云ふが、どうも松のやうに見えるな。』
『ソコダ、それが金儲のところだ。遠くからは松に見え、近くよれば杉なのだ。』
『妙な木もあつたものだ。モットくわしく話して聞かせろ。』
『ヨシ〳〵一席辯じてやらう。息つぎに一杯ついでくれ……エッヘン、なんでも昔のことださうだ。奥州の方から旅の武士が二人、道連れになつてやつて來たのだ。やがて荒川を渡つてくると、遠くの野道からあの木を眺めて、大さう高い木だ、めづらしい木だと云つてゐたが、一人の武士は、あの大木のスーッと立つてゐるのは杉であらうと云つた。所が、もう一人の武士は、イヤ木振りは杉でも葉の繁りやうは松に違ひない杉などゝは目違ひであらう。イヤさいう貴殿こそ目違ひだ。ナニ松だ、イヤ杉だ、杉だ松だ、松だ杉だ、松だ。』
『エ、無駄を入れずに早く先を話せ。』
『せくな〳〵、これからが面白いのだ。そんなら松か杉か、二人で賭をいたさうとなつた。』
『ムゝ面白くなつて來たな、ソレカラ。』
『コレ賭と聞いて乘り出すな、現金な男だ。それから二人は賭物の

相談をはじめた。』
『何を賭た、金か、持ち物か。』
『ところが命を賭た。』
『ナント云ふ馬鹿な奴等だな。』
『全く馬鹿なことだ。二人はそれから、木の下へ行つて、とう〳〵杉とわかつたので、松と云つた奴は腹を切つたのだ。』
『ヤレ〳〵、途方もない事をしたな。』
『身共はその話しで思ひつき、今日のやうな日和にぶらついてゐると、稲荷や權現の參詣人、また旅人などがチラホラ通る。それを見かけて道連れになり、だん〳〵話しかけて、松か杉かの賭を仕掛け對手が松とくればゞたもの、一日に一人ぐらいは引つかゝるので、小遣ひ取りぐらひにはなるのだ。』
『ナルホド巧い事を考へたな。舊友のよしみだ仲間へ入れろ。』
『イヤ舊友々々とづう〳〵しい男だ。仲間入りの祝ひ酒でも飲ませろ。』
『そんなことは心得てゐる。サアサア遠慮なく飲め〳〵、ついでやるぞ。』
『オイ〳〵この德利の酒は身共が買つて來たのだ。』
『マアさう怒るな、一ト仕事にありつけば儲は山分だ。ケチ〳〵するな。』
『イヤ呆れてものも云へない。ヨシ〳〵大まけにまけて仲間へ入れてやらう……オ、もう日ざしは七つ下りだ。（今の午後四時過ぎ）そろ〳〵出掛けやう。』と、二人は無駄口をきゝながら、ブラブラ歩き出しました。
すると後から、『モシ〳〵王子

へはどう參ります。』と呼びかけられて、二人は振り返つて見ると、町人體の若い男がゐました。

武士は急に言がかはつて、

『王子へ行きなさるか、この道を眞直に行きなさるのぢや。』と、云ひながらよく見ると、身なりから容子が、大分懐もあたゝかさうなので、二人は顔を見合はせて、ニッタリと笑ひ顔をしました。

町人の男は小腰を屈めて、

『私は淺草の者でございますが、今日はじめて王子の稲荷へお詣りをいたしますので。』

『左樣か、拙者も王子へ參るのぢや、丁度よい道連れが出來た。』

『有がたうございます。お武家さまのお供なれば氣丈夫でございます。』

『わしらも話し相手がふえていゝハ、、、、、。オ、あれに大さう高い松があるが、珍らしいものだな。』と、年かさの武士が云ひました。

すると年下の武士は、

『なるほど立派な木だ。しかしあれは松ではない杉らしいぞ。』

『ナニ松に違ひない。ノーお前も松と思ふだらう。』と、年かさの武士は云つて、この町人は何と云ふかと、ヂットその顔を見つめました。

年下の武士も心配さうに、横目でヂロ〳〵見てゐますと、町人の男は高い木を見ながら、

『私の見ました所では、』

『松と見えるだらう。』

『それとも杉かな。』

『松と見えます。』

『パタッ』と、年かさの武士は思はず、怒鳴りました。

『エッ』と、町人の男は驚きますと、

『イヤ拙者の見たとほりなので、パたと申したのだ。』

年下の武士は、わざと怒つた顔つきで、

『二人が松と云つても杉に違ひない。武士が一旦云ひ出したからには、どうしても杉と云はせねば置かぬ。』

『イヤ何んと申しても、この町人の申す通り松に違ひはない。』

『ナニ杉だ杉だ。』

『イヤ松だ松だ。』

二人の武士の言ひ爭ふのを見て町人の男は、

『お二人でさう言ひ合ひをなさつても果しはございません。いかゞ

ら、『ナルホド、それはよい思ひつきだ。拙者はこの刀を賭けやう。』

『しからば身共も、この刀を出さう。町人は何を賭るな。』

『私は失禮ながら、金子を賭ませう。』

『金子とは何程賭るのぢや。』

町人の男は、懐から財布を出して、チャラ〳〵音をさせてゐましたが、やがて手の平へ乘せて出したのは、ピカ〳〵光る、五枚の小判でありました。

二人の武士は、驚いて目と目を見合せましたが、嬉しさが込み上げて、年かさの武士は、

『ウフ、、、、、』と、笑ひました。

年下の武士は、わざと睨みつけて、『貴殿は笑ひ上戸と見えるな。今に杉であつたら、その金は身共の物、後悔しめさるな。』

『ナニ後悔、ウフ、、、、、いたすものか。』

町人の男は仲へ入つて、

『お二人が言ひ合ひをなさる度に氣がもめてなりませぬ。失禮でございますが、お二人のお腰の物は

でございます、どちらがあたりますか、賭事をいたしませう。』と云ひ出しました。

二人の武士は嬉さをかくしなが

私が、お預りをして、この金はあなたへお預けをいたしませう。』

年下の武士は、急に笑顔になり、二人の刀を渡し、小判を取つて懐へ入れました。

やがて三人は連れ立つて、大木へ近寄つて來ますと、年下の武士は、ヘンな顔をしながら、キョロ〳〵四邊を見廻してゐましたが、

『オヤッ變だぞ、道を間違ひはせんか、外に木はないか。』

『外にないかと云つて、お前よりほかに知る者はないぞ。』

『コレは妙だ、ヘンだ、不思議だ。』

と、年下の武士は、顔色をかへてグル〳〵廻り出しました。

武士が顔色をかへたのも道理でいつもの杉が、いつの間にか、スッカリ松になつてゐたのでした。

年かさの武士は眞赤になつて、

『ヤイ太い奴だ、よくも己をだましたな。』

町人の男は怒つてゐる武士の袖を引いて、

『松なればこつちが勝つたので、だまされたのではございません。』

『ウルサイッ、默つてゐろ。』

『不思議だ〳〵、杉が松に化たのだ。』

『ナニが不思議だ、松に化たなどと嘲弄いたすか、もう勘辨はならぬぞ。』と、年かさの武士は腰に手をやつたが、刀のないのに氣がついて、

『アッ町人刀を返せ。』と、見ると町人の男の影も形もありませんでした。

『ヤッ大變〳〵あいつは泥棒だ。』

『ナニ泥棒、……しかし騷ぐな、騷ぐな、刀を奪られても赤いわしのさび刀だ、小判五枚と取り替へれば損はあるまい。』と聞いて年かさの武士も顔を和げました。

『ナルホド、赤いわしと小判と取り替へて逃げるとは、ヨッポド間抜けな野郎だ。早く小判の顔を拜ませてくれ。』

『ヨシ〳〵』と、年下の武士が、懐から小判を出して手の平へ乘せるなり、二人はアット聲を上げて驚きました。今まで光つてゐた小判は忽ち木の葉にかはり、それと一緒に松と見えた大木は元の杉の木になつてしまひました。（をはり）

花嫁の智慧

松平道夫

岩岡とも枝畫

昔ある國に一人の立派な王樣があつて、その王樣には七人の皇子がありました。その中六人まではお嫁さんを迎へて幸福に暮して居られましたが、一等末の皇子だけは適當なお嫁さんが見つからないので、成年に達して後も未だ獨身でをられました。

王樣は七人の皇子の中でこの末の皇子を一等可愛がつて居られましたので、末の皇子には世界で一番綺麗で賢いお嫁さんを貰つてやらうと思つておいでになりましたがなか〳〵見當りません。

ある日王樣は、自分の最も信用しておいでになる僧侶さんをお呼びになつてお尋ねになりました。

『わしはもう隨分前から末子の嫁を探して居るが見當らない。貴方は隨分いろ〳〵な國へおいでになつて居るから適當な娘を御存じかも知れぬ。御心當りはありませんかね。』

『いや、御尋ねで御座いますが、私は僧侶、若い娘には一向用が御座ひませんので、つひ見落しました。』

と僧侶さんは苦笑しました。

『それは殘念。ぢやが近い中に又諸國を巡遊なされるさうぢやが、その時は氣をつけて探していたゞきたい。』

と、王樣はお頼みになりました。

『承知いたしました。王樣のお頼みですから、早速出發いたしませう。』

と僧侶さんは引受けて、王樣の前を退りました。そして僧侶さんは次の日「花嫁探險」の旅に上りました。

僧侶さんは市から村、村から里と、いやしくも美人賢女の名を聞けば千里の道も遠しとせず訪ねて行きましたが、これならと思ふ程の娘には出逢ひませんでした。

或る日のこと、僧侶さんは美人探險につかれはてゝ、廣々とした青草の野をとぼ〳〵と歩いて居りました。足許には名も知れぬ綺麗な草花が咲いていゝ匂ひをあたりに漂よはせてをります。

處へ不意に大勢の娘が花を摘み乍ら現はれました。

『あら、こんな綺麗な花が咲いて居ますわ。』

『まアいゝ匂ひだこと。』

『本當に綺麗な花ね。』

と娘達は爭つて花を摘んで居ます。僧侶さんはもしやこの娘達の中に自分の求めて居るやうな娘が居りはしないだらうかと、娘達のあとをつけて行きました。

娘達は花を摘み乍ら野末の清い水流の岸に來ました。川の向ふには森があつて眞白い綺麗な花が咲いて居ります。

『あゝ、この川には橋がありませんよ。』

と、先頭に立つた娘が叫びました。

『でも淺さうですから歩いて渡りませう。そして早くあの森へ行つて白い花を摘みませう。』

と次の娘が云ひました。そこで娘達は靴を脱いで手に提げ、着物の裾をかゝげて川を渡りました。

たつた一人、一等後から渡つた美しい娘だけは靴も脱がず、着物の裾もかゝげず川の中へ這入つて行きました。僧侶さんはこれを見て不思議に思ひ乍らそのあとに隨い

て川を渡りました。

川を渡つた娘達は森の中に分け入りました。そしてめいめい勝手に樹に登つて白い花の枝を手折つて居りましたが靴を脱がずに、川を渡つた娘だけは樹の下に立つて居て、

『その枝を私に下さいな、ああそれ〳〵。』

と樹の上に登つた娘に云つて居りました。僧侶さんはいよいよ不思議に思つて娘に近づいて、言葉をかけました。

『お嬢さん。一寸、貴女にお尋ねしたいことがあるのですが。』

『はア、どんな御用ですか。』

『外ではないが、川を渡る時他の娘さんは皆靴を脱いだのに、貴女だけは何故靴を履いたまゝ川へ這入られたのです。』

『解り切つたことではありませんか。靴は足を護る道具でせう。陸ならば荊棘でも石瓦でも見えますから除けて通れますが、水の中には何のやうな危險なものがあつても見えませぬ故、毒虫や荊棘に刺されるかも知れないと存じまして、靴のまゝ這入つたのでございます。』

と、娘は答へました。僧侶さんは感心して又訊きました。

『貴女は又どうして他の娘さん達と同じ樣に、樹に登らないのですか。』

『若し樹の枝が折れたら死ないま

でも傷をしますから、登らないまでです。』

と娘は答えました。

『成る程』と僧侶さんはすつかり感心して了ひました。そして、

『一體貴女は何家のお嬢さんですか。』と訊きました。

『はい、私は曇摩訶羨の娘です。』

と娘は答えました。

『曇摩訶羨？』

と、僧侶さんは目を見張りました。そしても一度よく娘の顔を見ました。娘の顔はどんな娘の顔よりも美しく綺麗でした。曇摩訶羨と云へばずつと前この國の大臣で非常に賢い人でした。それで王樣は重く用ひになりましたが、それを妬む者があつて、いろ〳〵王樣に惡口を云ひますので、曇摩訶羨はつく〴〵世の中がいやになつて大臣をやめて田舍へ引込んで了つたのです。其後曇摩訶羨が何處に棲んで居るのか知る人もありませんでしたが、不意にこんなところで曇摩訶羨の名を訊いて驚いたのも無理はありません。

『御兩親共御達者ですか。』

『はい兩親共達者でございます。』

『御邸はどちらですか。』

『つひその村端でございます。』

『では一寸、お父樣に御會せ下さいませんか。』

と僧侶さんはいよ〳〵自分の目的が達する時が來たと思つて云ひました。

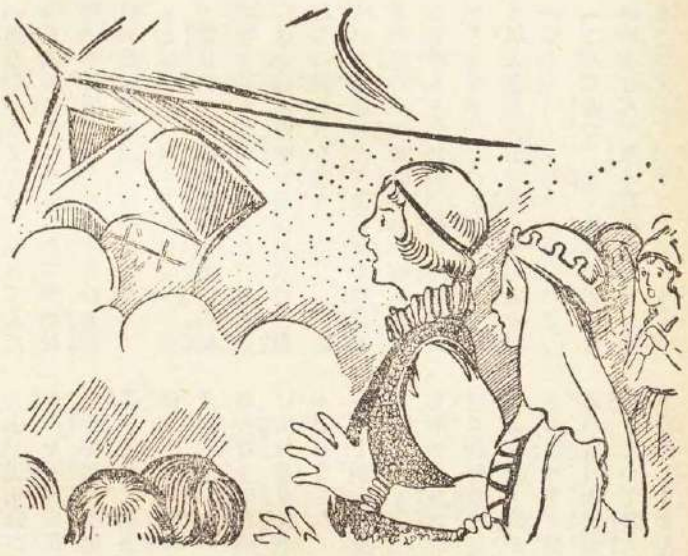
『よろしう御座いますとも、おいで遊ばせ。』

と云つて娘は先に立つて自分の家に案内いたしました。

そこで僧侶さんは曇摩訶羨に會つて自分の目的を話し、お嬢さんを王樣の末の皇子のお嫁に貰ひたいと云ひました。曇摩訶羨も大いに喜んですぐ承知しました。

僧侶さんはすぐその旨王樣に知らせましたので、王樣は大勢の家來をつれ、すぐ迎へにおいでになりました。そして盛大な結婚式を擧げられました。その結婚式は七日七晩續きました。

結婚式がすむと末の皇子は花嫁をつれて國内をお廻りになりました。ある日廣い〳〵野原を越えて一寸賑かな町に着きました。町の



人々は、

『そら皇子樣のお着きだ。お迎へしろ。』

と町中の人々が、出迎へました。町の入口に大きな旅館が一軒ありました。建物は古いが涼しさうな旅館でしたから皇子は妃を顧みて、

『涼しさうな旅館だ。一寸、休んで中食を致さう。』

と供の者をお止めになりました。妃は駕籠を出て旅館の庇を見て皇子の袖を捉へて、

『お這入りになつてはいけません。』と、いひました。

また供の者に向つても、

『皆の者も這入つてはならぬ。這入つて居る者は早く出ぬと命が危い。』

と云ひました。この時炎天の長旅にびつしより汗をかいて、全身に痒味を感じたのでせう。いろいろな荷物を負ふた象の群が、各自軒の柱に體を凭せて背を擦り始めました。旅館は一振れ、二振れして凄まじい音と共に倒れて了ひました。

皇子は倒れた家を見て、

『恐ろしいことぢや、余はすんでのことに殺されるところぢやつたが、不思議に助かつた。これも妃のお蔭げぢや。』

とお喜びになりました。

數日後一行は高い山と山との間の谷を辿つて居りました。谷の上には太古の森林が覆ひ被さつて折からの強い日を遮り、冷たい風が吹いて來ました。供の者も皇子もその涼しい風に吹かれながら休息して居りましたが、妃は汗を拭かうともせず、じつと蒼空を見上げて居りましたが、又皇子の袖を引いて、

『こんな處で、永く休んで居てはいけません。早く高臺へ參りませう。』

と、供を急がせました。一行は歩みを早めて正面の小山に向ひ、先頭が漸く小山の麓にかゝつた頃墨を流したやうな黑雲が空一面に擴がつて、轟々たる雷の音さへ聞え出しました。そして麓から三分の一程上つた頃、恐しい雷光と共に大粒な夕立が盆を覆すやうに降り出しました。一行は狼狽てふためいて小山の上の森の中に避難しました。

やつと夕立が止んで森から外に出られた皇子は、麓の谷を見て、

『あゝ。』と驚かれました。それもその筈です。先刻一同が休息して居た谷は大雷雨と共に一時的の湖水となつて跡方もなくなつて居るではありませんか。供の一行も、それを見て思はず身震ひをしました。皇子は更に妃の手を取つて、

『余のみか、皆の者の命まで、一度ならず、二度までもお前のために救はれた。』

と云つて感謝されました。かうして妃のために一行は無事に都に歸りましたが、その當時隣國の王は折あらば戰を開いてこの國を征服しようとして居ましたので、先づ使者を遣して彼の國に恐るべき人物が居るか居ないかを試さうとしました。

その役目を云ひつかつた使者は二匹の同じ毛色の馬をつれてやつて來ました。そして王樣の前へ出て、

『これは私共の王から、陛下に獻

上いたす馬で御座います。どうかお納め下さいますやうに。』

と云ひました。

『これは〳〵有難く頂戴いたす。』

と王樣は大層お喜びになりました。すると使者は王樣に向つて、

『陛下、この馬は母子で御座ひますが、何れが母、何れが子で御座ひませうか、ついでに伺つて參れとのことでございます。』

と云ひました。王樣ははたと當惑なさいました。居揃んだ六人の皇子も、王の近臣も只顏を見合せるばかりでした。その中で末の皇子は何喰はぬ顏をしてつと立つて室外に出ました。そしてすぐ樣自分の部屋に歸つて妃を呼んで訊かれました。

『馬の母子は、どうして見解けるか？』

『馬の母子の見解け？　それは何んでもありません。馬の好きさうな草の頭を揃へて二匹の前へ差出して御覽遊せ。食はずに隣へ推せば母馬、それを其儘食べれば子馬で御座います。』

と、妃は笑つて答へました。

『なあるほど』

と、皇子は感心してすぐ樣飛んで戻つて父王の前に出ました。そして、

『その見解けは私がしませう。』

と云つて家來に命じて飼馬草を一束み持つて來させました。

『何、お前が馬の見解けをする。それは面白い。早くやつて見い。』

と王樣は溺れた者が助け舟に出逢つたやうに、喜んで云はれました。

末の皇子は飼馬草を手に握つて庭に降りて二頭の馬の鼻先へ突き出しました。右の馬は鼻面を寄せて草の香をかひだ後、食はうとせず左へ押しやりました。左の馬は二度、三度嬉しげに足搔して飼馬草を喰ひました。そこで皇子は使者に向つて、

『右が母馬、左が子馬です。』

と、云ひました。

『如何にも左樣で御座います。』

と使者は答えて、逃げるやうにして本國へ歸りました。そしてそのことを自分達の王樣に報告しました。隣國の王樣は殘念さうに、

『そんな賢い皇子があらうとは知らなかつた。然しこのまゝ引込むのも殘念ぢや。モ一度余の愛養の蛇を遣して試みよう。』

と又使者をやりました。使者は又王樣の前に出て一個の檻を足下に捧げて云ひました。

『過日は馬の鑑定、誠に御見事で御座いました就いて又この蛇一對大王に獻じ奉れとのことで再度推參仕りました。さて檻の中の蛇の雄雌を我が國に見わける者が御座いません。御見わけが願へれば、後學のために拜聞仕り度う御座います。』

王樣は使者の捧げて居る檻に眼を落しますと、その檻の底には琥珀色をした、毒々いし全く同形同色の二匹がうね〳〵と横はつて居ります。王樣は當惑の眉をひそめて六人の皇子、及び近臣等を顧みて云はれました。

『お前達も、近く寄つてこれを見よ。』

けれどその形も色も餘り同じなので誰もそれを見わけるものがありません。王樣は仕方なく末の皇子を顧みて言はれました。

『お前にも解らぬか。』

『いや解ります。』

と末の皇子は言ひました。

『何、解る、何れが雄で何れが雌ぢやな。』

『今すぐには困ります。一寸見わけの準備をいたします。』

さう云つて末の皇子は室を飛び出して自分の室に歸りました。そして妃に向つて訊きました。

『蛇の雌雄を見わけるにはどうすればよいか。』

『左樣なことを妾にお聞き遊ばすまでもないことで御座います。柔かい毛氈の上へ二匹の蛇を置いて御覽遊せ。雌は柔かい物を愛しますからじつとして居りますが、雄は粗暴ですから毛氈を嫌つて働ひ出します。』

『ふむ。なある程、では柔い毛氈をくれ。』

と妃の差出す毛氈を抱えて早速王樣の室へ飛んで戻りました。

『さア準備が整ひました。御覽なさい。』

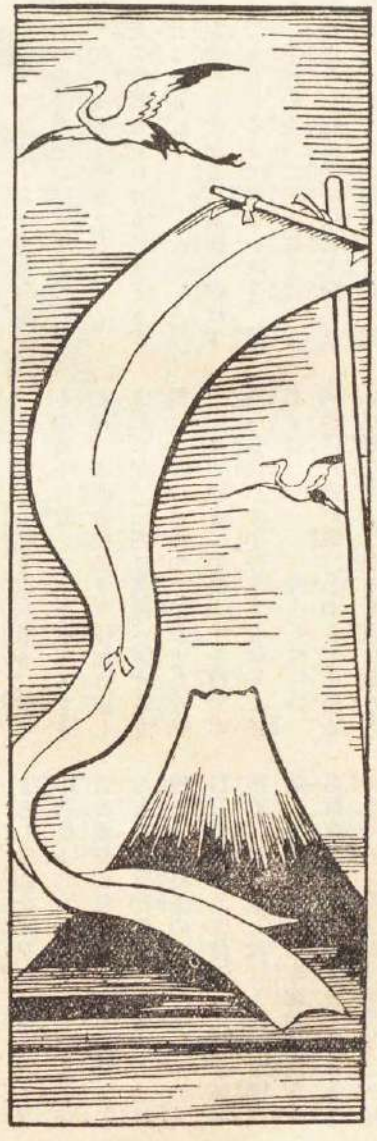
と云つて毛氈を庭へ敷き、檻をその眞中に置いて蓋を取り外しました。二匹の蛇はすぐ樣働ひ出しましたが、一匹は其處へとぐろを捲いてじつと蹲つて了ひましたが一匹はそのまゝ毛氈の上を傳つて庭へ匍出して了ひました。そこで皇子は、

『逃げた方が雄、じつとして居るのは雌です。』と誇らし氣に言ひました。使者は顏を赤くして、

『誠に左樣でございます。恐れ入りました。』と又逃げるやうにして本國に立ち歸りました。

王樣は始めて愁眉を開きました隣國の王は使者からの復命を聞いて、早速家來に名玉と珍器、寶物を持たせて、『どうかこれからよろしく御交際を願ひたい。』と、申入れました。そこで王樣も大いにお喜びになつてそれをお受けになりました。そして今度のことは皆な末の皇子の手柄だと云ふので自分は隱居して位を末の皇子にお讓りになりました。それから國は益々榮え、皇子は幸福な生涯を送られたことは、申すまでもありません。

（をはり）



源氏の白旗

（伊豆の頼朝旗上げ物語）

三島霜川

寺内萬治郎畫

二　山木の夜討

安達藤九郎盛長は、頼朝の代理として、三島明神へ戰勝を祈りに行きました。これが、なか〳〵、歸ッて參りません。いつか、巳の刻（午前十時）も過ぎて了ひました。

すると、その頃から、頼朝の顏が、だん〳〵、心配らしくなッて來ました。

『いよ〳〵、旗上げしようといふ今となッて、どうなされたのだ。』

と、北條時政や、加藤景廉などが、その顏色を見て、これも心配をし始めました。蛭ケ小島の館には今まで、照りかゞやいてゐた空が、急に曇ッたやうに、ある暗い影がさしました。そこらが、變に、物靜になッて來ました。

降りつゞいた雨があがッて、空は高く、秋らしい日影が、はれ〴〵と、そこらぢふに輝きあふれた日でした。かなたには、駿河の富士がによッぽりと、殊に爽に、殊に麗しく、その姿を見せて居りました。牛鍬大路には、三島明神のお祭に行く里人の影が、チラホラと、つゞいてゐました。

『佐々木兄弟は、何んとしたのであらうな。昨夜のうちに來るやうにと、あれほど堅く申合はせて置いたのぢやが。』

頼朝は、重い口を切ッて、ふいと、さう云ひました。

『仰せでございます。日取を取違へるといふやうなこともないと存じます。』

と、時政も、しぶい顏をしました。――時政にも景廉にも、今、頼朝の心配の因が、ハッキリと解ッて來ました。

『よもや、變心したのではあるまいな。』

頼朝は、さう云ひたくないといふやうな口振で、さう云ひました。口にこそ出さなかッたが、頼朝は

昨夜から、それが、心配で耐らなかッたのです。
『いや〳〵、佐々木殿兄弟に限ッて、變心されるやうなことはないと存じます。』
と、景廉は、堅く、さう信じてゐるやうに云ひました。
『ム、』と、呻くやうに云ッたきり、頼朝は、默ッて了ひました。いら〳〵しい心もちが、その眼に光りました。
館のうちは、また、しんと、しづまりかへッて了ふ——どうも「旗上げ」の勇ましさが、ひしやげて了ッたやうな有樣でした。
『手筈が違ふた。今日はもう、とても、旗上げは出來ないだらう。』
少らくしてから、頼朝は、ひとり言のやうに、さう云ひました。
時政や景廉等は、お互に顔を見合はせて、じッと眼を落しました。

館のうちには、重くるしい不安が、漲ッて來ました。

頼朝の待ち兼ねてゐた佐々木兄弟といふのは長子は太郎定綱、次は次郎經高、それから、三郎盛綱、四郎高綱の四人で、いづれもその頃父の源三秀義と一緒に、相摸の澁谷重國のところに、世話になつてをりました。
重國は、平家の人でしたが、俠氣のある武士でした。
「平治の亂」の後、平家の勢についてゐるのを忌々しいと云ッて、佐々木源三秀義は近江の所領を離れて、流浪して、奥州の方へ行かうとしました。その途中、相摸まで來ますと、澁谷重國が、秀義の勇氣とその氣骨とを愛して、「何も奥州まで行くことはないではないか」と、云ッて、無理に自分のところに引止めて置きました。そして、娘の婿にして、それから、二十年の間ずッと世話をして居りました。尤も、定綱達四人の兄弟は、重國の娘の子ではありませんでしたが……
源三秀義は、頼朝が、蛭ケ小島に流されると、すぐに訪ねて行ッて、いろ〳〵慰めました。その後ちも、年頭、歳末、その折々に、消息をしたり、挨拶に行ッたりして居りました。それで、頼朝も、非常に力にして、「旗上げの企」も、誰よりも先きに相談をしました。
源三秀義は、旗上げの「機」が迫ッて來ると、長子の定綱を京洛へやッて、平家の樣子を探らせました。その定綱が、四五日前に、蛭ケ小島まで歸ッて來て、平家の樣子を知らせました。そこで、いよいよ、八月十七日に、旗を上げようといふ事に相談が纏ッたのでした。
すると、定綱が、『私はちよッと、相摸まで歸ッて參ります』
と、云ひました。
『十七日までは、もう間もない。このまゝ止ッて、弟等には、使をやッて、招いたが宜しい。』
と、云ッて、頼朝は暇をやるのをしぶりました。
『しかし、戰に出るからは、生きて還らうとは思ひません。それに、いろ〳〵、支度もございます。』
と、定綱は、强ッて、暇を願ひました。
『それならば、十六日までには、必ず參れ。』
と、きッと云渡して、頼朝は、爲方なく暇を許しました。
『命にかけても、參ります。』
と、固く誓ッて、定綱は、相摸に歸りました。
その定綱が、十七日の朝になッても來ないのです。定綱ばかりでなく、兄弟のうちの一人として、影も見せないのです。人數から云ふと、僅に四人か五人

のことですが、頼朝に取ッて、佐々木兄弟は、大切な味方です。それが、來る、來ないといふことは、士氣にも障り、その後の活動にも影響します。それで、頼朝は、人知れず、心を苦しめて居りました。

そのうちに、午ル近くになりました。佐々木兄弟は、まだ、やッて參りません。

『いよ〳〵、駄目だ。』

頼朝は、さう思ひました。さうして、その日の旗上げを見合はせる他はないと考へました。

午過になりました。それでも、まだ、佐々木兄弟の影は見えませんでした。

『いよ〳〵、來ないな、こりや、變心したのであらうぞ。』

頼朝の顏には、あり〳〵と、失望の色が見えて來ました。そして、ある不安が……

『俠氣ではあッても、重國は平家の者だ。佐々木の奴どもが變心したとすると、今度の旗上げが平家の方に洩れて了ふ。これは、取返しのつかぬ事をして了ッた。』

頼朝には、その心配と後悔とがありました。

一體、山木の館（山木は、八牧と書いた本が、たいぶありますが、山木が眞ンとです）には、十七日の夜明に押寄せる手筈になッてゐたのでした。それが、佐々木兄弟が來ないので、手筈がくるッて、とても、その日のうちには、戰が、ひらけさうにもないやうになッて了ひました。

頼朝は、いら〳〵しました。

それに、あくる十八日といふ日は、頼朝には、戰の出來ない日としてありました。と、いふのは、十八日は、正觀世音の命日に當ります。頼朝は、英雄ですが、しかし、一方、非常に信仰心の強い人でした。殊に、まだ稚い頃から、深く正觀世音を信仰して居りました。それで、月の十八日は、たとへ、ど

んな事があッても、人と爭をしない、まして戰なぞは、決してしないと、心に誓を立てゝゐたのです。

すると、山木に押寄せるのは、十九日にしなければなりません。しかし、十九日まで、ぐづ〳〵してゐては、「旗上げの企」が、山木の方に洩れて、あべこべに、向ふから押寄せて來られる心配がありました。

頼朝は、くるしみました。半日のうちに、頬の肉が、げッそり落ちるほどに、心を碎きました。館のうちは、日影も暗いやうに、ひッそりとしてゐました。

その日の未の刻（午後二時頃）頃のことでした。蛭ケ島通りの方に當ッて、カッバ、カッバと、馬の蹄の音が聞えました。雜色（雜兵のやうなもの）が門の外へ駈出して見ますと、向ふの方から、騎馬の侍が二人と、徒走の侍が二人、こッちへ急いで來る――それが、佐々木の兄弟でした。その馬も もう疲れきッてはゐましたが、定綱と經高とは、とにかく馬に乘ッて來ました。しかし、盛綱と高綱とは、歩いて來たのです。

館のうちには、急に活氣が、靜に、どよめきました。

やがて、四人の兄弟は、打揃ッて、頼朝の前に出ました。

『よくぞ參ッた。』

頼朝は、さう云ッたきりで、少らく言葉がありません。その眼から、ハラ〳〵と、涙が零れました。

『はッ。』

と、平伏したまゝ、兄弟の方でも、急に申譯の言葉が出ないで居りました。

『お前たちの來ようが遲いによッて、朝がけに山木へ押寄せることが出來なかッた。何んとも無念なことである。』

叱りつけるといふ程ではなかッたが、頼朝は、ちよッと、愚痴らしいことを云ひました。

『恐入りました。殿の一期の御大事と存じまして、急げるだけは急ぎましたが、何を申しまするにも、この程の雨で、川々の水が出て居ります。それで、あッちこッちと、廻道を致しました爲に、時に、おくれました。お詫の申上げようもございません。』

聞いて見ると、佐々木兄弟も、盡せるだけの「まこと」を盡したのです。おくれさせたのは、「洪水」と、いふ、天の爲業です。頼朝は、もう小言を云ひませんでした。さうして、すぐに「軍評定」に取りかゝりました。

まづ、第一に、「旗上げは、どうしても、十八日には出來ない。今夜、無理にも夜討にしよう」と、さう、軍議が纏りました。それが定るといづれも、勇氣りん〳〵として、腕が鳴る。集まッた人數は、僅に八十人ほどでしたが、惜な命を惜まぬ坂東の勇士ばかりです。尤も、佐々木兄弟だけは、近江の國の住人でしたが、誰も彼も、鐵壁をも碎かうといふ勢がありました。

『今夜の夜討は、これで、わしの一生涯の運が定まるのだ。戰が始まッたら、すぐに火をかけてくれ。わしは、こゝから、その煙のあがるのを見たらば、戰は勝と思ふ。』

と、頼朝は、キビ〳〵と勇ましく云ひました。

『承知致しました。押掛けたら、すぐに煙を擧げて御覽に入れましよう。』

定綱や、安達藤九郎などが、口を揃へてこたへました。

『三島の祭で、牛鍬大路を行ッては、參詣の者に遇ッて、都合が惡いと思ひます。蛭ケ島通りの方を參りましよう。』

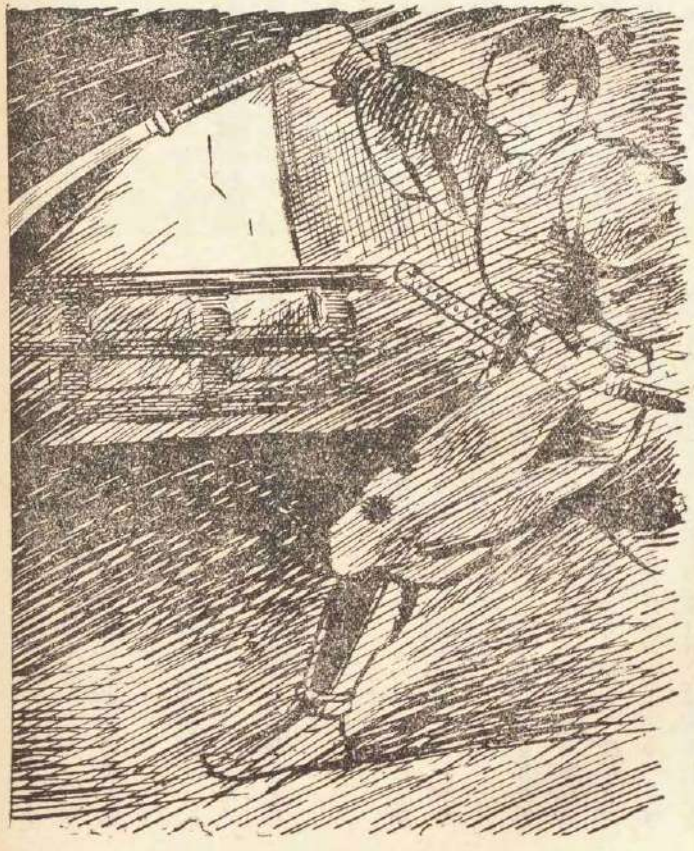
老巧な時政は、人の目に立たないやうにと、さう

いふ注意をしました。
頼朝は、肯きませんでした。
『それは、可けない。はれの旗上げに、傍道小路を廻ッて、敵に向ふのは面白くない。宜しく、大路から進まなければならん。』
やがて、大將軍と仰ぐべき人が、さう云ふのですから、いづれも、その言葉に從ひました。
するうちに、夜も更けて十二時近い頃になりました。
夜討の大將は、北條時政でした。その嫡子、宗時が先駈をして、つゞいて、その弟、小四郎義時、佐佐木の兄弟、土肥實平、岡崎義實、安達盛長、眞田の與市等、凡そ八十騎が、燥りに燥ッて、館を押出す。大將分は馬に乘りました。
館には、頼朝の護衛として、佐々木盛綱と、加藤景廉、堀親家などが殘りました。
原木を北に取ッて、肥田の原といふところまで來ますと、時政は、そこで、兵を二手に分けました。乃ち、時政は、大路を眞ッ直ぐに進むで、山木館の正面に向ふ。佐々木兄弟は、搦手（裏の方）の方に廻ることになッて、その途中、山木の北の方の堤權守信遠といふ者の館を襲ひました。信遠は、山木判官兼隆の部下で、なか〳〵手剛い勇士でしたが、不意討をくらッて、苦もなく佐々木兄弟に討取られて了ひました。
八月の十五夜は名月です。それから二日後ちですが、その夜の月は、よく冴えて、光は山野に滿ち、白露はきらめき、薄霧は立ち――名月や露踏みわけて八十騎――と、いふやうな趣もありました。折々夜鴉が啼いて行きましたが、それも靜でした。
その靜さを破ッて、馬の蹄の音が、カッバ、カッバと響き、鎧、物具のすれ合ふ音が、物々しく聞えました。八十騎は、お互に默ッて、進みました。狩野川の瀨の音も、ひッそりと沈むで、しかも、ある

凄さをもッて、「只事」でないやうに聞えました。
山木の館の森が、黑く見えました。そして、靜でした。
月は、だん〳〵、西へ廻りました。
頼朝は、一刻〳〵、今にも山木の方に煙が上がるかと、それを待ちに待ちました。
『景廉、まだ煙が上がらぬな。』
と、後ちの征夷大將軍も、いら〳〵して、何度となく、同じことを、たづねました。頼朝は、小具足をつけて居りました。
煙は、なか〳〵、上がりませんでした。
『祭に行ッた者もありましても、山木にも相應の人數が居ります。こちらは、やう〳〵、八十騎かそこら……一氣には、むづかしうございましょう。』
と、景廉は、さう云ッて、頼朝を慰めて居りました。そして、自分にも待ちきれなくなッて、館のうちにある小高い木に攀登ッて、遠見をしました。けれども、火の手の氣勢もありません。
頼朝は、氣を揉みました。景廉や盛綱も、氣が氣でありませんでした。
『仕損じはせぬにしても、手間取るは心元ない。そちらも駈向へ。』
と、頼朝は、景廉、盛綱、親家の三人に命じました。
『かしこまりました。』
三人は、すぐに駈出しました。いづれも馬にも乘らず、蛭ヶ島通りの堤の上を、宙を飛んで、いッさんに、山木の館に向ひました。
山木の館は、韮山に據ッて、袋の底にでもあるやうになッた、要害の好いところでした。佐々木兄弟は搦手に廻る。時政は、表口から、双方一時にどッと喚いて、攻込まうとしましたが、向ふでも、「すはこそ、夜討」と、いふと、すばやく手配りをしま

した。そして、よく防ぎました。

山木の方に、關屋八郎といふ勇士が居りました。河内國の者でしたが、これが、門に構へた櫓の上から、强弓をよッ、引いては、しきりに矢を飛ばせて、時政等の寄手を苦めました。これに勢を得て、山木の方には、八人、十人、十五人と、櫓と塀の矢間から、拳落しに弓を引く者が、だん〳〵に增えて來ました。ヒラリ、ヒラリと



月にひらめいて、矢が秋の田の畦に蝗が飛ぶやうに飛んで來ます。時政の方では、楯を並べて防ぎながら、矢を射返して、ジリ〳〵と詰めよせて行きましたが、勇みに勇む勇士等にも、なか〳〵、門近くまで寄りつくことが出來ませんでした。

かうして、時刻が移り、時が經つ。

山木の方では、だんだん、矢種が盡きて來ました。その頃合を見て、時政は、どッと喚

いて、攻めかゝりました――いづれも、我先きに門を押破らうと、むらがりかゝる。山木の方からも門を押ひらいて、切ッて出ました。双方が入亂れて、薙刀を振廻すもの、太刀討に火花を散らすもの、格闘をするもの、さんたんたる月下の大亂闘。風が少し吹立ッて、草の葉の露が零れ、月は、あかるく明るく照ッてゐました。

景廉等三人は、恰ど、そこへ駈けつけました。

『山木の奴どもは、館をガラ空にして、防いでゐるに違ひない。よし……』

と、景廉は、かしこく考へました。そして、亂闘には、目もくれず、身をひそめて、門の方へ近よッて行きました。

景廉は、隙を見て、すばしこく、館のなかへ躍込みました。果して、人の影も見えません――たゞ奥の方に、高燈臺（今の燈臺とは違ふ。その頃の行燈）の火影が、白く、チラ〳〵してゐました。

景廉は、三尺にあまる太刀を引きぬいて、づッと内へ入りました。と、物の蔭から「うのれ、推參な」と、呼はりながら、大薙刀を水車のやうに廻して躍出した武者――見ると、狩衣の上に、腹卷（鎧の胴の一種）を着けて居ります。

『それなるは、判官殿か。』

と、景廉は、さッと飛すさッて、聲をかける。

『いかにも、平兼隆であるぞ。』

『これは、佐殿（頼朝のこと）の身うち、加藤景廉。お首を申受くる。』

太刀と薙刀と、その稲妻が、二三度、微闘いなかに閃いたと思ふと、忽ち兼隆が「あッ」と、云ッて倒れる。景廉は、躍りかゝッて押伏せ、その首を掻き落しました。

恰も其の時、時政等の同勢も、どッと喚いて、館のうちに崩れ込むで來ました。程なく、あッちこッちに火を放けられる。見る〳〵うちに、山木の館は炎々たる火になッて了ひました。

かうして、時政等の八十餘騎は、勢好く蛭が小島へ引上げて來ました。そこらには、まだ、夜の色が漂ッてゐましたが、見上げる富士山の巓には、もう紅の朝日影がチラ〳〵して居りました。村々では鶏が鳴く、八十餘騎は、勇ましく勝鬨を擧げて、「旗上げ」の首途を祝ふ。頼朝が館の門頭には、二十年ぶりで、源氏の白旗が、朝風に、さッと飜りました。

頼朝が、伊豆相摸の兵、三百騎をつれて、相摸の石橋山に押出したのは、それから、六日の後ち、八月廿三日のことでした。

この頼朝の「旗上げ」のお話に、文覺上人のことが、少しも出ないのを、おかしく思はれる方もあるかも知れません。なるほど、「平家物語」や「源平盛衰記」によりますと、頼朝は、文覺上人にすゝめられて、旗上げをしたことになッて居ります。そして、文覺が、義朝の髑髏を持ッて來て見せたといふやうな大きな嘘までが傳へてあります。

けれども、正しい歴史の上では、そんな事は、まるで、あとかたもないことになッて居ります。

もッとも、文覺と頼朝とは、まるで、関係が無かッたとは云はれません。文覺が、頼朝の廿八歳の時――恰ど旗上げをする七年前に、伊豆に流されて來たことは、たしかな事實です。そして、蛭ケ小島の近べんにゐたことも。

それで、その頃、一度や二度、頼朝に逢ッたこともあッたでしょう。けれども、頼朝は、その頃はもう、文覺にすゝめられるまでもなく、旗上げのことを考へてゐたでしょう。また、文覺にしても、一度や二度逢ッた人に、うッかり、そんな事を云ふほどの飛上り者ではなかッたでしょう。

第一、文覺が、後白河法皇の院宣を受けて來て、それで、頼朝に旗上げをさせたといふのが、出鱈目です。頼朝の旗上げは、以仁王の令旨が、そのきッかけになッたことは間違のないことです。けッきよく、文覺が、頼朝の旗上げに、何んの關係もなかッたことは、ハッキリして居ります。皆様の、後々の御參考までに、ちょッと書きそへて置きます。（をはり）

童謡

野口雨情選

（子供篇）

ダリヤ（賞）

愛知　加藤　芳子（十才）

カンカンお庭の
まつかなダリヤ
コンコン小川の
白すな小すな
カンカンてらされ
マツカになるか
コンコンあらはれ
ましろになるか

月（賞）

福岡　和田　敏子

まんまるい
月が出た〳〵
ごらんなさい
ほんとにうさぎが
いるかしら

夏（賞）

神奈川　綿貫　博

牛が荷車を引いてゐる
ほこりの中を歩いてる
むぎわら帽子から
角が出てゐた

ほゝづきさん

埼玉　岡田　シン（尋三）

かはいゝちつちやな
ほゝづきさん
赤いお家に
たゞ一人
おるすいばんは
たいくつか

おうち

大阪　中村　速生（十五才）

お山の上から
おうちがみえた
母ちやん
ゐるかと
のぞいて見た

つゆ

熊本　山村　カエ（尋六）

いもの葉のつゆ
圓いつゆ
首かざりにしたい

ほし

熊本　加藤　のぶ（尋六）

一つ二つ三つ
お山の上に
ほしがでた
また二つ
また二つ
空一ぱいに
ひろがつた

かたつむり

埼玉　安　まさ子（尋三）

雨がざあーざあー
降るのに
うらの小さなくさ花に
まいまいつぶろの
木のぼりよ
いそがしさうに
のぼつてゆく
たつた一人の
まいまいつぶろ

白ばら

茨城　川添　武子（十一才）

私の机の白ばらは
きのうお顔を
出しました
白いきれいな顔でした
私がのぞくと
えむようにかわいく
おくびをふりました

朝風

朝鮮　柳原　八重（尋五）

ヒヤリと吹く風
朝の風
しづかな町を
ふいてくる
しよんぼり
立つてる
日暮だ

つながれ馬

東京　沖津　清琉

つながれお馬
だん〳〵暗くなる
僕等は歸へるよ
つながれお馬
さびしがる

賣られた鶏

東京　平野みどり（十五才）

お米とぎ〳〵思ひます
賣られた鶏思ひます
お米をとぐ音聞きつけて
くつくくつくと來た鶏を

つばめ

千葉　高瀬　泰（尋五）

つばめが
すうつと
とんできた
風が
すうつと
ふいてきた

兒童劇

リンコルンの母

久米舷一

岩岡とも枝畫

人物

アブ……リンコルンの小さい時の名

サラ……リンコルンの姉

父親

母親

處

ケンタッキーの荒野

時

冬の夜

（幕が開くと、舞臺は汚い〜〜掘立小屋の内部です。すつかり丸太作りで、左手に窓が一ツ、右手に入口が一ツあるばかり、眞中に煖爐があつて、チョロチョロと僅かに火が燃えてゐます。その明りで、室の中がボンヤリと見透されます。寢臺が一ツ、テーブルが一ツ、毀れかけた椅子が二ツ三ツ……それでおしまひ。

壁には、鍋だの罐だのの傍に、鍬、鋤、鐵砲などが掛つてゐます。

小屋の外は、夜になつてから吹雪になつたと見えて、凄じい風の音にまじつて、時折、窓を打つサラ〜〜と云ふ雪の音が聞えます。テーブルの前には、アブが腰かけて、鉛筆なつ

いて、何かちいッと考へ込んでゐます。アブは八歳ですが、齡の割合に頑丈な身體で、頭の毛はモジャ〜〜に亂れ、身には破れたシャツだの、チョッキだのを、着こめるだけ着込んでゐます。

煖爐の前には、姉のサラが腰かけて、編物をしてゐます。時々眼をあげて、アブの方を見ますが、アブがあんまり何か考へ込んでゐるので、心配になつたらしく立上つて傍へ寄つて來ます。

サラ『アブ、何を考へてるの？（後ろから肩へ手をかける）

アブ『何も考へてやしないよ。』

サラ『うそ！　姉さんにはちやんと分つてゐますよ。あてゝ見ませうか。』

アブ『姉さんなんかに分るもんか。』

サラ『ちやア、あてゝ見ませうか。……え！　お母さんの事でせう。お母さんが、こんな雪の中で、どうしていらつしやるか、それを心配してゐるんでせう？』

アブ（立上つてそれを打消します）

嘘だい！　お母さんの事なんか考へてるもんか。（顔がいくらか赤くなる）

サラ『隱したつて駄目よ。それに決つてるわ。……お母さんが雪に降られて、どんなにか……』

アブ『嘘だい！　嘘だい！』

サラ『ちやア、なに？　なにを考へてるの？　云つてごらんなさい……』

アブ『姉さんがね、あんまりお多福だからね……』

サラ『お多福だからどうしたのさ。』

アブ『だからね、お嫁に貰つて呉れてがあるか知らんと、それを心配してゐたんだよ。』

サラ『まア、非道い。よくッてよ。覺えていらつしやい。』

二人が云ひ爭つてゐる時、扉の外で、コトコトと云ふ音が聞えます。二人はハッと――して聞耳をたてる。又、コトコトと響き拂ふような音がします。

アブ『お母さんだ！』

駆け寄つて扉をあけます。途端に、烈しい吹雪がサッと吹込んで、雪だるまのように雪に掩はれた人影が這入つてきます。

サラ『お母さん！　お歸んなさい。』

アブ『やア、ひどい雪だな。やア、ひどいな。待つていらつしやい、僕、今、拂つてあげますから…。』

アブは、箒を持つて來て、母親の雪を拂ひ始めます。

サラ『まア、アブ。箒で拂ふなんて……。』

母親『いゝのよ、いゝのよ。箒が一番なのよ。さア、アブ、拂つて頂戴。』

アブは、椅子の上に乘り、頭の上の雪を拂ひます。母親は被りものを取る――三十二三の痩せた、病身らしい女です。

母親（ふと氣がついたように）

『まあ、皆んな燈火もつけないでゐたの。ちやんと附けてゐればいゝのに……おや〳〵、煖爐の火も消えさうぢやないの。どうして薪を入れないのさ。……風邪でもひいたらどうするの？』

煖爐に薪を入れ、蠟燭に火を附ける。室の中が急に明るくなります。

母親（隣室との境のカーテンの方を見て

『お父様は？　もうお寢みになつて？』

（二人は顔づいて見せます）

母親『さう……あのね、小麥がね、思つたより善い値段で賣れたんだよ。それでね、サラ、お前が正月に着る上衣を一ッ買つて來たの。一寸、その包をかしてごらん。（包を取りよせて、布切れを出す。）ね、いゝ色だらう。』

サラ『まあ、お母さん！。』

母親『一寸、こつちへ來てごらん。（布切れを娘の胸にあてて）ねえ、よく似合ふぢやないの……少し派手すぎるかと思つたが、恰度よかつた……。あゝ、それからアブ。お前にもお土產を買つて來たのよ。さア……』（包みを出す）

アブ『何あに、お母さん、これ……』

母親『開けてごらん。』

包みを開けると、インキ壺、紙、それから蠟燭が三本出て來ます。

アブ『やア。（と云つて飛上る）

インキだ、インキだ！　嬉しいなア、……蠟燭まであるぞ。お母さん、これ、みんな僕貰つていゝの？　紙も？　紙も？　嬉しいなア、』

アブは包みを持つて、（室の中を飛び廻ります。母親は、ほほゑみながらそれを見てゐます。

母親『あゝ、それからアブ。お前先刻、なにか分らない字があると云つたね。本を持つて來てごらん。』

アブ、よれ〳〵になつた汚い本を持つて來ます。

母親『どれ、見せてごらん……この字はね、「夜明」と云ふ意味です。』

アブ『あゝ、それで分りました。

「我軍は十九日、沸曉、敵陣地を、完全に占領せ

り」と云ふんですね。」

母親『さうです。それから……算術の方で分らないのはないの。』

アブ『えゝ、一寸待つて下さい。もう一遍、自分でやつて見ますから……』

机の前へ腰かけて、算術をやり始める。母親とサラは、左右からそれを覗き込みます―小屋の中はヒツソリとする―

その時、カーテンが開いて、隣の室から父親が出てくる。五十ほどの春の高い、頑丈な男です。

母親『あら、貴方まだお寝みぢやなかつたんですか。』

父親『うむ……どうだつた、小麥は……』

母親『えゝ、思つたより、ずツとよく賣れました。ジエームスさんが皆んな買つて下すつたんです。』

父親は默つて煖爐の傍へ近寄り、パイプに火をつける。ヂロリとアブの方を見て、

父親『アブ、お前、薪を割つてしまつたか。』

アブ『えゝ、お父さんあと三把ほど殘つて居ります。』

父親『何故みんな割つてしまはないんだ。今晩やつて置かなきやア、あしたの間に、合はないぢやないか、早くやりなさい。』

アブ……（無言）

父親『お前、何を書いてゐるんだ。（傍へよつて）なんだ算術か……フン、錢勘定でも覺えようと云ふんだ

な。はゝん、よせ、よせアブ。そんな勉强なんかしたつて何になる。錢勘定を覺える前に、まづ、錢を儲ける工夫をしなさい。このお父さんをごらん。何一ツ文字は書けず、本も讀めないが、併しちつとも食ふには困らないからな、なア、アブ。蛙の子は蛙らしくしてりやいゝんだ。蛙は幾らジタバタしたつて、鳥にはなれないんだからな、さア勉强なんかはやめたり、やめたり……

どれ、アブ。立つてお前の腕ッ節を見せてごらん。」

父親はアブを立上らせ、その腕をまくつて見ます。

父親『どうだい、素晴らしい腕をしてるぢやないか。まるで筋金入りだ。（腕をさすつたり、叩いたりします）お前はお父さんより、もつと〳〵巧い大工になるかも知れん。中々器用な所もあるからな。早く立派な大工になつて、このお父さんを、喜ばせておくれ。

この間、アブはちいッとうつ向いて、床板を見つめてゐます。

父親『さアアブや、いゝ子だ。薪を割つておしまひ。』

アブは眼をあげて、訴へるように母親の方を見ます。

母親もうつ向いてゐましたが、この時、決心したように何か父親に向つて云はうとします。併し、又、思ひかへしたらしく、そのまゝ口を噤みます。暫くして、

母親『アブ。お父さんの仰しやる通りなさい。』

アブ……（悲しさうに母親の方を見る）

母親『お父さんの仰しやる通りなさい。』

アブはスゴ〳〵と土間へ下り、薪割りを手に持つ。

父親『よし〳〵……アブ。しッかり働くんだぞ。お正月になつたらな、よく切れる上等の鋸を買つてやるからな。……おい、ナンシー（母親の名）俺は一寸、ジョンソンの所まで行つてくる。』

母親『まあ、この降りますのに……』

父親『九時までに行く約束になつてゐたのに、すつかり忘れてしまつた。……遅くなるといけないから、火の始末をよくして、先に寢てゐて呉れ。』

父親は、外套を着て、戸を開ける。烈しい風が吹き込んで灯が消えさうになります。

父親『やア、大分積つたな……この靴では駄目かな。（引返して、長靴と穿きかえる）この分ぢや明日の仕事は六ケしいぞ。ナンシー、先へ寢てろよ。（外へ出て行く）

戸口まで見送りに出た母親は、やがて引歸してアブの前に立つ。アブは默つて、俯向いて薪を割ります。母親、奥から斧を持つて來て、アブの前に腰かけ、薪を割らうとします。

アブ（驚いて）『お母さん！』

母親『いゝのよ、アブ。二人でやれば直ぐだからね。』

薪を割る。サラは編物。小屋の中はひッそりとして、たゞ薪を割る音ばかり聞えます——暫くして仕事が終る。

母親『さア、終つた。……アブ。今の算術のつゞきをやつてごらん。……新しい蠟燭をつけてね……お母さんは一寸、臼をひいてくるから……サラ。お前一寸手を貸しておくれ。

二人は、灯を持つて隣室へ出てゆく。暫くして石臼の音が聞えて來ます。——

アブは蠟燭をつけ、又、算術にとりかゝる——暫くすると、ウト〳〵と居睡りを始めます。これではならぬと云ふ風に、頭をふッて又とりかゝるが、直ぐに頭が垂れてしまひます。到々しまひに、机の上に俯伏して睡る。——

あたりが段々暗くなる……と同時に、正面、煖爐の左が薄明るくなつて、大きな〳〵星條旗が、ハタ〳〵と風に靡

へつてゐる景が現はれる。その前に、黑い服をつけた丈の高い男が、一きりと手を動かして演戯してゐます。大統領のリンコルンです。時々、多くの人々の拍手の響きや、喝采の聲が、遠くの方から潮が押よせるように聞えて來ます。

と、暫くすると、大統領の姿が次第に暗く薄くなつて、何時の間にか、黑い衣を着けた、恐ろしい死神の姿となります。死神の足下には、一人の女が打倒れてゐる。死神は、手に持つた大鎌で、その女を引起します。女はアブの母親です。髪は亂れ、色は青ざめて、見る影もなくやつれてゐます。死神は手を擧げて、遠くの北の方を指さします。そして、母親とともに、靜かに戸外へ歩み去らうとする……

こゝまで來た時、アブはハッとして、眼を覺します。

アブ『お母さん！　お母さん！』

アブは狂氣のように叫んで煖爐の所へ走つて行きます。

アブ『お母さん！　お母さん！……お母さん！』

隣室から母親とサラ。驚いて走つて來ます。

母親『どうしたの、どうしたの、アブ。』

アブ『お母さん！』

母親『まア、この兒は、どうしたッて云ふんだらう、これ、アブ、しッかりおし。』

アブ『お母さん、行つちやいけません、行つちやいけません。何時までも僕と一緒にゐて下さい。』

母親『これ、アブ。しッかりおし。お母さんはこの通りちやんとしてゐるぢやないの。』

アブは漸く我に還り、しげ〳〵と母親の顏を見る。

アブ『お母さん！（突然、烈しく泣き出して、母親の胸に抱きつきます。）

お母さん、もう僕、豪い人になりません、大統領にもなりません。もう豪い人なんか厭です。……ですからね、お母さん。何時までも僕と一緒にゐて下さい。ね、お母さん、病氣にならないで下さい。何時までも〳〵僕と一緒にゐて下さい。僕は僕は、お母さんが、病氣になんかなつたら……僕は、死んでしまひます……』

母親『まア、アブ！、（しッかりと抱きよせる。）

泣くのはおよし、お母さんは決して病氣になんかならないからね。いつまでも〳〵お前と一緒にゐます。お前が豪い者になるまでは、私は石に嚙りついてゞも生きてゐます。お前が、ちゃんと立派な者になるまでは、たとひお母さんの身體は枯草のようになつても、生きてゐます。……だからね、アブ。どうか立派な者になつておくれ。「ナンシーは、よい息子を持つて幸せだ。」と人に云はれるような者になつておくれ。アブ。お母さんは、それがたッた一ッの樂しみなのです。（泣く）私が何時も云つて聞かす通り、人間と云ふものは、辛抱が第一です。どんな辛いことがあつてもぢいッと我慢して、時機の來るのを待つてゐるのです。神樣はどんな人間にもきッと、一度はよい時機を與へて下さいます。それまでの辛抱です。我慢です。あの蜘蛛をごらんなさい。樹の間に巣を張つて、傍から見ると、まるで眠つてゐるようですが、

決して怠けてゐるのではありません。ぢいッと注意して、時機の來るのを待つてゐます。……アブ。辛い事があつても、どうか我慢しておくれ、お母さんは何時でも、きッとお前の力になつて上げます……』

アブ、聲をあげて泣く——

母親『さ、アブ、顏をあげて、……

アブ、お母さんの云ふ事が分りましたか？』

アブ、泣きじゃくりながら、頷づいて見せます。

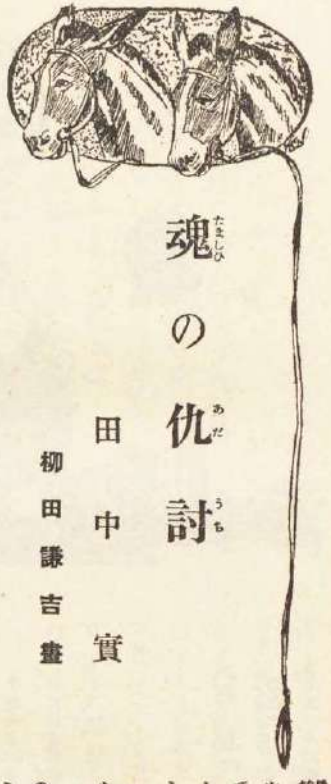
サラもぢいッと首をたれてゐます。

外にはまだ吹雪が止まないと見えて、時折風が凄じい聲をたてゝ、この一軒家を搖り動かして行きます。

（靜かに幕）

（附記）

母親ナンシーは、この翌年、マラリヤ熱に罹つて亡くなりました。その時、リンコルンは十一才でした。



魂の仇討

田中實

柳田謙吉畫

支那のある田舎に、李德用といふお百姓がありました。着るものも着ず、食べるものも碌に食べないで、せつせと畑で働き、お金が蓄めることばかり一生けんめいになつてゐました。

ある年のお正月の夜のことでした。人の寝静まつた夜更けに、李の家の垣根を越して、二人の泥棒が忍び込みました。泥棒たちはてんでに刀を持つて德用の部室に這入ると、よく寝てゐる德用を叩き起して、おどしつけました。

『やいこりや、お前の家に金があると見込んで来た。ぐず〳〵云はずに有り金殘らず出してしまへ。』

德用は泥棒を見ても左程驚きませんでした。默つて立ち上ると、傍の竿筒の中から着物やその他の品物をすつかり出し、手文庫の中のお金をさらけ出して、泥棒の前に差出しました。

かうすつぱり出されて見ると、さすがの泥棒も少々恐くなつて来ました。それでただたじとしてゐますと、その時、德用の傍にねてゐた今年六つになる阿七といふ息子が、ふと目をさまして、この有様を見るとびつくりして、

『泥棒だ！　泥棒だ！』と、大聲で叫びました。

もうかうなれば泥棒も破れかぶれです。今の聲を聞きつけて、人が集つて来たらそれこそ大變ですから、

『この小僧、憎い奴だ。』と云ふが早いか、持つてゐた刀を阿七に浴びせかけて、品物とお金を慌てゝまとめると、さつさと逃げ出して行きました。そして、先程小屋で見つけておいた、德用の大切な紫色の二匹の驢馬も一緒に失敬して、雲をかすみと逃げのびてしまひました。

この間、德用はただぼんやりとして、阿七の體にとりついて忍ろしさにふるへてゐましたが、何分傷は深手なので、手當をする間もなく、阿七の息は絶えてしまひました。

德用は何んとも云ひやうのない位ゐなげき悲しみましたが、もうどうしようもありませんでした。

あくる朝になると、德用の家へ泥棒が這入つて阿七の命を奪つたばかりか、深山の品物をとつて行つたといふ噂を聞きつけた村の人々が、おくやみを云ひに集つて来ました。そして、そんな大泥棒をそのまゝにしておいては大變だと云ふので、皆なして泥棒をつかまへる相談を始めました。

すると、その時、ふいに室の中にモヤ〳〵と烟が立つたかと思ふと、その煙の中に阿七の姿が見えました。そして

『お父さんや皆さん、私の死んだ事は始めから定められた運命だつたのです。だから悲しんで下さるには及びません。だけど、もうお父さんの傍にゐられないかと思ふと、それがかなしくて……。』と泣き聲で云ひました。

集つてゐた五十人ばかりの人々は、これを聞くと、おたがひに涙をこぼして同情しました。

しばらくの間は、阿七の泣き聲と、人々のすゝり泣きとで一ぱいでしたが、やがて、阿七は泣きやめて、

『皆さん、泥棒を捕へる相談なぞ止して下さい。この五月になれば、自然と泥棒の方からやつて来ますから。』と云ひました。

それからお父さんの德用を呼んで、そつと泥棒の名前を敎えて、誰にも云つては不可ないと約束させました。

云ふだけのことを云ふてしまふと、阿七の姿は見えなくなり、煙もすつと消えてしまひました。德用を始め村の人々は、たゞ驚くばかりでした。

やがて寒い冬も過ぎ、あたゝかい春になつて、そろ〳〵苗の植付が始まる頃になると、德用は働くために一生けんめいになつて、阿七の云つた事ないつの間にか忘れてゐました。

しかし、阿七の言葉に間違ひはありませんでした。――間もなく春の終りになつて、麥の刈り入れをする頃になりました。

德用は麥畑を半町ばかり持つてゐましたが、ある日の朝早く、とり入れをしようと畑へ出かけて行きました。

するとどうでせう。折角の畑に二匹の牛が飛込んで、苗をめちや〳〵に踏み荒らしてゐました。德用はすつかり怒つてしまつて、その牛を調べて見ますと、それは近所の里中といふ人の牛らしいので、德用は牛を傍の木

にしばりつけておいて、すぐさま里中の所へ怒りに行きました。

『おい〳〵里中さん、全く困つてしまふぢやないか。お前の牛がおれの畑をめちや〳〵にしてしまつて、どうする事も出來ないやうに苗を踏んづけてしまつた。おれに今牛をつないでおいたが、何とか辨償してくれないかね。もし駄ならおれはお上へ訴へて出るよ。』

『え、、何だつて。いやそんな事はない筈だが。おれの牛はちやんと小屋にゐるよ。……ぢや一寸行つて見させう、どこの牛だかおれが見てやるから。』

里中は德用のけんまくがあまりひどいので始めはびつくりしましたが、德用が問違へてゐるらしいので、一緒に畑へ出かけました。が、それはやつぱり里中のものではなく、そして今まで見たこともない牛なので、里中にはその持主が誰だか分りませんでした。

それで里中は德用に同情し、德用はしよんぼりして、二人ともぼんやりと立ちつくしてゐると、そこへ二人づれの旅人が通りかゝりました。旅人は德用の畑が荒れてゐるのと、傍に牛がつながれてゐるのとを見て、驚いて、

『もし〳〵、私たちは大變失禮な事をし出かしました。實はあの牛は私たちのものなのです。昨夜一寸油斷をしてゐる間に逃げ出してしまつて、どこへ行つたかと方々探してこゝまで來ましたが、あなたの畑をこんなにしてゐやうとは思ひませんでした。で、損をなすつた苗の代は倍にしてお返ししますから、どうぞ何事もゆるして下さいませんか。そしてその牛もお返しがひたいのですが……。』

と手をもみ〳〵云ひました。

辨償をして貰へれば別に云ふこともないので、德用はそのまゝ承知しました。

すると二人の旅人は大喜びで、引張つて來た紫色の驢馬を、德用の前に出して、

『今持ち合せのお金がないので、これで勘辨して下さい。』と云ひました。

德用はその驢馬を見てびつくりしてしまひました。だつてそれは、今年のお正月に泥棒に奪はれたあの驢馬だつたのですもの。……その時ふと、德用は阿七の言葉を思ひ出しました。

『まてよ、世の中には同じ驢馬を持つた者もあるだらうが、しかしこれはあまりよく似てゐるわい。もし違つてゐたら不可ないから、一つ名前を聞いて見よう。』

さう思つたものですから、德用は名前を訊れました。旅人はてんでに名前を名のりましたが、それが阿七の云つた事とぴつたり合つてゐます。

『時は五月だし、この人たちは紫の驢馬を持つてゐるし、おまけに名前まであつてゐる、てつきりこいつ等に違ひない。』

德用は今すぐにも二人の旅人を捕へたく思ひましたが、里中と二人ではどうする事も出來ないので、里中にそつと耳打をして、村の人をなるべく大勢呼んで來るやうに頼みました。里中は何が何だか譯は分らないが、ともかくも駆け出して行つて、村の人々を呼んで來ました。

人々が集まると、德用は二人の旅人の廻りをぐるッと取り巻かせるやうにして、さて云ひ出しました。

『お前さん方に一寸聞きたいのだが、もし違つてゐたら御めんなさい。今年のお正月の晩に、李といふ家へお出でになつて、息子を殺したばかりか財産をすつかりお持ちになつたのは お前さん方でせう。この驢馬が證據なのですが、本當の事を云つて下さい。』

それから阿七が出て來た事まで話しますと二人は恐さうに身ぶるひしました。もう覺悟をしたものか、逃げ出さうともせず、べたりとそこにへたばつてしまひました。そして悲しさうに、

『おゝ、これも天の罰です。もう逃げ出すにはあまりに恐ろしい事なので、すつかり云つてしまひます。なる程私たちはあの時の泥棒でした。あれから私たちは北の方の田舍へ行つて暫くの間かくれてゐましたが、もう大分經つたので、人の目もごまかせるだらうと思ひ、この牛を持つて故郷へ歸らうとこの村へ這入つて來ますと、どうした事かこの牛がのろ〳〵と歩いて進まうともしません。それでもむりやり引ずつて、昨夜の晴やみを幸ひにこゝを通りすぎ、隣りの村で宿屋へ泊りましたが、昨夜の夢に、五つ六つばかりの子供が裸のまゝ現はれて、枕元で盛んに踊りをなどるのを見ました。さうして今朝牛の跡を追つて來る中に、あなたにぶつかつたのです。これも何かの因緣でせうから、私たちは逃げやうとはしません。どうぞ私たちをお上へつき出して御存分になすつて下さい。』と、二人とも兩手をついて云ひました。

これを見た村の人々は、阿七の云つた事が當つたので、今更のやうに不思議に驚きました。

（かはり）

怪彗星

三井信衛

寺内七郎画

（前號までの梗概）

何處から現れたのか一つの怪しい彗星が、地球に向つてまつしぐらに突進し、何ケ月かの後に衝突をすると云ふので、到る處で大騒ぎをしてゐます。その恐ろしい危險を逃れるために、天文學者の牧村博士は、二十年來の苦心に成る火星航空船によつて、遠く火星へ移住をすることゝなりました。

が、航空船は僅か二臺しかなく、而も彗星との衝突の日までには、建造出來る目當がないのでした。人々の投票によつて、牧村博士の一家及び、目下の日本の重要な人物三十名が乘ることになりましたが、一夜その一臺の航空船の倉庫が、何者かの陰謀によつて放火され、博士は無慘の燒死をとげ、殘る一臺の航空船は、何者かの手で、早くも火星へ航行してしまひました。彗星との衝突は目前に迫つてゐます。今や牧村博士の令息正躁が、活躍すべき時こそは來ました。

七、最新式の探偵術

苦心に苦心を重ねて、漸く完成した牧村博士の火星航空船は、二臺ながら空しくなつてしまひました。剩へ牧村博士は、無殘な燒死を遂げてしまつたのです。それと同時に助手大河原の姿が、何處を索しても見當らなくなりました。もう牧村家の内部は、嘆きと恐怖との、最絶頂に達したのでした。

その頃警視廳には、高速度探偵部といふ、探偵の一團がありました。それは、全ゆる科學と推理の力を應用した、最も新しい、進んだ探偵家の寄り集りで、その犯罪人を突き止める方法は、世間には秘密中の秘密とされてゐましたが、例へば、或る殺人事件の犯人を索すのに、被害者の眼球に、一つの貴重な藥品を注いで、それに何等かの方法を加へ、更に寫眞の乾板を向けると、そこに犯人の顔が、はつきり現像される。――さう云ふ方法をさへ採用してゐました。だから、余程巧妙な犯罪でない限りは、かつて迷宮に入つたといふ例もないのでした。

高速度探偵部の主任刑事平丘八郎氏は、急遽、牧村博士の邸にやつて來ました。平丘氏は全ての家族を遠ざけ、只一人くすくすと燃え殘つてゐる製作場に入つて、牧村博士の死體を、徐ろに調べてゐました。それから又更に、天文臺

に、行つて助手大河原の指紋をとり、次には第一號格納庫のドアにある、一番新しい指紋をとりました。

幾時間かが經ちました。母と正隆玲子の二兄妹が、深い悲しみに襲はれながら、物一つ言はずに凭り添つてゐたとき、靜かにドアを叩いたのは、外ならぬ、平丘主任刑事でありました。

『御苦勞樣でございました。』母はさう言つて、靜かに椅子を勸めました。

『いや、お構ひなく。で、早速ですが、博士に害を加へた犯人は、この男です。如何です、お見覺えはありませんか。』

平丘氏は言ひながら、今博士の眼球から寫した一枚の寫眞を、三人の前に置きました。未だ助手の大河原が、行方不明である處を見ると、犯人が彼ではないだらうかとは、母も正隆もさう思つてゐた事柄です。が、平丘氏の差し出した眼球寫眞は、全く見も知らぬ一人の青年であります。

『これは…。』三人は唸りました。

『お見覺えはありませんか。』

『えゝ、少しもありません。』母に代つて、正隆がさう答へます。『こんな人はちつとも知りません。家へ來たことはないやうです。』

『さうですか。然し……。』と平丘主任は、深く目を閉ぢてゐましたが、『この眼球寫眞は、被害者が犯人を知つてゐる場合でない以上は、決して寫らないのです。それが此の眼球寫眞の、長所でもあるし缺點でもあるのです。』と說明を加へました。

『さう致しますと、この寫眞の男が、犯人なのでございますか。』と母は言ひました。

『ところがもう一つ、この眼球寫眞には、缺點と長所があるんです。それは、若しその犯人が只一人でない場合には、その眼球寫眞が、その幾人かを重ねて寫します。私は犯人が、只一人ではないと思ふのです。その證據には、第一格納庫のドアに、同じ時間に印された新しい指紋が二つあつたのです。』

『その指紋と申しますのは…？』

『その一つは、確かに、大河原で

した。』探偵は答へました。

言ひ合したやうに母や正隆たちは、默つて顏を見合せたまゝ、溜息を吐きました。

『犯人が博士を、何かの口實で製作場に導いて、そこへ爆發の仕掛をしたのです。さうして犯人どもは、火星へ逃げたのですよ。』

『火星へ……。火星へ……。』三人は思はず口々に叫びました。

『そして、もう一つの指紋は？』

『それは何者の指紋か、未だ解りません。』平丘主任は言ふのです。

さうして一先づ、牧村家を辭してゆきました。

しかし、その犯人が解つた處で、もう後の祭です。地球の滅亡の日は、もはや、十日の後に迫つてゐたのです。火星に逃げた犯人などが、何うして捕へる事が出來ませう？又假に捕縛をした處で、それを裁く人も亦裁か

れる人も、十日の後には、一樣にこの地球と共に、物も言はぬ一塊の土と、變るのではありませんか。

僅か十日の間に火星航空船が、もう一臺出來る筈はありません。夢の中の出來事より淡く、不意に訪れた火星への希望は、又不意にドン底に墜されたのであります。

牧村博士に亞ぐ有名な天文學者朝永理學博士は、メンジュラ彗星との衝突の日は、十月二十九日午後十時三分と發表しました。最初彗星が肉眼で見えた時、海の唸りに似たあの『おう。』と云ふ喚きの聲々が、今では恐ろしい戰亂の巷のやうに、世界中一杯に充ちました。全ての人々は、もう寺や敎會で、お祈りもしなくなつて、只狂人のやうに、笑ひ怒り、激しく喚いてゐるばかりです。

恐らくは倫敦も巴里も伯林も、一樣にさうであらうが、わが東京の市中も、一帶に厚い霧のやな、瓦斯體に蔽はれて、晝間とても太陽の光は、赤銅のやうにどんよりとしてゐます。さうして泥色をした灰が、音もなく森々と降り切つて、家も道路も並木も池も、全ては只一色の、灰で蔽はれてしまひました。

が、さう云ふ絶望の中でも、高速度探偵部の平丘主任刑事は、例の牧村博士の殺人事件を、力かぎり査べてゐました。何といふ責任觀念の強い人でせう。平丘氏は飽くまでも、社會の秩序を重んじた、偉人でありました。

探偵の結果、犯人は助手の大河原と、さうして千鶴原伯爵家の書記をしてゐる、松川といふ青年である事が解りました。

千鶴原伯爵家には、代々お家の寶として傳はつてゐる、大きな、紫色のダイヤモンドがあつたのです。大河原は、その松川と同じ大學の同窓でした。松川は伯爵家からダイヤモンドを盜み、それを携へて大河原と共に、火星に逃走してしまつたのです。――この事件の探偵をもつて、高速度探偵部の最後の活動は終りました。即ち彗星との衝突の日は、いよ〳〵明後日の午後十時三分に迫つたのであります。地球の生命は、もはや

明日一日となりました……。

八、地球最後の日

森々と降る綠泥色の灰は、刻刻に大粒となつて、その色も紅く變り、やがては火華を放つて、焰と燃えながら、落ちて來ます。

彼處此處には火災が起りました。一時間に何度となく、吠えるやうな地鳴りがして、同時に激しい地震が襲つて來ました。その火焰と灰と火華との渦を卷く空には、立體映畫を應用した强烈な電光が、地球の最後の時間を刻々と現してゐます。

『玲ちやん。』――『正隆。』――『お母さん……。』

又しても〳〵三人は、お互ひの名を呼び合ひながら、ぢつと手を繋いで、天文臺の一室に腰をかけてゐました。今はもう十月二十九日の午後六時過ぎ、電燈も點かなければ、瓦斯の光りは固よりなし、室内はもう黑暗々としてをりました。そして只、天井からぶら下つた時計だけが、チクタク、チクタクと、最後の時を刻んでゐます。

亞弗利加の大沙漠に起るといふ大暴風、そんなものは何の比較にもなりません。今にも堅い圓天井を突き破るやうな、激しい〳〵音を立てゝ、直徑五六寸から一尺位の土塊が、構殴りに叩いて來ます。

續ざまに雷鳴が起ると、激しい地震がきつと襲ひます。

僅かの隙間から、東東市中の方へ望遠鏡を向けて見ると、空には尙も强烈な電光で、時の報告をしてゐます。六時二十分、六時二十一分、六時二十三分、その綠の文字が、刻々と變つてゆくのです。

又その横には、『地球と共に滅びるのは幸福である。』『最後まで、秩序と責任を守れ。』『肉體は死すとも、魂は亡びず。』などゝいふ文字が、哀しくもハッキリと現されてゐました。

『お母さん、若し火星航空船があつたらねえ……。』漸くの思ひで、正隆は言ひました。母はそれに答へて、激しく首を振りました。

『いゝえ、男の兒が何時までも、そんな未練な事を言ふものではありません。何事もみんな、神樣の

お思召のまゝです。ね、玲ちやんや、あなたも此處へ來て、一緒に手を取りませう。そしておつ母さまが、最後のお話をしてあげませう。』

玲子も母の傍に來ましたが、もう二つの目には、一杯涙を溜めてゐます。それを見ると正隆も、唇を噛んで顔を反けました。母も亦泣いてゐるのでせう。いつまでも永い沈默が迫つてゐました。

『ばんざアい。』——何處からか、そんな叫び聲が聞えて來ました。何とも言へない、悲壯な叫びでありました。吠えるやうな地鳴りがして、又激しい上下動が、瀕りに襲つて來ました。母はその中で正隆と玲子に向つて、最後のお話をしたのでした。さうしてぢつと時の來るのを待つてゐました。

時計が七つを打ちました。それを合圖に、歌の聲が一齊に起りました。それは『地球訣別歌』と云ふお別れの歌で、今日滅亡の當日に全世界の人間が、七時を合圖に、その歌を合唱することゝなつてゐました。

軍樂隊もその曲を奏しました。無線もその曲を放送しました。教會のオルガンも全ゆる音樂家のピアノも、皆その曲を一齊に奏しました。總ての人はそれに合せて、歌ひ出しました。母も玲子も正隆も、聲を合せて歌つたのです。

生れし者は、やがてぞ亡ぶ
亡びし者は、やがてぞ生る

地は永久の我等が故郷
歡び讃へて、新たに生れん
我等を育てし母なる大地
我等を愛でにし父なる大地
『我等を愛でにし父なる大地—。』

歌ひ終ると一齊に萬歳の聲は擧り、玲子も正隆も感極つて、確と母の胸に縋りました。

さうかうするうちに、温度は急に昇つて、寒暖計は百三十度以上を示して來ました。しかも刻々に呼吸は苦しくなつて來ます。母も玲子も正隆も、オゾン吸入器を口に當てました。もう絶えず家並は、震動をつゞけてゐます。天空には、びし、びしと、鋭い放電の音が聞え、柱時計も止りました。——今は恰度九時三分、衝突に一時間前

です。

不圖氣がつくと、數多の空氣車が唸りを立てゝ、彼方此方と空を往き交つてゐます。又多くの航空船が、絶えず飛んでゆきます。

『お母さん、あの人たちは何うして、空を翔けてゐるんでせう？』苦しい息の中から、正隆は不審さうに訊くのでした。

『あの人たちはね、何とかして地球を離れたいと、思つてゐるんでせうね。衝突の時地球を離れてさへゐれば、それで萬一、助かるかも知れないと思つてゐるのでせう。』

『お母さん！』正隆は立ち上りました。その目つきは、何かしら非常に、重大な事柄を考へてゐる樣

子でした。
『正隆、ぢつと坐つてゐらつしやい。今になつて、慌てるものではありません。』
『いえ、お母さん。僕は何うも、不思議なことが、一つあるんですよ。それは、あの燒けた火星航空船の事ですが……。』
『まだその事を言ふのですか!?お前は何と云ふ男らしくもない子です。』母はさう言つて、強く正隆の手を制しました。
『いえ、いえ、一寸僕の言ふことを聞いて下さい。』正隆は何時になく、母に反抗をするやうにかう言ひ放ちました。『あの火星航空船は、全り燒けてしまひました。出來上つた航空船は、眞黑に燻げたまゝ、あの製作場に置きつ放しにされてゐます。しかし僕は、まだ使へるやうに思ふのです。』
『え!?』母と玲子は叫びました。
『ね、お母さん。一時間千五百哩といふ速力で、若し空を走つたなら、必ず金屬は熱を起して、燒けてしまふ筈です。その強い熱に耐えるやうに、あの金屬は作られてゐる筈です。そんな強烈な熱度に耐へられる位なら、あんな火事や爆發などにも、耐へる譯ではありませんか。』正隆は呼吸も切らずにさう語りました。
『成程、正隆、お前の言ふ通りです。もう衝突には三十分しかない。それでは直ぐに、航空船を試してみなさい。お前はあれを動かす方法を知つてゐるの?』
『何でもお父さんが、右の白い釦を押したら、動くのだと言つてゐられたやうです。』
『さう。ぢや、早く。一刻も早く。』
三人は手をとつて立ち上りました。激しい震動のため、三人は忽ち倒れました。天文臺の四方の壁は、ボロボロと云ふ音を立てゝ、土煙を上げながら崩れ落ちて來ます。暖爐の角を頼りに、正隆は立ち上りました。右手に母を支へ、左手に玲子を庇ふやうに、彼は急いで、天文臺を出たのでありました。
空はもう一面の火の渦です。星も月も何一つ見えず、大空一帶は血を流したやうに、隅もなく紅色

に蔽はれてゐます。その鱗の形をした不氣味な光が、時々、七色の虹に變りました。
壯嚴といふのか悲壯といふのか、只もう三人は、
『わつ。』と叫んだまゝ、兩方の手で目を蔽つてしまつたのでした。
三人は頭に、金屬の帽子を冠つて、顏には毒瓦斯豫防のマスクをつけ、やつと空氣車に乘りました。金屬の帽子や毒瓦斯用のマスクは、この地球の最後の發明品で、特に今日のために、多くの人々の用意をしたものです。
恐ろしい雷鳴と震動の中を、三人の空氣車は、お邸に向つて走りました。その途すがら眺めると、邊りの木々は凡て枯れ果てゝ、中には炎々と、火を吹いてゐる木もあります。家々の街燈の眞鍮棒が、大抵は破壞されてゐるか、又とろとろと火になつて溶け流れてゐました。さうして道路には、もう十人二十人と、人の死骸さへも横はつてゐるのでした。三人はそれ等の光景に、思はず目を閉じたまゝ、お邸の製作場の前に行き着いたのです。
肋骨のやうに突つ立つた鐵筋の中に、燃え殘つた火星航空船が、眞黑に横つてゐます。極度の暑さと呼吸困難のために、母も玲子も死んだやうに、ぐつたりとなつてゐました。
『お母さん。しつかりなさい!』
幾度か倒れさうになるのを、正隆はぢつと制へて、航空船の前に近づきました。白い釦を押すと、すつとドアが開きました。母と玲子を抱へて、正隆は中へ入つたのです。
と、不思議です。中へ入つて再びドアを閉すと、今までの暑さは、急に華氏六十度位の冷氣に變つたのでした。否、それ許りか、今までは苦しかつた呼吸も、俄かに甦へるやうに、樂々となつたではないか!
正隆も玲子も又母も、深く〳〵呼吸を吸つて、暫くの間聲さへも出ないのでした。
『お母さん! これは確かに、まだ此の航空船が役に立つ證據ですよ。この航空船は、無限に新しい

空氣を作つてゐるのだと、お父さんは仰有いましたよ。』正隆は言ひました。

『それでは譬へ地球が滅亡して、空氣がなくなつても、此の中に居りさへすれば、死なないと云ふ譯なのね。』

『食物のある間はね。』

正隆がさう言ふなり、思はず三人は、あツと目を見合せてしまひました。食物！食物！このまゝ火星へ旅立つにしても、三ヶ年半の間の食物が、必要だつたのです。肝腎の事をうつかり忘れてゐました。

『あゝ、失敗つた！』

正隆は叫んで、航空船の扉を開きました。と、外は最早一面火の海で、一足とても出ることは出來ません。

思はず正隆は、ぴしやりッと扉を閉して、

『もう直ぐ、衝突です。兎に角、此れは、一刻も早く、地球を離れなくつちや駄目だ！』

と、早くも正隆は、右にある白い釦を、ぢつと押しました。途端航空船が、一搖れ大きく搖れたかと思ふと、すでに一時間一千五百哩の怪遠力で、空中遙かに進んでゐたのでありました。だが玲子も母も、すでに航空船の進航した事は、少しも氣がつかなかつたのでした。

母は尋ねました。

『正隆、航空船はもう動いてゐるの？』

『えゝ、確かに動いてゐます。望遠鏡を一つ覗いて見ませう。』

正隆はさう言つて、船體の後部に取りつけた、望遠鏡を覗いて見ました。同時に正隆は、

『や、お母さん！』と大聲で叫びました。

今やメンジュラ彗星が、月に衝突をした刹那でした。思へば今夜は明月です。端なくもメンジュラ大彗星は、地球と彗星との中間にあつた、その月に衝突したのでありました。その一刹那の世にも物凄い光景が、あり〳〵と望遠鏡のレンズに映つたのでした。

（つゞく）

秋の夜長お話會

齋藤『皆さん、今晩はお集りかれがつてありがたうございます。今晩は皆さんの外にお話上手の水島先生や西川喜平さんや外にまだ二三の方が來ていたゞく筈でしたが、お差支があつて來ていたゞけなかつたのは殘念です。しかし、大層月のいゝ晩ですし、虫もいゝ聲で鳴いてゐます。秋の夜話するのは、まことにふさはしい晩です。

それで、前の『バルコニー夜話』の時は、怪談めいたお話が澤山出ましたが、今夜はどうぞもう少し趣を變へていたゞきたいものです。……それにあんまり怖いお話ばかりですと、金の星の讀者の方はみんな優しい方ですから、夜うなされたりすると大變です。はゝゝゝ。ではどうぞ御一緒に三井さんからお願ひいたします。

人間が看板になる話

三井信衛

これは、私の話ではなくて、この間花の都のパリイから歸つて來た、私の友達の土產話なのですが、一つ受け賣りをいたしませう。

二三年前の、ちやうど今頃でした。パリイのモンマルト街といふと、東京の銀座通にも當る、大變賑やかな目貫の街ですが、その街に、ある一軒の大きな帽子屋の店先に、こんな貼紙が出たのです。

『小店員二人入用、給料一日

五十フラン。』

するとさあ、たくさんの少年がわれ先にとその帽子屋へ、押しよせて行きました。五十フランといふと、そのころ十二圓ほどに當りました。一日が十二圓といふのですから、これは一月の間遊ひぢやないだらうか、などと云ひながら、誰も〳〵應募に行きました。

私の友達の下宿に、ジャンにモオルといふ二人の息子がありましたが、その二人の兄弟も早速帽子屋に行って見ました。ところで、これまでたくさんにやつて來た少年は、皆落第しましたが、この二人は見事に及第したのでした。と云ふのは、二人とも、猫ひも猫って、まるでビリケンか道化人形のやうに、貧に一寸見てももうプッと噴き出すやうな、滑稽な顔つきを持ってゐたからです。二人が帽子屋の店に入ろと、

『やッ、しめたッ！』と番頭さんが頓狂な聲で叫びました。それから、『さあ、二人とも此方へおいで。』と云って、ジャンとモオルを一室へつれて行きました。

『今日からお前たち二人を雇ってやるが、仕事をしてゐる間に、決して聲を出しちやならないぞ。もし聲を出したら、一日の給料だ没收してしまふよ。』番頭さんが言ひました。

『はい。』二人は頭を下げて承知しました。

『わかつたら、此方へ來い。』

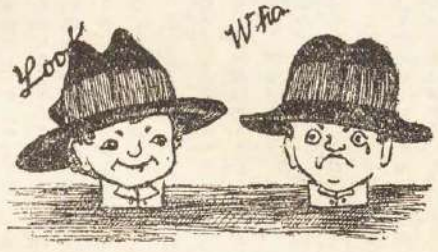
何處へ行くのかと二人が、顔を見合せてゐると、今度來たところは、その帽子屋の飾り窓の裏側なのです。ところが、その飾り窓の床下が低く堀つてあつて、そこへ入ると、そこから床の上に、首だけ出る程の穴があいてゐます。そしてその床の上に首だけ出すと、いいんとその床に錠をかけてしまつて、時間が來るまでは、決して開けてくれません。

ジャン少年は右に、モオル少年は左に、それ〴〵飾り窓の中に首だけ出しましたが、何しろ目眩の街のことですから、もう大評判でした。すると暫くしてジャンの頭には、この帽子屋で今度賣出した、新式の帽子を冠せられ、モオルの頭には、ありふれた舊式の帽子を冠せられました。つまり二人は人間の看板にさせられた譯なのです。

さあ、ところがです。大變なことになりました。新式の帽子を冠つたジャンが、苦しいのを我慢して、飾り窓に首を出してゐると、床の下から番頭さんが、しきりに足の裏を、擽くではありませんか。

擽ったいので、ジャンは大きな聲を出して笑ひかけましたが、

聲を出してはならない約束なので、『擽ったい』とも『はゝゝゝ』とも云へず只笑ってゐるしか仕樣がありません。ところが！さあ、



もう片一方の舊式の帽子を冠ったモオルが、すつかり顔を曇めて、今にも泣き出しさうになってゐるではありませんか。それもその筈、もう一人の番頭さんが、床の下からモオルの足を、ぎゆつと抓ってゐるのです。が、これも約束に從って、『痛い』とも『何をするの？』とも云へないで、只もう顔をしかめてゐるより、何の仕方もありませんでした。

ところで、笑ってゐるジャンの後には、『皆さん、ごらんなさい。最新式の帽子を冠ってゐると、こんなに愉快に暮せます。』と書いてあるし、顔をしかめてゐるモオルの後には、『舊式の帽子を冠ってゐると、このやうに泣きつ面をして、暮すればなりません。』と書いてありました。そして右と左、つまり泣く方と笑ふ方は、三十分交代なのです。二人は一日五十フランか、道々の錢で逃げて歸って來たさうです。

（をはり）

人魚のお智さんになつた話

齋藤佐次郎

面白い話をしませう。人間が人魚のお聟さんになつたといふのですから一寸風がはりなお話でせう。

北海道の北の海岸に德市といふ盲目の少年がゐたのです。この德市は生れつきの盲目でしたが、笛を吹くのが上手でした。笛の天才とでもいふのでせうか誰から教へられたといふのでもなく、自分がひとりで節をつけて吹くのですが、德市の笛を聞くと、何ともかんともいへないいい氣持ちになつて、ひとりでに、ふら〳〵と踊り出して了ふのです。村の人達は大人も子供も、若い男も女も、お婆さんやお爺さんまでが、德市の笛で踊り出してしまふのだから全く不思議でした。もう德市も十八才になつてゐました。

お月夜の晩で、德市は海岸へ出て、一人で笛を吹いてゐました。その晩の德市の笛は、いつもと違つて妙に悲しさうでした。しかし德市は、自分で自分の笛の音にききほれてゐるやうに、いつまでも〳〵その悲しい調子を吹きつゞけてゐました。もう夜が更けてゐま

した。海岸には誰もゐません。

と、その時、ふいに海の水が波立つて來ました。德市は濱の岩に腰を下してゐたのですが、丁度その前のあたりの水がことに餘計に波立つと見てゐる内に、ひよつくりと美しい女があらはれたのです。

よく見ると、それは人魚でした。髪の毛は海の草のやうに眞青でした。眼は眞珠のやうに美しいと形容して置きます。兎に角、人間のどんな美しい娘さんにも劣らないきれいな人魚でした。

ここで人魚と德市との話があるのですが、お後の方の話がつかへてゐますから、ここはかいたんにして置きます。つまり人魚は德市の笛の音にさそはれて海の底から出て來たのです。そして、すつかり德市が好きになつてしまつて、德市を引つぱつて海の底へ連れて行かうとしたのです。

德市もその氣になつて、といふよりは不思議な人魚の魔法にかけられたのですね。それですつかりその氣になつて、ふら〳〵と立上つて海の中へと入りかけたのです。

丁度そこへ駈けて來たのが、德市の母親です。びつくりして德市をつかまへようとしました。母親は德市の傍りがおそいので心配して探しに來て見たところが、この有樣ですから、どんなにおどろいたことでせう。

『德市！　德市！　お前どこへ行くのだ。』

母親は夢中でひき止めましたが德市はもうこれまでの德市ではなくなつてゐました。

『お母アさん、私はこれから海へ行きます。お母アさんとも お別れです。』

さういつて、母親の手を振り切るやうにしました。母親は氣狂ひのやうになつて、

『お前は魔物につかれたのだよ。そこにゐるのは人魚ぢやないか。お前を海に引き入れて魚の餌食にしてしまはうとしてゐるのだよ。』と、いふと、

『お母アさん、私はここにゐる人魚のお聟さんになるのです。さうして海の底の樂しい國へ行つて暮すのですから決して心配しないで下さい。私が樂しく暮してゐるといふことをお母アさんに知らせるために何か合圖をします。』

これだけのことをいつて、とうとう德市は人魚と一しよに海の中へ入つてしまひました。

それから一年たちました。とり殘された母親は、德市から何か便りがあるだらうと思つて毎日々々濱へ行つて見てゐました。と、丁度、一年目の晩になつて、海の底の底の方から微かな笛の音が聞えて來ました。耳を澄して聞くと、あの晩德市が海邊で吹いてゐたその通りの笛の音でした。

毎年、その月のその日の晩になつて海邊に出て耳を澄した人は、必ず德市のこの笛の音を聞くことが出來たさうです。その時から五十年以上も過ぎたこの頃でも聞えるので、ある人が、『海の底の德市は未だ母親が生きてゐると思つてゐるのだらうか。』といひましたので、私はその時ふと、『海の底の國は、浦島太郎の龍宮のお話のやうに歳をとることがないので、海の上の國の人間もいつまでもそのままで生きてゐると思つてゐるのだらう。』と、考へつきました。

皆さんは、さうだと思ひませんか。

（をはり）

きつれ汁

久米 舷一

エー、世の中に何が美味しいと云つて、狐汁ぐらゐ美味しい物は無いさうでございます。私はこれから、狐汁のお話を申上ます。

越前の國は山奥に、五兵衛と云ふ若い樵夫が居りました。森の陰に小さい小屋を建てまして、女房のお鶴と一緒に、仲よく暮してゐたのでございます。

或る日の事、五兵衛は、いつもの通り山へ這入りまして、チャアーン、チャーン、と氣持のいい鉞の音をたてゝ、木を切り倒して居りました。その内にお辨當の時間になりましたので、五兵衛は仕事を止め、焚火を起し始めました。これでお湯を沸さうと思つたのです。

すると其處へ、籠の方から、女房のお鶴が上つて來ました。お鶴は色の白い、可愛いらしい狐をした女でした。手には何か包みを持つて、ニコ〳〵して立つてゐます。

『やア、お鶴か。どうしたんだ。』

『えゝ、今日は小麥粉のお團子をこしらへましたので、貴方に一口差上げようと思つて持つて參りました。』

『さうか。それは有難い。』

五兵衛はお團子が大好でしたので、眼を細くして、喜びました。

『お前も一緒に此處で食べて行くがよい。』

夫婦はそこで、焚火を中に挾みまして、睦じくお團子の包みを開きました。

五兵衛はお團子を食べながら、チョイ〳〵女房の顔を眺めますとどうも女房が、いつもより少し綺麗すぎるようでございます。

『ハテナ。』

五兵衛は不審に思つて、ヒョイと女房の後を見ますと、これはマア何んとした事か、女房の着物の裾から、太い茶褐色の尾ッポがはみ出して居ります。

『ヤア、こいッ奴。よくも巧く化けたな。どうして奪れよう。』

五兵衛は色々と考へた末、傍にあつた團扇を取つて、バタ〳〵と焚火の煙を女房の顔に煽ぎつけました。すると女房は慌てたがッて、

『こん。こん。』

と咳をしました。その『こんこん。』といふ聲が、まるで毎もの女房とは違つて居ります。五兵衛さんは、今度は、

『エヘン。』と一ッ咳拂ひしてみました。

すると女房はギョッとしたらしく、そッと五兵衛の顔色を窺がつてゐります。

五兵衛は面白くて堪りません。今度は、煙草を吸つて、その吸殼を、ポンと例の尾ッポの上に落しました。

『あッちちち。』

女房は慌てゝ飛び上つた拍子に怒ち一匹の大きな〳〵白狐と變りまして、そのまゝ傍の藪の中に逃げこんでしまひました。

五兵衛さんは後で『アハヽヽ。アハハ』と腹を抱えて笑ひました。たゞ一ッ五兵衛さんの不思議に思つた事は、あんな白狐なのに、尻ッ尾の色が茶褐色だつたと云ふ事でございます。

それから四五日經つた夕方の事五兵衛が仕事を終つて山から降りて來ますと、谷川の所に一人の若い女が蹲んで、洗濯をしてゐました。

女は五兵衛の姿を見ますと、ニッコリと笑ひました。五兵衛は、今までにこんな女に會つた事がありませんでした。

『此奴、變だぞ。』

と思つたので、又この前のように、

『えへん。』と一ッ咳拂ひをして見ました。

すると女はたちまち眼の色をかえて、ぢいッと五兵衛の顔を見つめました。その眼の色を見た五兵衛は『ハハア、奴さんだな。』とすぐ感づいてしまひました。

五兵衛は丁度折よく、鐵砲を持合せてゐましたので、その女に狙ひをつけるが早いか、引金を引きました。

轟然と音がして、彈丸は確かに命中したと思つたのに、女はビクともしません。

五兵衛はもう一ッ射ちました。しかし、女は平氣で、ぢいッと五兵衛の顔を睨みつけてゐます。

五兵衛はその時、

（狐が人に化ける時には、その人の傍にある品物に化けるものだ）といふ事を思ひ出しました。

で、よく見ると、女の傍に大きな桶が一ッ置いてあります。五兵衛は、その桶に狙ひをつけて、引金をひきました。

たちまち物凄い叫聲が聞えて、女の姿は掻き消すように見えなくなり、後には一匹の大きな大きな白狐が、苦しさうに蹲きながら轉がつてゐました。

五兵衛は大喜びで河原へ驅け下りました。

二

五兵衛が狐を撃ち取つたと云ふ噂は、すぐ村中に知れ亘りました。

『うまいぞ、久しぶりで狐汁にありつける。』

『よく肥えた奴だと云ふ事だからどんなにか美味からう。』

村の人達は喜んで、夕方になると皆んなゾロ〳〵と五兵衛の家に集まつて來ました。この地方で狐を獲つた者は、必ず村中の人達を呼んで御馳走しなければならぬ習慣になつてゐたのです。

『五兵衛さん、今晩は……どうも御馳走様ですね。』皆んなは追々集まつて來ました。

其時五兵衛は、大きな鍋を煙にかけて、ぜッぜと狐汁を煮てゐました。五兵衛は、こんな美味しい物をなるべくは人に食べさせたくなかつたのですが、村の習慣とあつては仕方がありません。

やがて狐汁が出來上りました。五兵衛は先づ一番最初に、お毒見をする事になりました。

『皆さん。私が最初にお毒見を致しますから、どうぞ暫く お待下さいまし。』

五兵衛はかう云つて、大きな茶碗に狐汁をつけて食べました。

ところが、ものの五分もたつたかと思はれる頃、どうしたものか段々五兵衛の顔色が變つて來ました。唇が紫色になつて、いかにも苦しさうです。

『五兵衛さん、どうした。これ、五兵衛さん、しつかりしなさい。』皆んなは驚いて傍へ寄つて來ました。しかし五兵衛は『ウームウーム。』と云ふばかりで、ものを云ふ事が出來ません。その内に、

ドタリと仰向に倒れたかと思ふと口からブクブクと蟹のやうに泡を吹き出しました。

『ヤア、大變だ。』皆んなはびつくりして身を退きました。

『さては、狐に中つたんだな…効を經た白狐にと云ふから、たゝりがあるのに違ひない。』

皆んなはかう思つて、互に眼と眼を見合せました。

五兵衛の容子は段々イケなくなつて、眼は吊しあがり、手足は冷たくなつて來ました。お上さんのお鶴は氣狂のようになつて、夫に縋りついて泣いて居ります。

その内に、新助といふ若者は、『あ、さう〳〵、俺は家に大切な用事を忘れてきた。直ぐ行かなきやならない。皆さん、一寸お先に失禮します。』

と云つて、歸つて行つてしまひました。

すると、あつちからも、こつちからも、

『あッさう〳〵、俺は何を忘れて來た、俺は何を忘れてきた。』と云ひだして、一人歸り二人歸り、たうとうしまひに、一人殘らず關係になるのを恐れて、家へ歸つてしまひました。

その足音が全く聞えなくなると、今まで死んだようになつてゐた五兵衛が、ムク〳〵と起きだしました。

『ハハ、、、どうだ、お鶴、俺の手練は。……ハハ、、、何もそんなびつくりした狐なぜんでもよい。さア早く狐汁をよそッて矣れ……。』

村の人達は、たうとう五兵衛に一杯食はされました。五兵衛とお鶴は、久しぶりでお腹一杯狐汁を食べたと云ふ事であります。エー秋の夜ばなしは、狐汁の一席、どうも御退屈樣。（なはり）

力持ち

大木雄三

力持ちの男の話をしませう。もつともこれは御存知の方があるかと思ひます。フランスの小說家ジユウル・ルナアルの書いた本にある話ですから。

あまり强さうなことを言つても人は信用しないもので、その男のいふことも誰一人ほんとにしなかつたのです、けれど、さも强さうに足を踏み鳴らし胸をそらして棒切れの積んであるところへ行く樣子が、大へん落ちついてゐるので、これは强さうな男だと、誰も思つたのでした。

男は一本の長い丸い薪を取り上げました。それは一番輕さうなのでなくて、その中で一番重いやつです。その棒にはおきけに、節くれや苔や年とつた蟻鷲の鐵爪のやうなものまでついてゐました。

まづその男は、棒ぎれをぶんぶん振り廻して怒鳴つたのです。

『見たまへ、諸君、こいつは鐵の棒より固い、ところが吾輩は、かく申す吾輩は、膝で二つに折つてお目にかける、マッチ棒のやうに折つてお目にかける。』

見てゐた者は、みんな伸び上りました。その中には、平生力自慢の者もだいぶゐましたが、それどころか身動きもせず、口をつぐむだまゝ、その力持ちの方を見てゐるのでした。その後の方で見てゐる子供の肝が聞えまの男には敵はないと思つたのか默つてみてゐるばかりでした。いつもならすぐ笑ひ出す人たちまでが、笑ふどころではありません。

した。

『力持ち』はみんなが驚いて感心してゐる樣子をみると、こゝぞとばかり偉さうに身構えをしました。

膝を曲げました。そしてじつに悠々と薪をとり上げたのです。

暫くの間、『力持ち』は力瘤を入れた兩腕の先に薪を握つてをりました。

『やるぞ、やるぞ。』

見物はかう思つて眼を凝かせてをりました。いまかいまか、と知らず知らず口を開いてしまひました。

男が薪を膝にあてました。

『えいつ、やつ。』

とすばらしい掛聲です。

ぽきん！と音がしました。薪が折れたのではありません。脚が折れたのでした。（なはり）

猫屋敷

大戸喜一郎

私が小さい頃率兵衛爺さんから聞いたお話を致しません。

利根川の土手が緩やかに傾斜して、だらだらと田圃へ落ち込んでゐます。そこが有名な關東平野で、見渡す限り廣々と水田がひろがつてゐるのです。その廣い水田のまん中に、ポツンと森が一つ變えてゐました。森の中には一軒の草葺家があります。

『ハイご免なさい。』と案内を乞ふと、

『ニヤーン！』といふ返事がして猫が一匹出て來ます。つゞいてまた一匹、また一匹、みんなで七匹出て來るのです。そして一番お終ひにこの猫と同じやうな狐つきをした年とつたお婆さんが出て來て

『何ぞご用ですかい。』とたづれます。

お婆さんはお安さんといつて、この世にはもう誰ひとり身内の者がなくて、猫を相手にさびしく暮してゐたのです。ですからみんなは猫屋敷、猫屋敷といつてゐました。

ちやうど今晩のやうに風もない月の明るく輝いてゐる晩でした。虫が叢でチチチ、チチチ、と鳴いてゐます。率兵衛さんは晩ご飯にお酒を戴いて、いゝ氣持になつてボンヤリ庭を眺めてゐました。すると、ふつと虫の音が止んだかと思ふと、ピロンと自分の前に何か黑い物が三つ浮び上りました。猫です。猫屋敷の猫が、三匹飛びこんで來たのです。そして三

赤土山

杜仙之介

四してニヤーンと泣き立てると、いきなり幸兵衛さんの着物の裾をくはへて、引つ張りはじめました。幸兵衛さんは不思議に思つて、立ち上りました。すると一四は先きに立つて歩きはじめました。一四は着物の裾をくはへて後ずさりしながら、つゞきました。もちろん幸兵衛爺さんは猫に引つぱられて歩いて行つたのです。家を出て、田園の畦道を通つて、猫屋敷へです。

猫につれられてまつ暗な家へ上がつたとき、幸兵衛爺さんはプーンと妙な匂ひが鼻をつくのを知りました。そして一番奥の部屋に入つたとき、蒼白い月明りに鄰き出されてゐるそこの孫子を見たとき、氣丈な幸兵衛爺さんは思はず冷水を浴びたやうに背中がゾーンとして立ちすくんでしまひました。

枕もとには四四の猫がしやがんでゐます。そして薄い布團の中には、お安婆さんが眼をあけたまま息が切れてゐるではありませんか……。

そのあくる日お安婆さんの葬ひは出されました。けれどもその家はもう住む者もなく荒れるに任されました。お安婆さんの死んだことを知らしてくれた猫は、その後どうなつたか、誰一人知るものとてありませんでした。

たゞ、秋の美しく月の輝いた晩、幾にち、チチチ、チチチと虫の鳴く晩、猫屋敷からはどこからともなく

『ニヤーン！』といふかすかな猫の鳴き聲がきこえて來るといふことです。

（をはり）

ちやうど霜の頃でした。私達は日の暮れるのも忘れて、八百屋の横丁へ集つて、高く積んである赤土の山へ登つたり下りたりして飛び廻つてゐました。それは、やいぶん前のことで、たしか私が七つの時であつたと思ひます。

その時、どこからか一つの破れた德利を拾つて來た子供がありました。そして、赤土の山からころころとところがしては、得意そうに大聲で、

『義公、その德利を拾つて來い。』とどなつてゐました。義公と呼ばれる子供は、よほど人がいいとみえて、怒りもせず、幾度でも德利を拾つては、その子供のもとへ持つて行きました。

皆んなは面白そうに德利のころがるのを見て居りました。私も山の上に立つて見てゐましたが、つか〳〵と駆け下りて、今落ちて來た德利を拾ふと、山へ駆けづり上つて、ころ〳〵ところがして見ました。德利は、ころ〳〵と輪のやうになつてころがつて行きました。

その時、誰だが私の隣りに立つてゐたものが、駆け下りて行つたと思ふと、

『いたい！』と、大きな聲で叫びました。

皆んなの目は、一度にその方に向けられました。それは、お隣りの道夫さんでありました。私が投げた德利をのり越える時、運惡く、その德利につまづいてころがつたのだと思ひます。

あまりにいたかつた爲めか、道夫さんは聲も立てず、默つて腰をおさへたまま、赤土山の下にうづくまつてゐました。

私はびつくりして、道夫さんのそばへ駆け下りて行きました。そして、

『どうしたの！どうしたの！』と何べんも呼んでみましたが、道夫さんはたゞ默つてゐました。

皆んなも、私のあとから駆けて來ました。

私は道夫さんが、手をあてゐる、腰の邊を見ると、道夫さんの太股からは、赤い血が、たらたらと流れてゐるのです。

『ヤア！血が！』

私は驚いて叫びました。道夫さんも、自分の股から流れてゐる血にはじめて氣付いたと見えてふいにひきつけるやうに、大きな聲で泣き始めました。

近所の人達は、道夫さんの泣き聲があまりに大きいので、びつくりして駆けて來ました。

私は何だか恐ろしくなつて、そつと、其處を抜け出して、八百屋の納屋裏で、小さくなつてゐました。皆んなが、『康さんだ！康さんだ！』と、云つてゐるやうな氣がしました。私はそのたびごとに、ちゞみ上るやうにふるへました。そして出來るだけ小さくなつてゐました。

私はどう考へても、自分が道夫さんに疵をつけたやうな氣がしてなりませんでした。また、人殺しをしたやうな氣もしました。巡査につれられて行かれるやうな氣もしました。あのまつ暗な牢屋の中へつながれて、太い鞭でぶたれるんぢやないかとも思ひました。

日はもうとつぷりと暮れて、町にはちら〳〵灯がつきました。八百屋の横に集つて、何やかやとさはいでゐた人達も、もうめいめいに自分の家へ行つてしまつたとみえ、あたりはひつそりとして、靜かになつてしまひました。

しばらくたつてからでした。コツコツと、納屋裏へ近づいて來る誰かの足音がしました。私は巡査さはないかと、そつとしました。

しかし、その足音は、いつも私に親切にして呉れる八百屋のおばあさんでした。おばあさんは心配そうな顏つきをしながら、

『康さん、心配せんでもいい！早く行つてわびといでなさい！』親切にそう云つて呉れました。

私は急に味方を得たやうな氣がして、嬉しくつてたまりませんでした。

私は、默つたまま、一言も云はず、おばあさんの胸に顏をうづめて『わあつ——。』と泣いてしまひました。

（をはり）

秋のわかれ

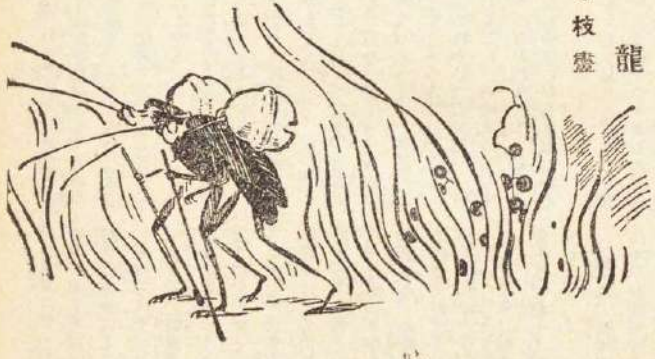
達崎龍

岩岡とも枝畫

寒さが來る來る
一霜　二霜
カラ〳〵乾いた
唐がらし

今年の秋も
さよならと
鈴しよいながら
鈴虫は
機しよいながら
機虫は

芒もさよなら
さよならと



細い手ふりふり
葉の蔭で
雲より遠い
穂の蔭で

晝間も細い
蚯蚓が鳴いた
カラ〳〵乾いた
唐がらし

綴方

齋藤佐次郎選

麥上（賞）

神奈川縣高座郡大野校高二

中里素行

一月も前の或る日の事でした。晝頃から、父と私と二人で、車をひいて麥上に行きました。畠へつくと、父が、『一車ばかしたばねたら、家へひいて行つて來い。』と言ひました。私は、一生懸命によせはじめました。父が後から、たばねて來ます。たちまち、一車ばかしたばねられました。父に車に積んでもらつてひき出しました。かるかつたので、車はがら〳〵まわりました。もつと積んでもよかつたなあと思ひました。が、私の家から一町ばかし前に、かなり大きな坂があります。私はその坂が上れるかどうかとかんがへると、このくらゐでもよいのにと、道々たび〳〵思ひました。

坂へかゝりました。上るにつれて、だん〳〵全身に力をいれて行きました。頂上へ來た時でした。どうした事か足をふみそこねて、すべつてしまひました。しまつたと、ふみなほそうとしたが、もうまにあはなかつた。坂の中途まで、もどされてしまひました。いつかあせが、流れて居ました。あせをふいてすこし休みました。そして又上りはじめました。こんどは、すべらぬやうに氣をつけて、上つて行きました。頂上へ來た時又すべりそうになりました。『うん！』とふみしめて、そこに出てゐた草につかまりました。そして、滿身の力をこめて、引きました。やつとの事で車は上りました。ほつと安心しました。と、きゆうに、手足がかつたるくなつて來ました。あせはふいても、ふいても、流れてしやつやもゝひを、ぬらしました。

家へついて、水をのんで休みました。父も、あせを流しながら、麥を上げてゐようと思ふと、自分が休んでゐるのが、はづかしいやうな氣がしました。水を持つて出かけました。畠について、父に水をやると、流れるあせもふかないで、よろこんでのみました。私は氣をきかして、水を持つて來てやつた事が、えらいやうに思へました。こんどは父と二人で、はこびました。坂へ來た時、父が『はこでこまつたらう、見ろ、こんなに麥つぶがこぼれて居らァ』といひました。三度ばかし二人ではこんで、畠へ來た時、一休みしました。

お日樣は、西の山にはいつて空は夕やけで赤くなつて居ます。廣い原をふいて來る風が、あせにぬれた身體を、時々なせて行きます。その度に、なんともいひやうのないよい心持になりました。誰がふいてゐるのか口笛が原中へひゞいてゐます。上げられた麥もよいけしき。すゞしい風などに、心をせい〳〵にしてゐるやうでした。

麥は、今一車で上げをいるのだ。あゝよいけしきだ。よい心持だ。はたらいた後やすむのはとくべつよい心持だ。なにかのぞみがあるやうな氣がする。などと、いろいろ休みながら思ひました。

「風景」（賞）

東京市築地一丁目十番地

石川時之助

火野燒（賞）

山形縣西村山郡白岩町大字幸

二關勤

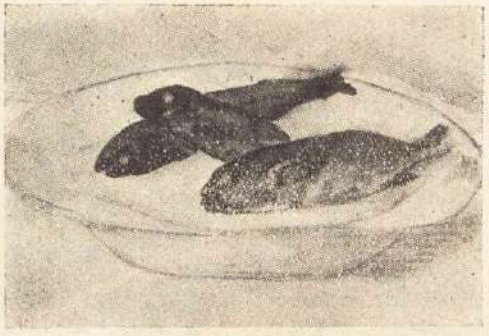
今日の午後から私と父と母と、外からたのんで來て居る女二人、皆で五人づれで山に火野燒きに行つた。今日は天氣がよいからうまくやけそうである。

行つて見ると枯杉葉や雜草の枯れたのが澤山あつた。先づ先に火野のほとりを火が外にもえうつらない樣にきれいにして、父は火野の一端に火をつけた。すると枯杉葉があるから火はたちまち『バリバリ』と黑煙をあげてもえ出した。よいあんばいの所までもえたと思ふ頃、父は又二間ぐらゐ向ふにつ

「魚」（賞）

神戸市東川町東津崎小學校尋六

青山正雄



『うまくもえるな。』

と父は言つて居る。いつのまにか皆の顔は眞赤になつてあつがつて居る。半分程ももえたと思ふ頃は火は大分大きくひろがつて、火は赤い舌をペロ〳〵と煙の中から見せてゐる。母さん達は『火などもれたら大變だな。』と少し不安な顔をしてそつちに行つたりこつちに行つたりして、青葉を打つて若し火がもれた時の用意をして居る。火の前からはこほろぎやばつたがピョン〳〵と逃げて行くのが見える。火野のそばの木は、火にこがされてユラ〳〵と風もないのに葉が動いて居る。父は『一休だ』と言つて、木の切り株に腰をおろして煙草をのんで居る。

もえたあとは眞白な灰が一面にちらばつて居る。だん〳〵私等の方へ火がもえて來たので、顔があつくて〳〵仕樣がないから、そこをにげてよいあんばいの所で腰をおろして見て居る。時々笹の燒けたのが黑くなつて煙にとばされて高く上つて行く。

『上でも火野燒きだなー』と母は言つた。見ると成程上でも火野燒きをして居る。今日は天氣がよいからどこでも火野燒をするらしい。

地震（賞）

府下瀧野川町田端九七

川島秀雄

風呂に行かうと思ッて、省三と正敏を連れて家を出てから、十歩ばかり歩いたころだッた。家がかた〳〵とゆれた。『表に荷馬車でも通つてるのかな』と思つた瞬間、自分の立ッてゐる地面が、ぐらぐらと動いた。

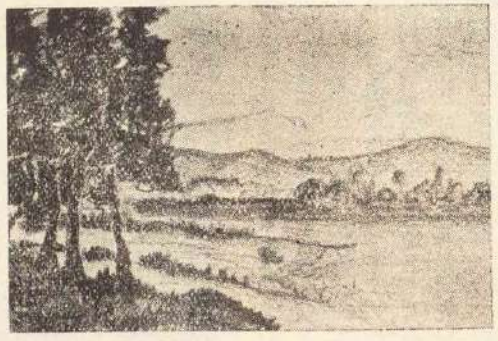
『兄さん、こわいよ。』省三が僕につかまッた。——家がぐら〳〵ゆれる。地面がゆれる。地震が止んでからも暫くは、不安でそこに、立ちつくしてゐた。正敏が先に立ッて歩き出したので、やッとあとから續いた。

表通りに出ると、跳足になッた人だの、下駄を半分ッ、かけた人だのが、口々にがやがや話し合ッてゐた。女の人におぶさッた赤ん坊は、今の地震におびえたものか、わア〳〵泣いてゐた。

僕等は、『この位の地震は一寸も怖かない。』と言ッた樣な顔をしてそこを通ッた。途で、自轉車に乘ッた友達に、あッた。

『どうしたい？』ッて言ふと、『アア驚いちやッた。』と、胸を叩きながらどん〳〵向ふへ走ッて行ッた。酒屋では、棚からびんが、落ちてそこいら邊に、サイダーだの何かが、流れてゐた。風呂屋ののれんを、くゞッて中に入ッた。二三人の人が着物を着ながら、今の地震の事を、話し合ッてゐた。着物をぬいで風呂桶に、飛込んだ。

省三が、『兄さん、こんなものが浮いてら。』と言ッて指すもの……『ア、水垢だ。今の地震で緣についてゐたのが、落ちたんだナ。』側に居た、何處かのお爺さんがさう言ッた。僕は緣に寄掛ッて、『また地震が來なけりやいゝがナ。』と思ひながら、ぢッと、目をつぶッた。



「川べ」

和歌山縣伊都郡妙寺町妙寺小學校

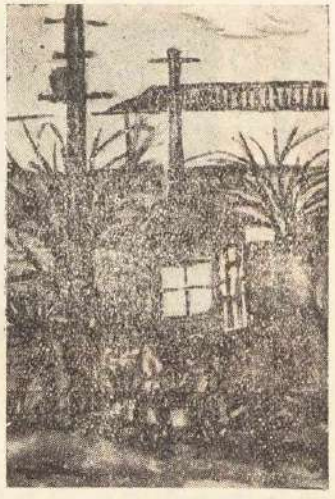
井上登

ラジオ

東京市深川區伊勢町三四

沖津清琉

『ハハ……。』奥で聞きなれぬ笑ひ



「畫過ぎの町角」佐藤護一

朝鮮元山公立尋常小學校尋六

聲。障子のすき間から一寸のぞいて見ると、先つき訪ねて來て父と一緒に話をしてゐた春木さんで、ラジオを聞いてゐるのです。しかも兩耳受話器を二つに分けて片方を父が聞いて居る。『奥で何笑つてたの。』とそばにゐた新チャンが尋ねた。僕は『ラジオ聞いて居るんだよ。』とおしへてやつた。すると新チャン何思つたのか奥へ走つて行つた。そして、『ラジオを聞かせておくれよ。』と言つてねだつて居るのです。父は『今やつてゐるのはむづかしくて子供にはわからないのだ。』と言ふ。

それでも新チャン『聞くんだ聞くんだ。』と言つてねだる。春木さんみかねて『それでは私のを聞かせてあげよう。』と言ふと父は『よろしいのです。では私のをかしてやりますから。』と言ひながら受話器を新チャンの耳にあてゝやつた。

僕は『あんなに新チャン聞きたがつて一たい今何やつてゐるんだらう。』と思ひ朝刊のラジオプログラムを見ると修養講座です。『オヤ〳〵新チャン今にいやになるぞ。』と思ふと、何だかおかしくなつたので、そつと樣子を見てゐると、新チャン初の内は父に『面白いか。』と聞かれると『アゝ。』と輕い返事をしてゐたが、永くなるにしたがつて顏つきが變になつて來た。いやになつたのです。

それでもさつきあんなに無理に受け取つた受話器。今さらいやとは言へないので、もじもじして居る。僕は可愛さうになつたから、『新チャンおいでよ。』と呼んでやつた。もちろん新チャンは飛んで來ました。

家のぼち

埼玉縣北埼玉郡種足校尋三

大塚登美子

「キユービー」の關根フジ子

神奈川縣鎌倉町大町二三一二

私のうちのかはいゝぼちさんは、朝は早くはね起きて、朝草かりに行く兄さんの後をおつかけてゆきます。兄さんはぼちにはかまはずあつちこつちと草をかつてあるきます。兄さんがまだかへつてこない中にぼちはせいはらきつてうちへかけてきます。ぼち〳〵とよぶと、うれしさうにだいどころ中をかけまはります。私はそれをみるとぼちがかはいくて〳〵たまりません。うちでごはんをたべはじめると、ぼちはたべたそうにいたのまへくびをなげだして見てゐます。みんながたべてしまつたところへ兄さんが草を一ばいつんだかごをかついでかへつてきました。ぼちはすぐにかけ出して兄さんの着物にとびつきました。兄さんがごはんをたべはじめると又いたのまにくびをのせて見てゐます。兄さんがたべてしまつてからぼちにごはんをやると、ちやんとおまはりをしました。ぼちは私のうちのあかちやんです。

鳩のお墓

東京市外大久保百人町戸山校尋二

大内力

きのうぼくがおひるごはんをたべてゐたら、八千子さんが家にかつて居る『さば』と云ふねこが鳩をとつたといつてゐたのでぼくはびつくりしていつて見たら、さばが口で一羽鳩をくはへてゐました。

八千子さんが『さば』としかつたら、さばはびつくりして口の鳩をくわへてにげていきました。さばがくはえた鳩をとつてみたらもうしんでゐましたので、鳩のお墓をつくつてやりました。

今日みにいつてみましたら、どうもなつてゐませんでした。

通信

自由畫選評

山本鼎

△上田龍作君の『風景』（推賞首席）はよくかけて居る。ペン畫はなか〳〵むづかしいものだが、これはなか〳〵上手だ。右手の垣根や其上の柱木や、橋の上方の大樹まで活きて居る。此内では左手の土堤がいけない。それから橋下の中景がまづい。そこをもつと簡潔に描いてほしかつた。

△青山正雄君の『魚』（推賞次席）ていれいに描いてある處はいゝが、ちと活きが惡い。主として鱒が死んで居る爲です。

△井上登君の『川べ』賞朴な好もしい繪だが色が、よくない。殊に大事な左手前景の木立の色がいけない、クレイヨンの生々しい色が其まゝ出て居るからです。もつと現實の色合をよく見て、その感じを出すの工夫して御覽なさい。

△佐藤悲一君の『雲過の町角』自働電話がよくかけて居る。全體に色のきたないのがいけない。

△關根フジ子ちやん 五才の『キユーピーサン』赤い着物のキユーピーサン。首をかしげたキユーピーサン。可愛いあんよのキユーピーサン。フジ子さんは繪が好きですね。（九月十五日）

綴方の選後に

齋藤佐次郎

▽今月もずゐぶん澤山な綴方でした。しかしひどく感心するやうな作はありませんでした。しかし、皆なまじめに、一生懸命に書いてゐるのには感心します。それで、入賞作も、特にうまく書かうとしてゐないで、一生懸命に書いたものから選びました。

▽中田素行さんの『火野燒』も特に上手な作だとは思ひませんがしかし、力がこもつてゐます。それはまじめで、一生懸命だからです。書いてゐる時の皆さんの心持ちが、そのまゝ讀むものの胸に感じられるのです。『蓼上』についていふと、蓼を一ぱい積んで車をひいて坂道を上つて行くところを書いたあたり、本當によく書けてゐます。また、お父さんに水を飲まるところも、それからまた終りの方で働いた後の喜びを書いたあたり十分に書きあらはしてゐます。

▽川島秀雄さんの『地震』は、いつもの通り上手です。年齢からいつても上手になられる譯ですが、らく〳〵と何でも書けるだけの方法を知つてなられるやうですが、あなたなどに御注意したいのは、樂に書かうと思はないで、力一ぱいで書かうと努力なさい。さうしたら、もつと〳〵力のこもつたものが出來ます。

▽小口春子さんも上手です。あなたは女だけに情緒があふれてゐて、何を書いてもやさしい情しさが出てゐます。しかし、今度の『湖にて』はあなたとしては上出來とは云へない方です。少しのんきに書き過ぎてゐるとこが見えます。もつと力のこもつたものを書いてごらんなさい。

▽沖津清琉さんはひやうきんなものを書くのがお得意です。したがつて、一と意氣に書いてしまふやうで、その間に何の工夫もなくやるやうです。これもその人によつてはいゝ事ですが、しかし、今度の『ラジオ』はまづ平凡の出來です。

▽大塚登美子さんの『家のぼち』と大内力さんの『鳩のお墓』共に幼い人の作です。別段とりたてゝいふほどのものではありませんが、幼い人のものらしい面白さがあります。

▽今月掲載出來なかつた中に河邊春美子さん、中里素行さん、澁谷榮治さん、茅原久美子さん、芝地一嘉さん、中村遼生さん、齋藤邦一さん、高橋長一さん、島野半平さん、高木實さんなどのいゝ作がありましたが、誌面の都合上殘念ながら掲載出來ませんでした。

童話の選後に

齋藤佐次郎

▽今月も集つた數は驚くばかりの澤山でした中で、左の十四篇が佳作中の佳作として選び出されました。

『かなしい玩具』『燒いた豆』『小使と蜜蜂』『ひやうたん』『煙草の好きなお爺さんの話』『だだつ子牛』『或る朝の日本武尊』『西瓜畑のこほろぎ』『みき枝ちやん』『黒んぼの神樣』『金魚の御飯』以上の大人篇の十一篇と小人篇では『たいけ峠』『乘合馬車』『六助さんと狐』の三篇です。

○以上の十四篇の中から推薦候補作として左の五篇を擧げることにしました。

（大人篇）

かなしい玩具（吉田初太郎作）

燒いた豆（加藤嘉久二作）

（小人篇）

たいけ峠（川口平一郎作）

乘合馬車（伊藤昌星作）

六助さんと狐（河野青雨作）

○小人篇が擧つたのは愉快です。『たいけ峠』は故郷の傳說をあつかつたものですが、十四歳の作者がこれだけに面白く書けたのは賞讃しなければなりません。かざつたところがなくて、素朴に故郷の傳說を十分にいかしてゐます。

○大人篇の『かなしい玩具』は普通の型を一寸破つた創作の妙味があります。なるほど童話だなと思はせる面白味もあつて、なか〳〵いゝ作です。あれで、少年の氣持ちと言葉との現しかたに、もう少し幼い子らしい味が出たら、ずつと作の價値が出ると殘念に思つたのです。

『燒いた豆』は、靜かなしんみりした氣分を持つたいゝ作ですが、あれでもう一寸作者に力があつたらと、これも惜まれたのです。

○この外に『少年鼓手』を思はせるやうな『或る朝の日本武尊』や『小使と蜜蜂』『ひやうたん』『煙草の好きなお爺さんの話』など、相當力のある作である事を特筆します。

『金の星』本文用紙に就て

十月號から『金の星』の本文の紙を改めました。この紙は理想的雜誌用紙として英國で非常な評判になつてたりますので、わが社もそつぜんして此の紙を使ひたいと思ひ約半年前にスエーデンの大製紙工場へ注文しました。漸くにして船に積まれて横濱港に入りましたので、十月號から使ひはじめた次第です。ありふれた雜誌用紙と違ひ、厚さと品のあるのが、日本の製紙工場で出來ない特色です。

前號樂譜歌詞の正誤

前號樂譜『しやんこ〳〵お馬』の歌詞『ほしくさたべた』（五、六小節）は『ほしぐさたべに』の誤り。十四小節の『こうま』は『おうま』の誤り。

編輯室より

（記者）

○いよ〳〵秋が深くなりました。武藏野の秋のおもむきはないにしても、編輯所の庭にも、ゆかしい秋がふけて行きます。落ちついて仕事が出來るやうになりました。

○今月は『秋の夜長お話會』といふ附錄をつけました。いろ〳〵面白いお話が出ましたから、皆さんにも面白く讀んでいたゞけたと思ひます。

○金の星は讀物の方面に今やいろ〳〵と新しい試みをやつてたりますが、挿畫の方面に大家を迎へてます〳〵美しい雜誌を作るために努力してなります。川上四郎先生も次號から本誌のために御盡力下さいます。

新らしく出た本

○世界童話叢書 第八編 **エジプト童話集**

（永橋卓介編、高坂元三裝幀）

ピラミッドの繪を見ても、如何にエジプトが、古い謎のやうな國であつたことがわかります。その國に生れた童話は、またいかに他の國とかわつた面白い話であるかゞ知られます。本編はエジプトの童話十三篇を集めてある珍らしい本です。裝幀は例の通り發行所の自慢の美しいものです。（四六判箱入三〇〇頁、挿畫三色版外十數葉、定價壹圓五拾錢、東京市外上駒込二八金剛社發行）

○**荒木又右衛門**（小久保陽三編）

（裝幀、挿畫、池上、石橋、高坂三畫伯）

少年少女文藝講談叢書の第一編として出たのは本書です。伊賀越仇討で有名な荒木又右衛門の話は、いかに世の少年少女に喜ばれるでせう。なほ引つゞいてお馴染の英雄、豪傑の話が、著者獨特の面白い書き方で、皆さんの御覽に入れるとのことですから、定めて好評を受けることゝ思はれます。（四六判二一二頁、定價壹圓、東京市外上駒込二八金剛社發行）

○**チベット童話二十篇**

（澁澤青花著、江島武夫裝幀挿畫）

世界の神秘國と云はれてゐる、チベットの童話はんどなものだらうトこう云つただけでも讀んで見たくなります。前篇、後篇と分れて二十篇の話ばどれも面白いが、後篇は殊に珍らしいものです。それに裝幀、挿畫は實に他に類のないよい出來です。この本は東洋童話叢書の二編ですゞ四六判箱入二三四頁、定價壹貳拾錢、東京市麴町區四番町七第一出版協會發行）

世界少年少女名著大系第廿六編

○**新ロビンソン漂流記**

（金の星社編、柳田謙吉裝幀挿畫）

昔からあるロビンソンをお讀みになつた方は、是非この新ロビンソンを見ればなりません。スキスを出た汽船が大暴風に出逢ひ南洋の無人島で難破してから、生き殘つた一家族六人が、さまゞ〳〵の事に出逢ふ面白い物語りです。（四六判箱入一七七頁、家價九拾錢、東京市本郷區勗坂町金の星社發行）

○世界少年少女名著大系第廿八編 **少年鼓手**

（金の星社編、松政德次郎挿畫）

ナポレオンのアルプス越えに雪なだれに逢ふ世界に名高い勇敢な少年鼓手の話を始め、血湧き肉躍る物語十篇を集めてあります。何れも興味の深いばかりでなく、少年少女の讀んで教訓になるものばかりです。新ロビンソンと共に金の星社の自慢の本です。（四六判箱入一六八頁、定價九拾錢、東京市本郷區勗坂町金の星社發行）

═自由畫掲載外佳作═

井上 登（和歌山）　田中 義明（和歌山）
東政 二郎（東京）　岩谷 貞三（秋田）
沖津 清流（東京）　遠藤 逸平（山梨）
依田 博（不明）　遠藤 房（和歌山）
鈴木 一郎（東京）　吉田正太郎（京都）
大西正五郎（京都）　大家 英雄（和歌山）
横井 修吉（京都）　木村 禮次（北海道）
吉田 正典（東京）　淵根トヨ子（神奈川）
鵜崎 公雄（福岡）　星野 晃（東京）
雨宮 恒之（山梨）　岩谷 天藏（秋田）
三浦 久一（和歌山）　中谷 友一（和歌山）
田中 由造（和歌山）　森田 友晴（和歌山）
齋藤 好治（和歌山）　土橋 虎雄（和歌山）

═綴方掲載外佳作═

小口壽まよ子（長野）　河邊藤美子（神奈川）
中里 素行（神奈川）　澁谷 榮二（神奈川）
茅原久美子（神奈川）　芝地 一惠（兵庫）
中村 速生（大阪）　齋藤 邦一（和歌山）
高橋 長一（青森）　島野 牛平（神奈川）
高木 實（東京）　小野田福子（東京）
石神 洋子（神奈川）　川口平一郎（新潟）
河本 守正（神奈川）　鈴木 萩野愛知）
橋爪 俊子（德島）　松田伊都子（東京）
岡田 シン（埼玉）　古谷 みい（茨城）
木藤 浦子（神奈川）　吉野フミ子（東京）
細川 公子（石川）　瀧 貞雄（和歌山）
千葉 テル（千葉）　佐久間秀夫（千葉）
高野 修次（東京）　田中 重男（福岡）
木村 綱（東京）　丸山 妙（東京）
藤岡 清（長野）　佐藤 貞（岩手）
森田 友晴（和歌山）　尾藤 昌子（愛知）
原田小太郎（神奈川）　東 政二郎（京都）
門 伊助（京都）　宮川 光子（福岡）
久山マキノ（山口）　矢田 妙子（山口）

═童話掲載外佳作═

南園龍武雄（愛知）　新井 青一（東京）
武田 幸一（福岡）　崔 仲夫（愛知）
堀切 友雄（千葉）　加納九迷雪（群馬）
河野 青雨（朝鮮）　鴨井 都夫（東京）
千葉 瑞學（宮城）　井上 勇（新潟）
中川しげよ（宮城）　原田小太郎（神奈川）
細川 公正（石川）　津田繁次郎（長崎）
駒田 灯香（京都）　中村 速生（大阪）
中坂夜詩路（東京）　中村かほる（東京）
佳吉 蝶二（東京）　藤田 親昌（神奈川）

═童謡掲載外佳作═

【大人篇】

高埜 牧童（宮城）　河野 牧草（朝鮮）
高谷正太郎（山梨）　加藤 幹雄（宮城）
蘿野ふくを（大阪）　駒田 灯香（京都）
山野 遙雄（長崎）　吾津 慶藏（千葉）
東 あきら（大分）　三浦 青涙（山形）
田中 重雄（福岡）　村上ひとひさ（岩手）
田宮 敏（山形）　志村治之助（東京）
田中 初夫（朝鮮）　佐久間秀夫（千葉）
佐久間きく（千葉）　田島 英二（神奈川）
秋津 和夫（不明）　長谷川行雄（東京）
大熊 清司（埼玉）　葛 江兒（千葉）
鈴木伊三郎（千葉）　高橋 五村（茨城）
葛木 和夫（高知）　高橋 長一（青森）
室町かづ緒（大分）　中村 武男（東京）
松本 哀秋（北海道）　松江いはを（山口）
西里 紫水（熊本）　近藤 健二（神奈川）
佐藤源五郎（宮城）　村瀨 修三（岐阜）
松井 雅夫（福岡）　勝山喜一郎（靜岡）
木本 一郎（大分）　山崎 正（香川）
堀川ひで緒（茨城）　栗原正太郎（神奈川）
河邊すみ子（神奈川）　中村 速生（大阪）
郷間僕一郎（栃木）　種田 實（東京）
沖津 清琉（東京）　福井 勝秋（東京）
井上千代三（鹿兒島）　神藤 正七（東京）
椿名みのる（東京）　岸 文二（東京）
山賀多新二（東京）　小堀 義夫（靜岡）
大野 我羊（千葉）　伊藤 仲子（岐阜）
赤平 重二（青森）　内田 好雄（神奈川）
椿川とし子（東京）　香取萬三郎（千葉）
廣瀨あきら（東京）　沼田 滋夫（神奈川）
東 英彦（神奈川）　衛藤 隆（福岡）
千葉 仔朗（東京）　中川 芳雄（東京）
小野伴三郎（新潟）　高木 寛二（北海道）
茱木 七郎（神奈川）

【子供篇】

小野寺福治（岩手）　茅島 光行（栃木）
平泉 祐義（東京）　河野 青水（朝鮮）
笛木 とき（群馬）　東弘 房子（山口）
田角 忠義（東京）　高木 實（東京）
細川 公正（石川）　金子 あさ（埼玉）
鈴木 ヨシ（埼玉）　鎌田 タカ（埼玉）
島村あさ子（埼玉）　安美 學子（茨城）
大和田廣（茨城）　森田 友晴（和歌山）
川又とみ江（茨城）　神内 潔（東京）
石井 すみ（千葉）　佐々木之子（千葉）
山野 勝子（千葉）　滝川 登（千葉）
高橋 精一（岩手）　小川 武子（埼玉）
久慈 善吉（岩手）　熊谷善次郎（岩手）
齋藤 トシ（福島）　大久間清子（埼玉）
鳥居 やえ（不明）　柳原 八重（朝鮮）
山本 夏彦（東京）　山根 明（山口）
岡村 寛（岡山）　伊藤武之輔（新潟）
桑名ゆり子（兵庫）　佐藤 貞（岩手）
鈴木 文子（宮城）　松本 德二（愛媛）

═新誌友名簿═

加納 狂純（群馬）　加藤 芳子（愛知）
山崎まち子（新潟）　森田 清（茨城）
原田小太郎（神奈川）　野澤 竹代（栃木）
小玉禮之助（秋田）　森岡たか子（東京）
鈴木 元吉（千葉）　木下フク子（東京）
内磨勝次郎（長野）　高橋 保（廣島）
西村 豊遠（大阪）　金井芳太郎（新潟）
山口 秀子（東京）　（以下次號）

（讀者だより）

▲表紙の美しくなつたのは、とても嬉しい。流石は岡本さんだ。親友阪野潤の童謠が推薦になつた。彼の爲に萬歲を三唱する。（大阪 渡り鳥社内 都外川藤）

△都外川さんずいぶん久しぶりですね。なんだか懷かしさが込み上げて來ます。（一記者）

▲金の星子さんありがとう。あたしの出したスケッチを當選さしていたゞいてありがとう。表紙は、一番すきな岡本先生の繪れ。いつまでも〳〵さうしてれ、それから岡本先生はお元氣なの？ ではさようなら。（熊本 山村カヱ）

△自由畫の御當選、おめでとう。岡本先生は御壯健で毎日畫をかいてゐられます。（記者）

▲久しく投書を怠つて居りましたが、最近、湊君、阪野君、檀上君、日高君、名方君、五味君、森君、西野君、都外川君、鄭築君、西野君、茱木君等揃ひも揃つて懷かしい人達の盛に活躍して居られるのを見ては、どうでも御仲間に入れて貰ひたくなつてしまひました。新進の皆樣のところへ古い頭で御仲間入りが出來ますかどうか甚だ怪しいものですが、十二月發表分から精々勉强して投書するつもりで居ます――いつまでも若くいつまでも自由に――を標語として進んで行くつもりで居りますから、また諸兄からも――いつまでも友達に――お願ひします。（群馬 青柳花明）

▲九月號佳作欄に、我が藤ながら熱愛する、吉村、茱木、兩君の作品が載つて居りましたのを、大變に心强く思ひました。（同僚）

△えゝ吉村さん、茱木さんの近頃の御進筆には、編輯部一同驚かされてゐます。せつかく御健筆をお祈りします。（編輯子）

▲金の星に投書をつゞけること三年ですやう〳〵の事で今月推薦。厚く御禮申上げます。石の上にも三年かなア、とツク〳〵思ひました。それから本誌の讀者が京阪神にもさぞ多からうと存じます。『金の星の會』をもよほしたいと思ひますから、御希望のお方は、（大阪市東區岡山町三五二 藤野富久雄）まで至急に御申込み下さいますやう。期日は申込通知が着次第お知らせ申します。（大阪 阪野潤）

△童謠の推薦をお喜び申上げます。『金の星の會』を御從しになりましたら、集會の御情景御知らせ下さい。誌上に揭載したいと思ひます。（記者）

▲齋藤先生、毎月私の拙い綴方を見て下さつてありがとう御座います。私はもう十五にもなつてゐるんですが、やつぱりあの面白い綴方の味は忘れられません。毎日熱心に勉强してゐます。（大阪 中村速生）

△月々送られて來る作品の上に、あなたの熱心な御勉强ぶりがうかがはれます。來月もまた素晴らしいのを御見せ下さるやうお待ちしてゐます。（齋藤生）

▲いつの間にか秋になつてしまひました。もうこほろぎもコロ〳〵と啼いてゐます。金の星十月號も本日着きました。推薦童謠、阪野潤氏の波の音には感服させられました。それから表紙がだん〳〵よくなるので嬉しく思つてゐます。口繪も先月號に劣らぬと思ひました。童謠欄の島本氏、村山氏、御振ひです。終りに金の星社の諸先生の御健康を祈ります。（TK生）

△こほろぎは、寒むさが來るから來るからと云つて、老のかげで啼いてゐるのでせう。TKさん。あなたの御名は毎月誌上で拜見してゐますが、ほんとうの御名は何と云ふのでせう。いつも元氣でみえるのは嬉しいけど、誰だか解らないのがものたりません。（給仕）

▲記者樣お變りありませんか、おうかゞひ致します。しばらく投書せぬ間に、本誌がめき〳〵發展しました事を嬉しく思ひます。バルコニー夜話、フランダースの少年、怪蕈星等皆面白く、何べんも妹達に讀み聞かせてやりました。それから妹達（好子、正子）も投書します。どうかよろしく、私達も誌友にして下さい。（石川 山本松子）

△ほんとうにお久しぶりでしたね、私達も皆樣の御氣に入りそうな讀み物で、金の星の誌上をうめたいと思つて、すいぶん苦しんでます。好子さんや正子さんによろしく。（記者）

▲空がとても高いです。青い空には一點の雲もありません、秋！そうです。秋が來ました。詩心のわく秋が！ 齋藤先生お變りもありませんか。給仕君もご丈夫でせうね。この氣持ち良い秋には給仕君も詩心の沸いて來るのを禁じ得ないだらうと思ひます。同封で童謠三篇お送りしましたからよろしく。金の星の諸兄お身お大切に。さようなら。（岸 文二）

▲數日來關西方面で旅行に暮して、今朝歸京致しました處、あちらの本屋で横目ににらんで通つて中を見やうかと思ふひと考へました御誌を手にすることが出來ました。まだ讀み終りませんので、色々と申上げることは出來ませんが、小馬が御配付になつたと誌上で拜見いたしましたので、新米誌友、不作法を省りみず、まだ落手いたしませぬ故、早速御送付ありますやうお願ひ申上げます。尙あちらでの作品二三ありますが、せい理の上御批判を仰ぎたいと思つてなります。先はお願ひまで、草々。（東京 本多鉄麿）

▲野口先生、毎月拙劣な作品ばかり投書しまして、先生の御忙しい御身體を御煩せ致しまして誠に申譯がありません。私も近い中に推薦にしていたゞく樣に大いに勉强致しますから、それまで御面倒ですが御願ひ致します。先月私は病氣で寢てゐたものですから、つい投書しなく、私はホントウに殘念でした。新聞で見ますと、東京は大變に暑いそうですから、特に御身體を大切に。金の星愛讀者のために御働き下さい。先生の御健康を祈ります。（小野伴三郎）

△あなたの御勉强ぶりが、童謠の上にもうかゞはれます。此の後ともに御勉强なさるやう、望みます。（野口）

▲暑さ嚴しき折柄記者樣には隨分お忙しい事とお察し申上げます。さてこの度私事誌友の仲間に入れていたゞいて初めての投書です。傑作のつもりです。下手でも笑はないで見て下さい。これから先、たくさん投書するつもりです。宜敷く御指導下さる樣お願申上げます。終りに記者樣方御自愛專一にではこの次に。（島 夕波）

▲眞黑に海で遊びまはつた、暑しかつたつた夏もいつか過ぎて、靜かな秋になりました。萩の葉のそよぎにも風の音にもしみ〳〵と秋らしさが感じられます。今美くしい金の星を頂きました。岡本先生の表紙畫大好きです。何と云ふ明るい可愛い繪でせう。齋藤先生、有難う御座いました。拙ない作を賞に入れて下さいまして、御丁寧な評まで頂いて本當に嬉しく存じました。どうぞ此の上ともによろしくお願ひ致します。皆樣お體お大切になさいませ。（逗子 河邊すみ子）

▲僕もこれから君達の仲間入りをしましたよ。どうか今後ともによろしくたのみますよ。それから投書の仕方はこれでよいのですか、終りに本誌の發展を祈ります。（東京 高野修次）

△投稿の仕方はあれで結構です。金の星の卷末に記してあります應募規定によつて下さればいゝのです。あなたの御健筆を祈ります。（編輯子）

▲大變に暑くなりました。御社は月を重ねるにしたがつて、益々御盛昌の事と思ひます。今回あんな見るにも見られないやうな見ぐるしい綴方を誌上にのせていたゞいて誠に有難う御座います。又粗末な綴方一篇をお送り致しますから、どうぞよろしくお願ひ申ます。齋藤先生にもどうぞよろしく。（山形 二關勸）

▲金の星九月號は內地へ行つてゐだ爲め、見るのが五日程後れました。表紙が岡本先生になりました。如何にも九月にふさはしい新鮮な繪です。口繪もまた寺內先生特意のものです。バルコニー夜話は、本誌でなくては見ることの出來ぬものです。逗崎先生の花々草はいゝ譜でした。竹久先生の挿畫があつたことを喜びます。毎月かいて下さる樣におつしやつて下さい。皆さんお體を大切に。（京城 河野砥吉）

△九月號の出來ばえが餘程よかつたとみえて、方々からお褒のお言葉をいたゞきました。編輯員一同、働きがひがあつたと喜んでゐます。この後も、毎月お褒のお言葉をいたゞくやう、金の星の內容をゆたかにしたいと思つてゐます。（編輯部）

金の星社 出版だより

十一月號

近刊書のお知らせ

十月中に左の四冊が發行の豫定になつてをります

○ジャンバルヂャン（あゝ無情）（名著大系ノ二十八）

○俵はごろ〳〵（金の星童謡曲譜ノ十二）

○ほら博士（世界名作童話ノ一）

○魔法の薔薇（世界名作童話ノ二）

『世界名作童話大系』を發行するに就て

金の星社も皆さんの御援助によつてます〳〵盛んになつて參りました。名著大系も既に三十篇近くなり、尙後の十篇も着手してたりますし、偉人傳も近く十篇となつて一と先づ完成に近づいてをります。その外の出版も童版また童版の有樣で、今では少年少女の出版は金の星社でなければならないやうにいはれるやうになりました。

そこでいよ〳〵第二の大計畫として着手したのが、この『世界名作童話大系』であります。毎月二三册づつ發行して行つて百册で完成しようといふのですから、全部を完成するのには三四年位もかゝりませう。兎に角必ず二册以上發行して行きますから隨分すばらしい計畫として出版界から注目されることでありませう。

たゞ世界の童話を集めるといふのでなく、これこそ、本當にいゝ童話であるといふのだけを世界各國から集めるのです。しかも、切れ〳〵の短いお話では面白くありませんから、大體に一册で一つのお話になるやうないゝものばかりを集めます。

世界には隨分澤山の面白い、スチキなお話があります。それを片ッぱしから嚴選して完全な日本語にして、皆さんの讀みやすいいゝ文章にして發表するのです。

ですから、この叢書を最初から一册づつ買つて書棚にならべるとやがて、家庭の立派な童話の圖書館が出來る事になります。裝幀や挿畫は、金の星社が自慢の立派なものですし、内容も一々名家をわづらはした模範的のものでありますし。尙、定價なども、これまでにどこの出版社からも出たことの無い安い定價ですから、買ひやすく誰でもらくに愛讀することが出來ます。この『世界名作童話大系』こそ本當に皆さんから歡迎されなければならない本です。是非讀んでいたゞきたいと存じます。

▽俵はごろ〳〵の裝幀

出版が後れてなりましたが、いよ〳〵發行になりました。表紙の裝幀は初山滋畫伯が非常に立派なものをかいて下さいました。いよいよ此の本の價値を高めました。

▽『大楠公』

偉人傳の第八編として三島霜川先生の大力作『大楠公』が出ます。楠正成の話を書いた本は外にも出てゐませうが、この三島先生の『大楠公』ほど歴史を正しく研究して書かれた立派な本はありますまい。三島先生は戦記歴史の研究では非常に深い方です。その深い研究をもとにして、苦心に苦心を重ねて書き上げられたものですから實に立派な本です。楠正成といふ人がどんな偉い人であつたといふことが、この本を讀んだ人にはよくわかります。また、正成が北條の大軍を向うに廻して、あらゆる智慧をしぼつて戦つた幾度かの戦爭の話も出て來ますが、實に面白いものです。十一月中に出版の豫定です。

▽ロシヤ英雄ピーター大帝

ロシヤの英雄ピーター大帝の話は

國語讀本にも出てゐますし、また活動寫眞になつたりして有名になつてゐます。野蠻國ロシヤを文明國ロシヤに一足とびにした偉人だけに、その一生も實に大したものです。あらゆる艱難を通つてゐます。幾度か死ぬやうな目にあつてゐます。その間からスバラシイ働きをやつてゐるのですから、誰が讀んでも深い〳〵教訓を受けるものです。十一月出版になります。

『ジャンバルヂャン』の序文

久米舷一

サイクトル・ユーゴーは一八〇二年に、佛蘭西のブザンソンで生れました。そして、七ツの時から十二になるまで、ある靜かな僧院で暮しました。崩れかけた石塀、それに纏りついた若い薔薇、泉の湧き出る深い森から云ふ處で育つたユーゴーは、小さい時から、大きう詩を作る事が上手で、二十才になつた頃にはもう詩壇一方の旗頭と仰がれてゐました。

ユーゴーは大きくなつてから、名高い政治家となり、又、詩、戯曲、小説などに、不朽の名作を遺しました。

この『レ・ミゼラブル』は、ユーゴーが一八五八年から一八六二年に至るまで五年間の苦心になつたもので、歐米諸國はもとより、我國にも早くから紹介されて、幾多の人々に愛讀されて居ります。

本書は、レ・ミゼラブル中の主人公『ジャンバルヂャン』に就いて少年少女達が讀んで面白く、分りやすいやうに書改めたものです。ジャンバルヂャンは若い時、たッたパン一片を盜んだために、十九年の永い間、牢屋に入れられてゐました。そして漸くの思ひで外へ出たかと思ふと、今度は世の中の人々は、

『彼奴は前科者だ。』

と云つて、誰れも相手になつて呉れる者がありません。相手になつて呉れないばかりか、皆んなしてジャンバルヂャンを追ふはして、いぢめようとするのです。その間に立つて、ジャンバルヂャンは、どうして毎日を送つたでせうか。

ジャンバルヂャンはどんな辛い時でも、泣言一つ云はずに、自分に與へられた仕事を、どし〳〵とやつて行きました。本書を讀んで下さる皆樣方は、きッとジャンバルヂャンが大好きになつて下さることゝ思ひます。

本社發行圖書の評判

ハムレットを讀む

朝鮮京城若草町一〇六　河野砥吉

私は内地へ旅行しました。出發する日に汽車や船でつまらないからと思つて、本を買ひに本屋へ行きました。いろ〳〵な本をあさつて見ましたが面白さうなのがありません。そこで本屋の人にきゝますと、『ハムレットはいかゞですか。』といつて見せてくれました。表紙を見ると金の星社編といふ字が見えました。金の星社編ならきつと面白いと思つてそれを買ひました。汽車でゆれながら讀みました。そして買つてよかつたとつく〳〵思ひました。初めから終まで涙なしでは讀めぬ悲しい物語でした。さすがは金の星社の本だけあると思ひました。皆さん金の星社の本は皆面白くて美しく安いんですよ。私からおすゝめ致します。

母を尋ねて三千里を讀んで

芝區三田四國町二ノ二　千代田勝弘（十四）

僕は、先に第十四編の『四遊記』を讀んでから、金の星社の本は、面白くて、美しくて、安い、のを感心してゐました。ですから僕はこの『母を尋ねて三千里』を買つて戴きました。題の通り、たつた十三の少年が三千里の遠い所まで母を尋ねてゆくと言ふ可哀そうな話や、船が難破した時、少女の身代りになつて死んだ少年の美しい話の他に可憐な少年少女を主人公とした、涙がなくては讀めない物語が五編もあります。僕はどれもどれも泣かされてしまひました。ほんたうにいゝためになるお話です。寺内先生の裝幀と挿畫は本書をきれいに飾つてゐます。みなさんもぜひ讀んで御覽なさい。安くて面白いばかしでなく、美しいためになるお話ですから。

懸賞創作募集

《少年少女の創作》

自由畫……山本鼎先生選
童謡……野口雨情先生選
綴方……齋藤佐次郎先生選

【注意】題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何種出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、童謡や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は十月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は一月號、宛名は東京市本郷區勤坂町三五九番地金の星社。

《一般讀者の創作》

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

【注意】童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づゝ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づゝ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢（送料壹錢五厘）
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい

振替口座東京五九五九六番

【注意】
▽送金
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十五年十一月九日印刷納本（毎月一回）
大正十五年十一月一日發行（一日發行）

東京府豐野川町中丸百二十七番地
編輯兼發行人　齋藤保

東京市麻田區區町三丁目二十五番地
印刷人　小嶋安之助

東京市麻田區區町三丁目二十五番地
印刷所　安藤堂
電話麻田二二二三番

東京市本郷區勤坂町三五九
發行所　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

世界名作童話大系いよ〳〵發行

金の星社の大計畫の一つとしていよ〳〵出版に着手しました。この大系は世界の有名な、あらゆる童話を百册にまとめて出版するのでありますから、童話出版として眞に空前の計畫であります。

各編とも、金の星社が嚴選に嚴選を加へた童話でありますから、何れもすばらしいものばかりです。しかも、箱入りの、厚い立派な本が、僅かに六十錢といふ未だかつて無い定價で發賣されるのです。是非一度書店に立つて、本書が如何なる本であるかを御覽下さい。

十月十日發行

第一編　ほら博士

第二編　魔法のバラ

四六判箱入美本・定價六十錢
内容一四〇頁・送料六錢

ほら博士といふほど大ぼら吹きの男爵の物語です。實になんともかんともお腹をかゝへて笑はずにはゐられない面白いお話です。まア一度讀んでごらんなさい。

惡い王子の爲めに國を追はれた優しい王子が女神から魔法のバラをさづけられ、そのバラのおかげで、あらゆる困難から救はれるといふ面白い〳〵お話です。

金の星社發行名著目錄

沖野岩三郎先生著

父戀し

紀州の海岸に起つたあはれな物語である。父は海へ漁に出たまゝ行方不明になつて了ふ。後に殘された姉弟は母と共に父の行方を尋ね、遂に滿洲の空でめぐり會ふ長篇寫話である。

金一圓　送料金六錢

沖野岩三郎先生著

森の祈り

これ程清く美しい物語が他にあらうか。主人公は愛らしい少年と少女とである。家は破產し住みなれた家は人手に渡り、母は小學教員となる。少年と少女は都へ出て奮闘する。

金一圓八十錢　送料金六錢

沖野岩三郎先生著

勞働の少年

鑛山に働く二人の少年の物語である。父親は暴動の爲めに殺されて了ふ。孤兒となつた二少年は如何にして暮したか。その運命を書いた興味深い雄大な長篇である。沖野先生の大力作である。

金一圓二十錢　送料金六錢

沖野岩三郎先生著

赤い猫

沖野先生の傑作として何人も推奬してゐる名篇十五篇。これこそ讀本として少年少女必讀の書である。日本最初の童話讀本にして、又日本の童話讀本として最高のものであるとの評を得てゐる。

金一圓　送料金六錢

沖野岩三郎先生著

金のつるべ

『赤い猫』と共に全國的に有名になつてゐる名著である。單純な教訓でなく面白おかしく讀んで行く内に、自ら深い教訓を與へられるのが沖野先生獨特の妙味である。

金一圓　送料金六錢

金の星社發行名著目錄

野口雨情先生著

青い眼の人形

野口雨情先生の最も圓熟せる時代の傑作を集めた本書は日本童話界の珍寶ともいふべく研究家の座右になくてならぬ名著であります。頒裝と挿畫は豐富で現代の大家を網羅し一大藝術の殿堂の觀あり。

金一圓八十錢　送料金六錢

三宅房子先生譯

家なき子

佛國の大文豪マーローの世界的名著である。名家に生れ乍ら不思議な運命にもてあそばれ旅役者に賣られて旅から旅をさすらふ哀れな孤兒の物語である。フランスの家庭では必ず本書を備へてゐる。

金一圓八十錢　送料金六錢

三井信衛先生譯

家なき娘

『家なき子』と同樣文豪マーローの作になり世界有數の家庭小說である。旅の間に兩親を失つた少女バリンヌが驢馬を道づれに、まだ見ぬ父を尋ね行き艱難辛苦する大傑作である。

金一圓九十錢　送料金六錢

小島政二郎先生譯

狼少年

印度の大自然の中で狼に育てられた不思議な少年の物語である。熱帶の密林の中で猛獸と共に暮しつゝ樣々の冒險を行ふ男壯無比の大雄篇にして、文豪キップリングの世界的名作である。

金一圓五十錢　送料金六錢

武井武雄先生著

ブウ太郎鍛冶屋

日本に武井武雄のある事は日本童話界の一大珍寶であるといはれてゐる程有名である。その武井先生が自作中最も自信のある童話に澤山の美しい挿畫を入れて理想的繪入童話集にしたのが本書である。

金一圓　送料金六錢

ライオン歯磨

煉製チューブ入

夜、ねる前の三分間、きっとライオン歯磨を使ひませう。むしばを防ぎ、歯を白くし、氣持をよくして、元氣に遊びませう。